

# 奈良市埋蔵文化財調査概要報告書

(第1分冊)

平成9年度

1998

奈良市教育委員会

# 奈良市埋蔵文化財調査概要報告書

(第1分冊)

平成9年度

1998

奈良市教育委員会

## はじめに

奈良市は、奈良時代の日本の都であった平城京があったため、地下に数多くの文化財があります。近年の発掘調査では、奈良時代の遺跡だけではなく縄文時代や弥生時代の遺跡が発見されるなど、先人の足跡が着実に確かめられるようになってきました。しかし、これまで市街地に集中していた開発が、最近は周辺の地域へも広がっており、文化財をとりまく環境はきびしさを増しております。このような現状から埋蔵文化財を調査し、保護していくためには、何よりも市民の皆様方の文化財の保護に対する御理解と御協力が必要となります。

本書は、平成8・9年度に行った埋蔵文化財の発掘調査の成果の概要をまとめたものです。多くの皆様に御活用いただき、奈良市の埋蔵文化財に対する理解を深めていただければ幸いです。

最後になりましたが、本書の作成にあたって御指導、御協力をくださった関係機関の皆様に対しまして、厚く御礼申し上げます。

平成10年3月

奈良市教育委員会  
教育長 河合 利一

## 例 言

1 本書は、平成9年度に奈良市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査のうち、国庫補助による緊急調査および公共事業に係る調査についての概要報告を収録したものである。また、昨年度に実施した発掘調査のうち平城京第363次調査、第364次調査、第373次調査、西大寺旧境内第10次調査の概要も併せて掲載した。なお、本年度の発掘調査のうち、平城京東市跡推定地第21次調査、発掘原因者の費用負担による発掘調査については別に概要報告書を刊行する。また、平城京第386次調査、正暦寺第2次調査については事業完了時に、史跡大安寺旧境内74次調査（史跡大安寺旧境内保存整備事業）については整備事業完了時に報告する予定である。

2 発掘調査は下記の体制で実施し、各調査の担当者は発掘調査一覧に示した。

|             |      |  |      |      |
|-------------|------|--|------|------|
| 社会教育部 文化財課  | 課長   | 安田龍太郎                                  | 主幹   | 森川倫秀 |
| 埋蔵文化財調査センター | 所長   | 高谷明男                                   |      |      |
| 庶務係         | 係長   | 杉村武史                                   | 事務吏員 | 山形和広 |
| 調査第一係       | 係長   | 西崎卓哉                                   |      |      |
|             | 技術吏員 | 立石堅志 一好美穂 鐘方正樹 松浦五輪美<br>安井宣也 久保邦江 宮崎正裕 |      |      |
|             | 技術員  | 人塙淳司 原田香織 細川富貴子                        |      |      |
| 調査第二係       | 係長   | 篠原豊                                    |      |      |
|             | 技術吏員 | 森下浩行 秋山成人 武田和哉 中島和彦<br>原田憲二郎 久保清子 池田裕英 |      |      |
|             | 技術員  | 山前智敬                                   |      |      |

- 3 発掘調査と本書の作成にあたっては、奈良国立文化財研究所、奈良県教育委員会、奈良市文化財保護審議委員会など関係諸機関から御指導と御協力を賜った。記して感謝いたします。
- 4 発掘調査と出土遺物の整理には、埋蔵文化財調査センターの作業員、補助員の方々のご助力を得ている。記して感謝いたします。
- 5 各発掘調査の次数は、奈良市教育委員会が実施した調査に付した遺跡ごとの通算次数である。
- 6 本書の執筆は埋蔵文化財調査センター職員が分担してを行い、文末に文責を明らかにした。
- 7 本書で使用した遺構の分類記号や遺物の名称、型式は奈良国立文化財研究所および奈良市教育委員会の刊行物に準拠している。ただし、遺構番号は調査ごとに付した仮番号である。
- 8 本書の遺構図、土層図に示した座標値は国上調査法に定める国土地理院方眼方位第VI座標系によっている。標高は海拔高である。
- 9 本書の編集は、安田龍太郎の指導のもとに埋蔵文化財調査センター職員の協力を得て、篠原豊一、池田裕英が担当した。

## 本文目次

### I 平城京跡の調査

|                           |                        |
|---------------------------|------------------------|
| 1 近鉄西大寺駅南地区土画整理事業に伴う発掘調査  | 1                      |
| (1) 平城京右京二条一坊一坪の調査        | 第378-6次···             |
| (2) 平城京右京二条三坊二坪の調査        | 第398次···               |
| (3) 平城京右京二条三坊三坪の調査        | 第378-7次···             |
| (4) 平城京右京二条三坊四坪の調査        | 第378-2次···             |
| (5) 平城京右京二条一坊七坪の調査        | 第363・364・378-3・4・5次··· |
| (6) 平城京右京二条一坊一坪の調査        | 第378-1次···             |
| (7) 平城京右京二条三坊十一坪の調査       | 第390次···               |
| 2 JR奈良駅周辺土地区画整理事業に伴う発掘調査  | 22                     |
| (1) 平城京左京四条四坊十六坪の調査       | 第377-2次···             |
| (2) 平城京東四坊大路の調査           | 第377-1次···             |
| (3) 平城京左京四条五坊三坪の調査        | 第377-4次···             |
| (4) 平城京左京四条五坊四坪の調査        | 第377-3次···             |
| (5) 平城京左京四条五坊五坪の調査        | 第373次···               |
| (6) 平城京左京四条五坊七坪の調査        | 第377-5次···             |
| 3 平城京左京四条四坊一・二坪の調査        | 第392次···               |
| 4 平城京左京五条一坊十四坪の調査         | 第395次···               |
| 5 平城京九条大路の調査              | 第397次···               |
| 6 平城京左京四条四坊十一・一坪の調査       | 第379次···               |
| 7 平城京左京八条一坊十五坪の調査         | 第380次···               |
| 8 平城京左京九条一坊十六坪の調査         | 第384次···               |
| 9 平城京左京七条二坊五・六坪の調査        | 第385・387次···           |
| 10 平城京北京極大路・ウナベ古墳外堤の調査    | 第381次···               |
| 11 平城京左京六条二坊十坪の調査         | 第396次···               |
| 12 平城京左京二条三坊三坪の調査         | 第400次···               |
| II 寺院跡・その他の調査             |                        |
| 1 新榮師寺Ⅲ境内の調査              | 第9次···                 |
| 2 史跡人安寺旧境内の調査             | ···                    |
| (1) 北西中房の調査               | 第75次···                |
| (2) 東面回廊の調査               | 第76次···                |
| 3 西大寺旧境内の調査               | 第10・11次···             |
| 4 神功皇后陵古墳隣接地の調査           | 第2次···                 |
| 付編 自然科学分析                 |                        |
| 1 平城京第377次調査における花粉分析と珪藻分析 | 75                     |

半成 9 年度 機器製造業内取扱占ひ割合一覽



平成9年度 地籍調査位置図 (1 / 50,000)

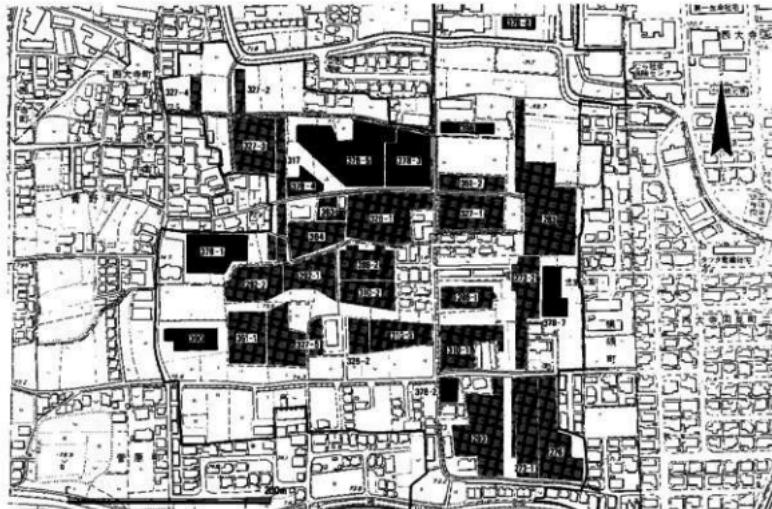
# I 平城京跡の調査

## 1 近鉄西大寺駅南土地区画整理事業に係る調査

この調査は、奈良市が進める近鉄西大寺駅南土地区画整理事業（総面積約32万m<sup>2</sup>）に係って実施した発掘調査である。奈良市教育委員会では、昭和63年度から事業地内の発掘調査を継続して行っており、9年度は臨時交付金事業で7箇所、促進事業、地方特定道路整備事業で各1箇所の調査を実施した。初年度からの調査面積は合計で88,078m<sup>2</sup>になる。平成9年度の調査は、平城京の条坊の坪付でいえば、右京二条三坊一・二・三・四・七・十一坪の六坪に及んでいる。ここでは、それらの調査と、平成8年度に未報告であった臨時交付金事業、地方特定道路整備事業各1箇所の調査を坪ごとにまとめて報告する。なお、遺構番号については、坪ごとに、奈良時代以前のものに2桁の番号を、奈良時代および以降のものに3桁の番号を付している。いずれの番号とも、これまでの各坪の調査からの通し番号である。

平成8・9年度発掘調査および本概要報告書掲載調査一覧

| 調査年度  | 事業名         | 開墾年   | 遺跡名         | 調査地       | 調査期間                | 調査面積                | 調査担当者  |
|-------|-------------|-------|-------------|-----------|---------------------|---------------------|--------|
| 平成8年度 | 地方特定道路整備事業  | 363   | 平城京右京二条一坊七坪 | 青野町32-1他  | H08.10.23～H08.12.04 | 750m <sup>2</sup>   | 龍方・原田香 |
|       | 臨時交付金事業     | 364   | 平城京右京二条二坊七坪 | 青野町42-1他  | H08.11.06～H09.01.29 | 1,550m <sup>2</sup> | 龍方・原田香 |
| 平成9年度 | 臨時交付金事業(縦越) | 378-1 | 発掘区         | 青野町43-1他  | H09.05.06～H09.09.29 | 1,950m <sup>2</sup> | 立石・原田香 |
|       | 臨時交付金事業(縦越) | -2    | 平城京右京二条三坊四坪 | 青原町182-4他 | H09.07.03～H09.09.04 | 440m <sup>2</sup>   | 安井     |
|       | 臨時交付金事業(縦越) | -3    | 発掘区         | 青原町15-1他  | H09.07.25～H09.12.02 | 2,500m <sup>2</sup> | 安井     |
|       | 臨時交付金事業(縦越) | -4    | 平城京右京二条三坊七坪 | 青原町33-5他  | H09.09.22～H09.12.05 | 900m <sup>2</sup>   | 立石・原田香 |
|       | 臨時交付金事業(縦越) | -5    | 発掘区         | 青原町26他    | H09.12.09～H10.03.27 | 2,500m <sup>2</sup> | 安井・原田香 |
|       | 臨時交付金事業(縦越) | -6    | 発掘区         | 西人寺南町2283 | H10.01.16～H10.02.06 | 320m <sup>2</sup>   | 龍方     |
| 促進事業  | 臨時交付金事業(縦越) | -7    | 発掘区         | 青原町188-1他 | H10.01.28～H10.03.27 | 780m <sup>2</sup>   | 龍方     |
|       | 臨時交付金事業(縦越) | 390   | 平城京右京二条三坊一坪 | 青原町289-1他 | H09.12.17～H10.03.27 | 1,200m <sup>2</sup> | 松浦・大庭  |
|       | 地方特定道路整備事業  | 398   | 平城京右京二条二坊二坪 | 青野町2120   | H10.01.26～H10.03.27 | 450m <sup>2</sup>   | 三野     |



近鉄西大寺駅南土地区画整理事業地内の発掘調査位置図 (1/5,000 数字は調査次数)

## (1) 平城京右京二条三坊一坪の調査 第378-6次

調査地は、右京二条三坊一坪内の中央北寄り部分に位置する。調査に先立って試掘した結果、調査地のおよそ南半部分が河川の旧流路にあたっており遺構面が遺存しないことが判明した。そこで発掘区を北半部分に設定して調査を進め、旧流路はその範囲を部分的に確認するにとどめた。

層相は、作土の下に茶灰色砂質土が基本的に堆積するのみで、深さ約0.4mで遺構面の地山となる。地山上面の標高は、概ね68.7~68.6mである。

主な検出遺構としては井戸2基、土坑2個があり、その他にまとまらない小柱穴や素掘溝が多数ある。素掘溝は、南北方向より東西方向をとるもののが概して新しい。確実に奈良時代とみられる遺構は井戸2基のみであり、小柱穴から15世紀頃の土師器皿が出土した例もあった。

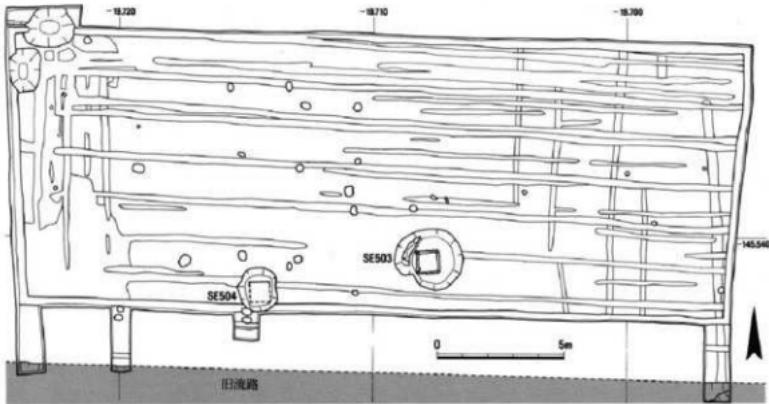
S E 503は、内法約0.9mの方形縦板組隅柱横桟留構造の井戸である。掘形は径2.1~2.4mのほぼ円形を呈し、西側に少し張り出して段がつく。深さは、約2mである。横桟は東西辺と南北辺で段違いに配され、下から2段分が遺存した。縦板は4辺共に5枚ずつあり、枠内の南西隅には残存長190cm、幅12cm、厚さ5cmの縦板1枚が先端を尖らせて打ち込まれていた。北西隅柱は2本隣接してあるが、底の高さを違えているので、造り替えとみるよりは高さの不足を別の部材で補ったと考えた方がよかろう。なお、1枚の縦板表面にΩ型の打刻印が認められた。

S E 504は、一辺0.84mほどの方形井戸枠痕跡を残すのみである。掘形は南北約1.8m、東西約1.5mの隅丸方形を呈し、深さは約0.6mである。枠痕跡内の底には灰色粗砂の堆積と共に拳大の礫が認められた。

(鐘方正樹)



発掘区全景(東から)

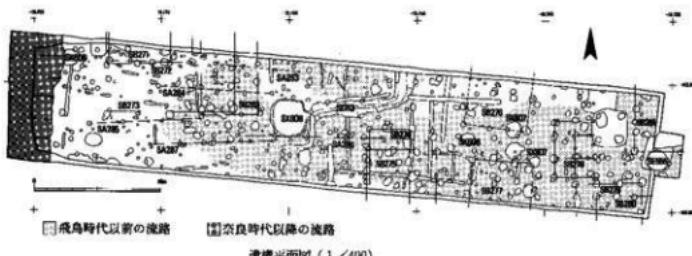


遺構平面図(1/200)

## (2) 平城京右京二条三坊二坪の調査 第398次

右京二条三坊二坪では、平成5年度に坪の南東部で市第283次調査、平成7年度に南西部で市第327次調査（第1発掘区）、平成8年度には市第351次調査（第2発掘区）を実施している。縄文時代の流路、奈良時代の西二坊人路とその西側溝、掘立柱建物、掘立柱塀、井戸、土坑、土器埋納遺構、平安時代の掘立柱建物、掘立柱塀、井戸、土坑、溝の検出及び多量の遺物が出土するなど多くの成果を得ている。今年度は、坪の北西部の様相を明らかにする目的で、東西50m、南北10m（約500m<sup>2</sup>）の発掘区を設定し実施した。発掘区内の層相は、基本的には黒灰色土（作土）・灰色土（床土）の下に、鉄分が多く含む淡黄灰色砂、土器片を多く含む暗灰色砂と続き、地表下0.3～0.4mで淡黄灰色粘土の地山に達する。発掘区東半部には飛鳥時代以前の流路があり、暗灰色砂の下に黒灰色粘土（0.1～0.2m）が堆積する。地山の標高は、発掘区西端で69.8m、東端では69.6mである。造構は、地山上面と黒灰色粘土上面で検出した。検出した主な造構には、掘立柱建物12棟（S B271～282）、掘立柱塀5条（S A283～287）、井戸1基（S E555）、土坑3（S K605～607）、S X806付溝S D113、S X807の他に、飛鳥時代以前と平安時代以降の流路がある。掘立柱建物の主軸は、国土方眼方位に一致しているもの（S B274～275・277～281）と振れているもの（S B271～273・276・282）とがある。遺物整理途中のため詳細な時期は不明だが、奈良時代以降のものと考えられる。掘立柱塀は、掘形の一辺が0.1～0.2mと小さいものばかりで、柱間寸法にばらつきがあり、主軸も国土方眼方位に対して振れている。柱掘形から瓦器片が出土しているものがあり、平安時代以降のものと考えられる。S E555は、掘形が東西2.3m、南北2.6mの平面四角形である。検出面からの深さは1.6m。井戸枠は既に抜き取られており、残存していなかった。井戸枠の抜取り穴からは、奈良時代中頃の土師器・須恵器、瓦片、種子などが出土した。土坑は、いずれも径2.0m前後の平面円形の掘形である。検出面からの深さは、S K605・606が約0.9m、S K607が0.5m。S K605からは遺物整理箱2箱分の奈良時代中頃の土師器・須恵器、瓦が出土した。S X806は、掘形が東西2.7m、南北3.0mの平面隅丸方形である。検出面からの深さは、0.2mと浅い。掘形内には、黒灰色砂（焼土が若干混じる）の下に灰色細砂が薄く堆積し、瓦器片を少量包含していた。S D113は、S X806の排水路と考えられる。溝幅は2.4～3.0m、S X806との取り付け部は幅0.14mと細い。検出面からの深さは概ね0.2m。S X806の掘形底部の標高は約69.45m、S D113の北端は約69.36mである。これらの造構の性格は、類例を待って検討していく。S X606は、掘形が東西0.4m、南北0.3mの平面長方形で、深さは0.1m。掘形内には、礫（チャート）が敷き詰められていた。造構の性格、時期は不明である。

（三好美穂）





発掘区と調査地周辺（北から）



発掘区全景（東から）

### (3) 平城京右京二条三坊三坪の調査 第378-7次

調査地は、右京二条三坊三坪内の東北部に位置する。平成5年度には西隣で第273-2次調査が行われており、それと合わせて三坪内の東北部の様相を解明することを目的とした。

層相は、作土の下に淡黄灰色土、黄灰褐色土が堆積し、地形的に低くなる東側ではさらにその下に暗灰色砂土がみられる。遺構面は北および東に向かって低くなっている、その標高は71.1～70.2mである。なお、区画整理事業に伴う造成工事が調査地に及んでいて、遺構面にまで達する擾乱が一部に認められたのは遺憾であった。

奈良時代の主な検出遺構としては、掘立柱建物19棟、掘立柱列2条の他に道路1条、溝3条、橋状遺構2基、井戸3基がある。それについて以下に略述する。

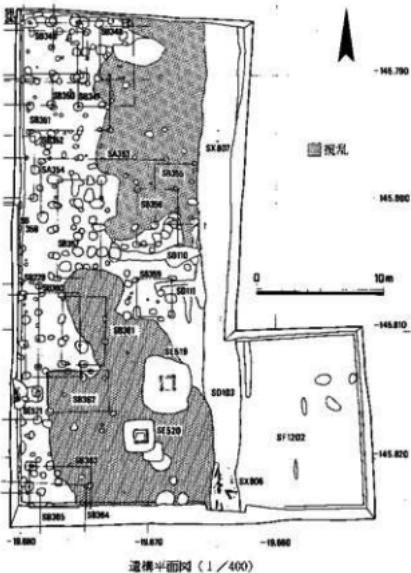
S F102は西二坊大路、S D103はその西側溝である。S D103は幅2.6～3.0m、深さ約0.4mで、約0.5mの高低差をもって北が低い。両肩にそって護岸用の杭跡がみられた上に、2地点で橋状遺構が認められた。S X806では橋脚の位置が判然としないものの、橋の部材と思われる木材が多く遺存していた。位置的にも坪内の南北1/2付近に相当する。またS X807は一本の角柱を掘立てた遺構で、この北側0.8mの位置には杭が一本打ち込まれていた。これもおよそ坪内の南北1/4付近にあり、橋脚である可能性が高いと思われる。S X806、807近くの埋土からは銭貨28枚や帶金具3点などが出土した。S D110・111はS D103に直結する溝で、心心間約2.3m離れて並ぶ。およそ坪内の南北1/3付近にあり、ここにも通路の存在を想定できる可能性がある。

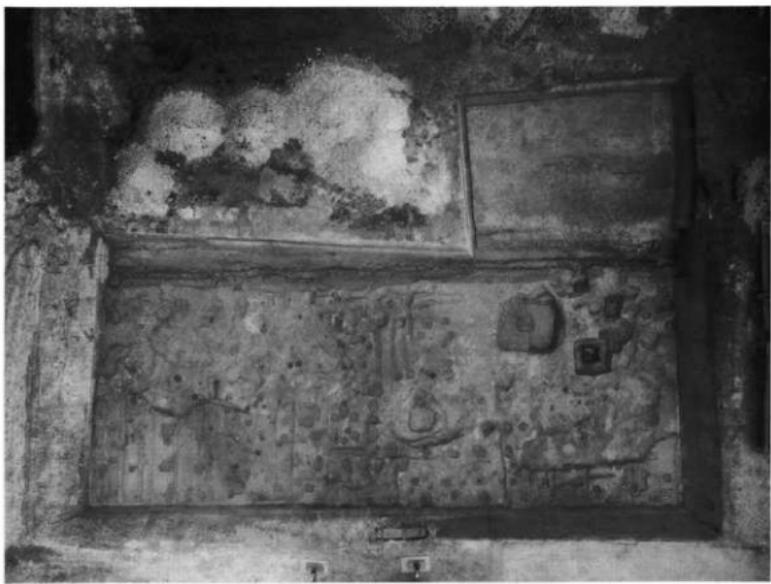
S E519は井戸柱部材が抜き取られるものの、角材を井桁に組んだ棒の土台と横板1枚が残存した。土台の四隅には穴があり、隅柱の存在を想定できる。おそらく横板を隅柱側面の縦溝に落とし込む構造であったろう。土台の下には5枚の板と少量の木炭を敷いて安定をはかっている。柱の内法は一辺0.86mで、底には拳大の礫を厚く充填していた。掘形は南北約4.5m、東西約3.8mの隅丸方形を呈し、深さは約2.5mである。

S E520は方形横板組太柄留構造の井戸であるが、上段の外側には縦板がめぐり、南東隅および南西隅に柱が打ち込まれる。内法は一辺約1mである。横板は下から5段目までを確認できる。底には内法0.6m、深さ0.39mの方形の水溜施設がある。4枚の板を釘留めしたもので、底板はないがそれを打ち付けていた釘穴が残る。欄を転用したものであろう。この上から斎中3点や柄杓の身が出土した。掘形は一辺約2.5mの方形を呈し、深さは約1.9mである。

S E521は井戸柱部材が抜き取られるが、残存した部材から内法の一辺0.94mほどの方形隅柱横板組構造であったと推定できる。深さは約2.3mである。

(鎌方正樹)





発掘区垂直写真（左が北）



西二坊大路西侧溝 S D103（南から）



井戸 S E519（南から）



井戸 S E520（西から）

(4) 平城京右京二条三坊四坪の調査 第378-2次

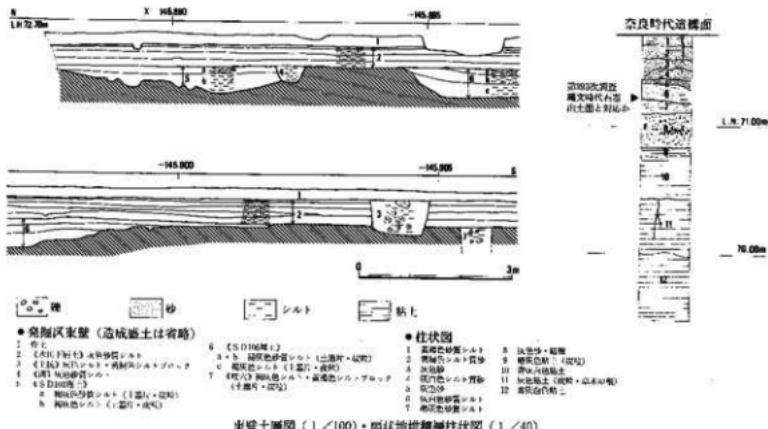
調査地は、平城京の条坊復元では右京二条三坊四坪の北西隅にあたり、北側では三・四坪間の、西側では四・五坪間の坪境小路がそれぞれ想定されている。四坪内では、平成5～6年度に市第273-1次・第276次・第293次の計3次、8400m<sup>2</sup>にわたる発掘調査を実施している。今回の調査では、四坪北西隅部分の宅地の様相の解明および条坊闊連造構の確認を目的とした。

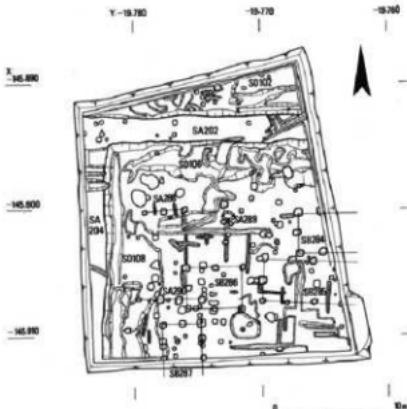
層相は、盛土（厚さ0.3m）の下に、黒色腐植混シルト層（作土・厚さ0.2m）、3～4層の灰色砂質シルト層（水田下層上・厚さ0.5m）があり、最上位の黄灰色シルト層以下シルト・粘土を主とする緩傾斜扁状地の堆積層となる。灰色砂質シルト層や黄灰色シルト層の上面には乾田が営まれていたことを示す酸化鉄や酸化マンガンの斑紋がみられる。奈良時代の遺構面は黄灰色シルト層の上面（標高71.7m）である。なお、調査地のすぐ南方で平成6年度に実施した市第293次調査では、黄灰色シルト層の下の黄白色シルト層および茶褐色砂質シルト層の上面で縄文時代中期の石器や炭化物の集積を確認している。本調査地でも黄灰色シルト層の下位に茶褐色砂質シルト層に対応すると考えられる地層（柱状図中第7層）を確認したが、上面で石器や炭化物の集積はみられなかった。

遺構検出は、黄灰色シルト層の上面で行った。検出した主な遺構は奈良時代の条坊関連遺構と掘立柱建物4棟、掘立柱塀3条で、他に素掘りの溝や上坑がある。

条坊関跡遺構には、三・四坪坪境小路の南側溝 S D102、四坪の北辺を両する築地 S A202とその雨落溝 S D106、四坪の西辺を両する築地 S A204とその雨落溝 S D108がある。坪境小路の南側溝 S D102、築地 S A202とその雨落溝 S D106は、市第273-1次・第276次・第293次調査地でも確認されている。築地 S A202の上面で検出した柱穴は、添柱の可能性がある。築地 S A204とその雨落溝 S D108は、前述の築地 S A202、雨落溝 S D106とそれぞれL字形に接続する。築地 S A204は坪境小路に面した部分が調査区外である。雨落溝 S D106南肩・S D108東肩はともに後世の改変により変形している。

掘立柱建物・塀には3時期以上の重複関係が認められる。概要は次のとおりである。





遺構平面図 (1/400)

**S B284** 東西1間(1.8m)以上、南北2間(3.0m)の掘立柱建物。

**S B285** 衍行3間(6.3m)以上、梁間2間(3.3m)の東西棟掘立柱建物。

**S B286** 衍行2間(4.2m)、梁間2間(3.3m)の東西棟掘立柱建物。

**S B287** 衍行2間(6.0m)以上、梁間2間(3.3m)の南北棟掘立柱建物。

**S A288** 東西2間(3.0m)の掘立柱塀。

**S A289** 南北2間(3.0m)の掘立柱塀。

**S A290** 東西3間(4.95m)の掘立柱塀。

これらの遺構のうち、建物S B286と塀S A290は先後関係は不明であるが、重複しており同時併存はあり得ない。また、建物S B284・285についても互いに近接しており同時併存はあり得ないと思われる。

主な出土遺物には、奈良時代の土器類、瓦類、錢貨がある。

奈良時代の土器類、瓦類は、条坊関連遺構S D102・104・106の埋土中及び奈良時代遺構面直上に堆積する灰色砂質シルト層から出土した。瓦類には軒丸瓦5点(6282G 1点、6311Aa 1点、形式不明3点)、軒平瓦4点(6664F 1点、6710C 2点、形式不明1点)、博6点を含む。



無文銀錢 (1/1)

1)考古学雑誌5-6(1915年)



発掘区全景(上が北)



発掘区全景(東から)

## (5) 平城京右京二条三坊七坪の調査 第363・364・378-3・4・5 次

右京二条一坊七坪の調査では、これまで平成7年度に坪の南辺東半部で第326-1次調査を実施している。今回は、平成8年度に坪の南辺西半部で実施した第363・364次調査と、今年度に北半部で実施した第378-3・4・5次調査を併せて報告する。これらは、二条条間路と西二坊坊間路の交差点部分、二・七坪坪境小路、西二坊坊間路の確認と、七坪内の層相を把握するために実施した。遺物等整理途中のため、遺構の詳細な時期など不明な点も多くあるが、これまでに判明したことの概要を記す。

調査地は、なだらかな低丘陵上の東斜面のやや北よりに位置する。調査地は水田化のために西から東へ下がる低い段差がみられ、北東部ではさらに北方向へ下がる段差がみられる。発掘区内の層相は、坪中央部では盛上、黒灰色土（作土）、淡灰色砂質土（床土）と続き、地表面下0.2~0.4mで灰茶色砂、黄白色シルトの地山（標高70.9~71.5m）になる。一部では地山上に灰褐色砂質土が堆積する。発掘区内西辺では、地山が自然河川による浸蝕の結果、西へ下降しており、西端での層相は盛上、黒灰色土（作土）、淡灰色砂質土（床土）、灰茶色粘質土を基本とする3層、灰~暗灰色粘土からなる5層が続き、現地表面下1.6~2.0mで青灰色粘土の地山（標高69.3~70.2m）となる。坪内東辺には、後世の水田化による地下げがあり、東端での層相は、盛上、黒灰色土（作土）、淡灰色砂質土（床土）、暗灰色砂質粘土を基本とする2~3層、暗灰色粘質土からなる3~4層と続き、現地表面下1.2~2.0mで青灰色シルト質粘土の地山（標高68.9~69.8m）となる。遺構は全て地山上面で検出したが、後世の削平のため坪中央部に比べて周辺部での遺構の残りは良くなかった。

第326-1次調査で検出した遺構と合わせ、七坪の調査で検出した主な遺構には、奈良時代から室町時代にかけてのものがあり、二条条間路、同北側溝、西二坊坊間路、同東側溝、坪の南を限る築地とその雨落溝、掘立柱建物105棟、掘立柱廻33条、井戸35基、土器埋納坑2個がある。これらを、奈良・平安時代の遺構と、鎌倉・室町時代の遺構とに分けて図示した。以下、主なものについて記すが、第326-1次調査の報告と重複する事項については省略する。

### 奈良・平安時代の遺構

S F 0607・S D 101 二条条間路とその北側溝である。第326-1次調査に統いて検出した。S D 101は西端が削平されており、長さ34.2m分を確認したことにどった。幅0.8~1.2m、検出面からの深さ0.05~0.3mである。埋土から奈良時代後半の土器が出土した。南側溝は、後世の削平を受けており、検出することはできなかった。

S A 201・S D 105 坪南限の築地塀とその雨落溝である。第326-1次調査に統いて検出した。S D 105は二条条間路北側溝 S D 101と同様に西端が削平されており、長さ34.6m分を確認した。幅0.7~1.4m、検出面からの深さ0.05~0.2mである。重複関係からみてS B 280、S E 501よりも新しいことから、少なくとも奈良時代の初頭には築地塀はなかったようである。

S F 0710・S D 104・114 西二坊坊間路、同東側溝と、坊間路路面を横断して東側溝に流れ込む東西方向の素掘りの溝である。S F 0710は西戸を中世の自然河川に削平されており、残存する路面幅は2.3~4.2mである。S D 104は六坪から二条条間路 S F 0710の路面を横断して北へ続く。この溝は南から北へ流下しており、発掘区南端からS D 114までは検出面からの深さ0.05m以下であるが、S D 114から北は0.4~1.1mと北側ほど深くなる。埋土は南端からS D 114までは暗灰色粘土の1層であるが、S D 114から北は3層に分かれ、上層は暗灰色粘土と灰色砂の互層、中

層は灰色粘土、下層は灰色砂～粗砂である。下層からは多量の土器など、奈良時代から平安時代にかけての遺物が出土した。SD114は発掘区外西から続くが、その性格は不明である。深さは発掘区西端で検出面から0.25m、埋土は灰色粗砂と褐色粘質土の互層である。

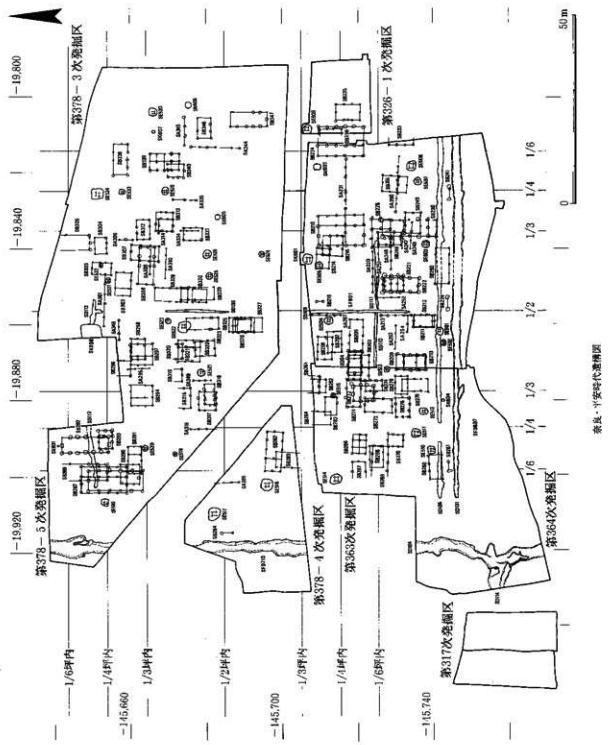
**S D109** 坪を東西に2等分する位置で検出した南北方向の素掘りの溝である。坪の北半分でも断続的にではあるが検出した。幅は0.6m、検出面からの深さは0.2～0.3mである。

なお、二・七坪坪境小路は後世の削平のため残存していなかったと考える。

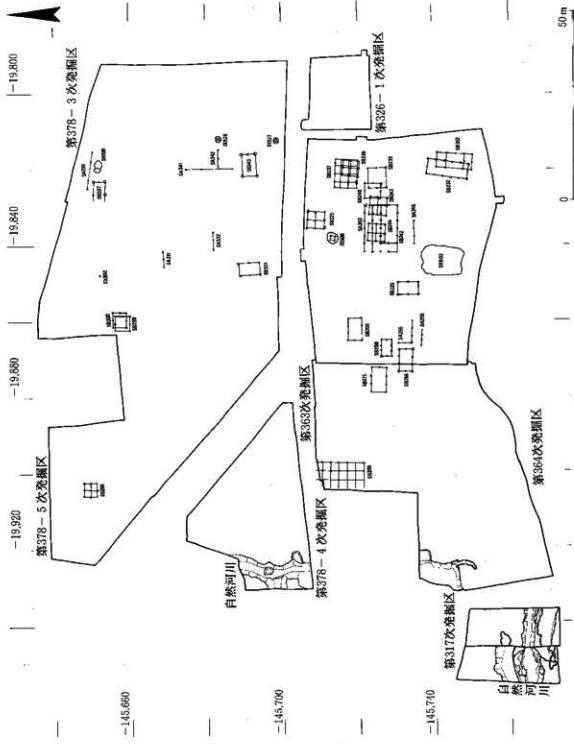
**S B241・281・284** 前二者は二条条間路SF0607に面する門、後者は西三坊坊間路SF0710に面する門と思われる。それぞれは坪内の東1/4、西1/6、南北1/2にはほぼ位置する。坪内を東西



調査地全景（左が北）



奈良・平安時代遺構圖



2等分するSD109、ほぼ南1/6に位置するSD110・111などとともに七坪内の宅地剖を考える上での手掛かりとなる。

S X801 SB292の北側で検出した上器埋納坑である。掘形は南北半分を検出するのみで、南北0.15以上×東西0.4m、深さ0.22mの平面長方形と考えられる。中心部に上師器蓋を据えている。蓋などではなく、中に土がつまつた状態で検出した。

なお、第326-1次調査報告分を再検討した結果、SB217・226・227・229を欠番とした。

#### 鎌倉・室町時代の遺構

S E528 掘形は平面隅丸方形で、東西1.3×南北1.2m。検出面からの深さ1.8m。枠の内法は0.8×0.8mである。掘形壁面の一部には、井戸掘削中に湧水層部分から壁が崩れ、20~30cm程の石や土砂を積めて補修した痕跡が認められる。井戸枠の上部枠は抜き取られている。残存部での枠の構造は方形縦板組横枝留めで、南側と北側の紙板の裏面上部に横板をあてている。枠材には建物の部材を転用しており、そのうち16点に墨書きがみられる。墨書きの内容の詳細については検討中であるが、「長禄四年(西暦1460)十一月八日」の年号のあるものが2点みられる。

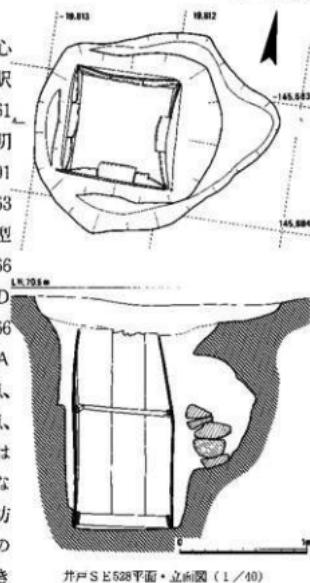
S X802 上器埋納坑である。掘形は長径0.45×短径0.35mの平面長円形で、検出面からの深さは0.3mである。上坑内の西寄りに上師器蓋を伏せた状態で据えている。蓋の底部は上坑上部削平のため欠損している。

第364次調査で検出した自然河川は、第317次調査(平成6年度)では二条条間路南側溝SD102として報告したが、第378-1次調査の結果、二条条間路南側溝埋没後に、ほぼ重複する位置を東に流れる河川であることが判明した。下層の奈良~平安時代の遺物は南側溝を浸透した際に混入したものと思われる。これが今回の発掘区との間で北に曲がり、西三坊間路西側溝の位置をほぼ踏襲して北流するものと思われる。

(原田香織)

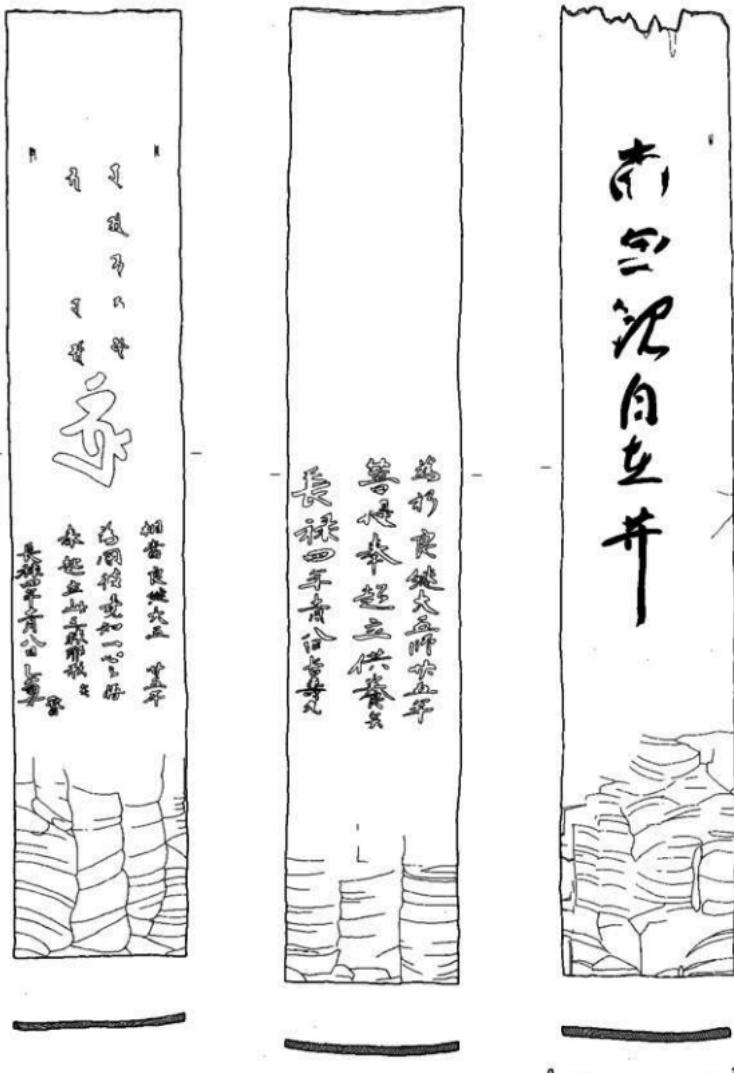
#### 出土遺物 主なものは以下の通りである。

瓦類 整理途中ではあるが、型式の判明した軒瓦を中心記す。軒丸瓦は40点、軒平瓦は33点ある。軒丸瓦の内訳は6012B 1点、6133A 2点、6133O 1点、6133P 1点、6139A 1点、6225種別不明 2点、6236A 1点、6236種別不明 1点、6278B 3点、6281B 1点、6282種別不明 1点、6301B 1点、6301C 2点、6301J 1点、6301種別不明 1点、6304A 1点、6313A 1点、6314B 1点、法隆寺37E 1点、型式不明15点、平安時代以降 1点である。軒平瓦の内訳は6642C 1点、6643C 1点、6644A 1点、6646A 1点、6646D 1点、6646種別不明 1点、6647B 1点、6647C a 1点、6647C 1点、6663F 1点、6664G 1点、6664K 1点、6668A 1点、6685A 1点、6691A 2点、6694A 1点、6702G 1点、6721G 2点、6721種別不明 1点、6732K 1点、6732Q 1点、型式不明 4点、平安時代以降 6点である。なお、6301Jは従来不明であった外区外縁の線鋸歯紋の数がわかる良好な資料なので図示しておく。6310Jは、平城京左京三条三坊五坪と海竜寺で各1点、右京二条三坊十・十一坪周辺の調査で7点出土している。また、これらの他に特筆すべき

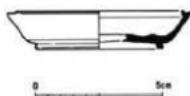
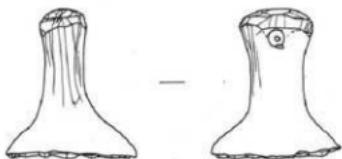


井戸S E528平面・立面図 (1/40)

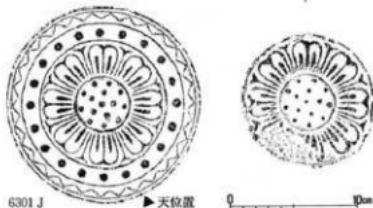
ものとして蓮華紋押型土製品がある。SE519件抜取痕から8世紀中頃の土器とともに出土した。把手と紋様部からなる。現存高11.7cm、紋様部の最大径10.3cm。紋様面は6310Jと同範であるが、焼成前に外区部分は削られている。把手は紋様部中心からはずれた位置にあり、長円形の断面で握り易くなっている。把手先端部には棒状工具で2方向から刺突した円形孔を有する。用途は不明



片戸SE528北側壁板(1/8)



溝S D114出土須恵器 (1/4)



軒丸瓦6301 J 拓本と蓮華紋押型土製品拓本・実測図 (1/4)

であるが、その形状から鋳型の母範の可能性が考えられる。同様の特徴のものが、韓国の牙山新雲里遺跡で知られる<sup>1)</sup>。(原田憲二郎)

**土器類** 今回の調査では、多量の土器類が出土しているが、整理途中であるので詳細は不明である。興味深い資料が出土しているのでそれのみ概述しておく。図示したものはSD114から出土した須恵器である。杯Hであるが、高台が付いたもので、復元で口径12.9cm、受け部径14.4cm、器高3.0cmである。発掘区周辺からは7世紀頃の遺構は検出されていないが、時期等については類例の増加を待って考えたい。



溝SD114出土刷人形 (1/2)

「山背瓦瓦蓋 × 100」



井戸S E516出土木簡 (ほぼ実物大)

**木簡** S E516の枠内埋土から木簡の削片が出土した。長さ9.6×幅2.1cmである。井戸枠内から奈良時代後半～長岡京期、掘形から奈良時代後半の土器が出土した。

**錢貨** 西三坊坊間路東側溝SD104の下層から、和同開珎(初鑄708年)、萬年通寶(同760年)、神功開寶(同765年)、隆平永寶(同796年)、承和昌寶(同835年)、貞觀永寶(同870年)が合計38点出土した。また、S E501・502・519・520の最下部から和同開珎が各1点ずつ出土した。

**その他の遺物** 西三坊坊間路東側溝SD104から斎串未製品などの木製品、帶金具・素文鏡・人形などの銅製品が出土した。S E520からは和琴の琴柱が3点出土した。琴柱は第273-1次調査(平成5年度)出土のものと同質材と思われる。

1)『百济瓦當特殊展』国立柏崎博物館、1988  
『特別展百濟 瓦垣』扶桑博物館、1989



二条条間路北側溝 S D101  
雨落溝 S D105 (東から)



西三坊間路東側溝 S D104  
中世の自然河川 (北から)



井戸 S E528 (南から)

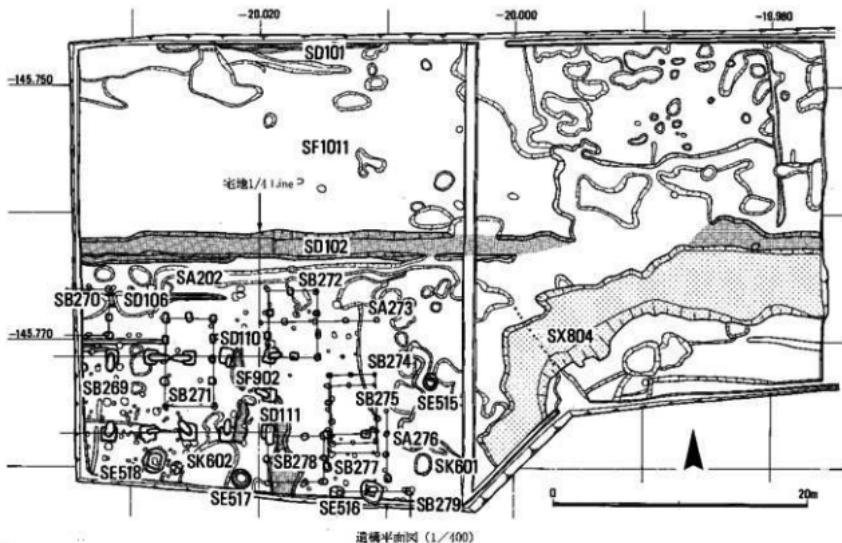
## (6) 平城京右京二条三坊十一坪の調査 第378-1次

本調査地は、平城京右京二条三坊十一坪の北西部にあたり、発掘区の北半分が二条条間路に相当する位置にある。調査地は、西から東へ緩やかに下る微高地上に位置している。また、水田化のために地形に段差がみられ、南から北へ向かって低くなる。発掘区内の基本的な層相は、黒灰色土（作土）以下、灰色粘砂、灰茶色粘質土、淡灰色粘土、炭化物を含む暗灰色粘土、茶灰色粘土、灰褐色粘質土、淡灰褐色粘土、淡灰色粘土、暗灰色粘土と続き、現地表ト約1.1mで青灰色粘土もしくは、灰色砂の地山となる。地山の標高は、発掘区西端で72.2m、中央付近で72.0m、最も低い発掘区東側では71.6mとなる。遺構は、基本的にこの地山上面で検出した。

検出した遺構には、奈良時代から平安時代の遺構があり、二条条間路、同南北両側溝、「一坪宅地」の北を限る築地及び築地兩落溝、坪内道路及び同東西両側溝、掘立柱建物9棟、掘立柱解2条、井戸4基、土坑2がある。また、発掘区中央から東側に、発掘区の南から流れ込み、条間路両側溝に重複して東に流れる中世の自然河川があり、この屈曲部で杭列による堰を検出した。

二条条間路 S F1011は、北側溝 SD101の全幅を検出していないことから、その側溝心心間の幅員は明らかではないが、側溝溝口での路面幅は約15mである。条間路南側溝 SD102は幅約1.8~2mの素掘りの溝で、埋土は上下2層に分かれている。側溝心の国十率標はX=-145,762.420、Y=-20,010.000、溝底の標高は71.3mである。築地 S A202の幅は、約3mであり、添柱痕跡等はなかった。坪内道路 S F902は、坪内宅地の東西1/4の想定位置で検出した南北道路で、東西両側溝 SD110・S D111の心心間距離は約3mである。

出土遺物には、奈良時代から中世までの上器類、瓦類、木製品がある。ここでは、新型式を確認した瓦類について述べる。



軒瓦について記す。軒丸瓦は6133A、6135A、6135種別不明、  
6140A、6143A、6236種別不明、6284A、6284C、6285A、63  
01J、6313A、6313種別不明、巴紋軒丸瓦が各1点、型式不明  
12点で、軒平瓦は三重弧紋、6641E、6642A、6643E、6663F、  
6664F、6664G、6664K、6702A、6732A、新型式が各1点、型式不明3点が出土した。

出土軒平瓦新型式（1／4）

（立石堅志）



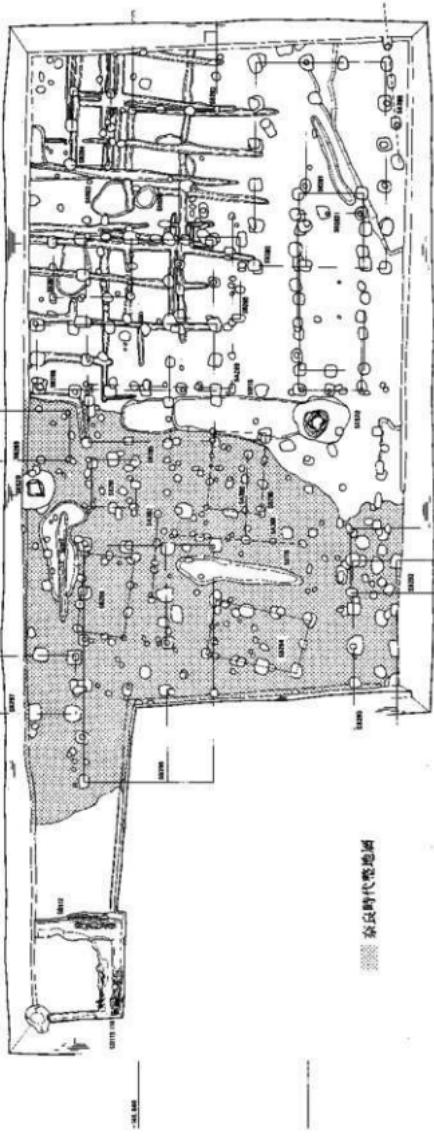
発掘区全景（左が北）

## (7) 平城京右京二条三坊十一坪の調査 第390次

本調査地は平城京右京二条三坊十一坪の南西部にあたり、現状は宅地である。調査地の基本的な層相は、約1.5mの盛土以下、0.7m前後の作土（7～9層に分層）、約0.1mの暗黄灰色シルト（遺物包含層）が堆積し遺構検出面となる。遺構検出面は東半で黄白色シルト上面、西半ではその上に約0.3m堆積する橙灰色砂質シルトの整地層上面である。検出面の標高は72.3～73.8mで南東から北西に向かって下っている。以下、主な遺構の概要についてのみ述べる。

S B280は桁行5間（12.0m）、梁間2間（4.8m）の北廂付東西棟掘立柱建物で、廂の出は2.7m。S B281は桁行5間（10.5m）、梁間2間（3.6m）の東西棟掘立柱建物。S B282は桁行5間（10.5m）、梁間2間（3.6m）の東西棟掘立柱建物。S B283は東西1間（2.1m）以上、南北3間（4.8m）で南北棟掘立柱建物と思われる。S B284は桁行2間（4.2m）、梁間1間（1.8m）の東西棟掘立柱建物。S B285は桁行5間（12.0m）、梁間2間（4.8m）の南廂付東西棟掘立柱建物で、廂の出は2.7m。S B286は桁行3間（4.5m）、梁間2間（3.6m）の東西棟掘立柱建物。S B287は桁行3間（4.5m）、梁間2間（3.6m）の南北棟掘立柱建物。S B288は桁行5間（10.5m）、梁間2間（3.6m）の南北棟掘立柱建物。柱掘形の一つには軒丸瓦6301B型式が発見されていた。S B289は東西2間（3.0m）、南北1間（1.8m）以上で南北棟掘立柱建物と思われる。S B290は桁行3間（4.8m）、梁間2間（3.0m）の東西棟掘立柱建物。S B291は東西2間（2.4m）、南北2間（2.4m）の掘立柱建物。S B292は東西2間（3.6m）、南北1間（2.1m）以上で南北棟掘立柱建物と思われる。S B293は東西3間（7.2m）以上、南北1間（2.4m）以上で発掘区外南北にを中心をもつ東西棟掘立柱建物の北面廻の可能性がある。S B294は桁行3間（5.4m）、梁間2間（3.0m）の南北棟掘立柱建物。S B295は桁行5間（14.1m）、梁間2間（4.8m）の南廂付東西棟掘立柱建物で、廂の出は2.7m。S B296は桁行3間（4.8m）、梁間2間（3.0m）の東西棟掘立柱建物。S B297は東西2間（3.0m）、南北1間（2.4m）以上で南北棟掘立柱建物と思われる。S A298は東西3間（7.2m）以上で発掘区外東へ延びる掘立柱塀。S A299は東西5間（10.2m）、さらに西端から北へ南北5間（8.7m）延びるL字型の掘立柱塀。S A300は東西3間（5.1m）の掘立柱塀。S A301は南北4間（7.8m）の掘立柱塀。S A302は東西3間（5.1m）の掘立柱塀。S E519は径約2.7m前後の平面不整形円形の掘形で、上部に方形縦板組隅柱横桟留、下部に一本半割削抜の枠を組んだ井戸。縦板組の一辺は約0.8m、削抜の枠は小さな板で接合部の隙間を埋め、長径0.7mの上面規格円形に組まれている。検出面からの全体の深さは約3.0mである。掘形埋土から奈良時代中頃～後半の上師器・須恵器が出土した。S E520は直径約2.4mの平面円形の掘形に方形縦板組隅柱横桟留の枠を組んだ井戸。枠の一辺は約0.8m、検出面からの深さ約1.6m。枠内埋土から奈良時代前半～中頃の土師器・須恵器、軒平瓦6685A型式が出土した。S D112は長さ4.7m以上、幅2.0m前後、深さ約0.6mの南北溝で、東岸南半には板を杭で留めた護岸が施されていた。溝心の国土地標はおおよそX=-145.837.000、Y=-20,052.000であり、この溝が「一・十四坪坪境小路」の東側溝である可能性が強い。S D113は長さ4.0m以上、幅約0.7m、深さ約0.2mでS D112に直交して接する東西溝。両岸は板を杭で留めた護岸が施されていた。S D114はS D113の前に機能していた深さ約0.6mの東西溝であるが、正確な規模は不明。S D115、S D116は幅広の南北溝、S D117はU字状の断面を呈する東西溝、SK603、SK604は平面円形の土坑である。いずれも性格は不明。山上遺物などから、以上の遺構のほとんどは奈良時代に属するものと考えられる。

（松浦五輪美）



近体平声图(1/300)



発掘区全貌（左が北）

## 2 JR奈良駅周辺土地区画整理事業に係る調査

この調査は、昭和63年度以来継続しているJR奈良駅周辺土地区画整理事業に係る発掘調査である。通常事業として、平成8年度に1箇所、9年度に5箇所の計6箇所、計2,915m<sup>2</sup>の調査を実施した。初年度からの調査面積は合計37,431m<sup>2</sup>に達した。平成8・9年度の調査は、平城京の条坊の坪付でいえば、外京の左京四条五坊三・四・七・十六坪の四坪にあたる。第373次調査で弥生時代の、第377-1次調査で平安時代の遺構・遺物もみつかり、平城京前後の土地利用の様相を知る資料を得ることができた。

平成8・9年度発掘調査および本概要報告書掲載調査一覧

| 調査年度  | 事業名      | 調査区域     | 道路名          | 調査地       | 調査期間                | 調査面積                | 担当者    |
|-------|----------|----------|--------------|-----------|---------------------|---------------------|--------|
| 平成8年度 | 通常事業     | 373      | 平城京左京四条五坊五坪  | 二条本町7-11  | H09.01.20～H09.02.15 | 150m <sup>2</sup>   | 久保邦    |
| 平成9年度 | 通常事業(繰越) | 377-1発掘区 | 平城京東四坊人路     | 二条本町225他  | H09.04.25～H09.07.16 | 1,250m <sup>2</sup> | 久保邦・細川 |
|       | 通常事業(繰越) | -2発掘区    | 平城京左京四条四坊十六坪 | 一条本町1番7号  | H09.08.04～H09.10.23 | 700m <sup>2</sup>   | 久保邦・細川 |
|       | 通常事業(繰越) | -3発掘区    | 平城京左京四条五坊四坪  | 一条本町16    | H09.11.10～H09.12.15 | 300m <sup>2</sup>   | 久保邦・細川 |
|       | 通常事業(繰越) | -4発掘区    | 平城京左京四条五坊三坪  | 一条本町地内    | H10.01.12～H10.02.03 | 375m <sup>2</sup>   | 久保邦・細川 |
|       | 通常事業(繰越) | -5発掘区    | 平城京左京四条五坊七坪  | 一条本町2-25他 | H10.02.03～H10.02.16 | 140m <sup>2</sup>   | 久保邦・細川 |



JR奈良駅周辺土地区画整理事業地内の発掘調査位置図 (1/6,000 数字は調査次数)

## (1) 平城京左京四条四坊十六坪の調査 第377-2次

調査地は平城京の条坊復元では左京四条四坊十六坪の中央部に位置する。十六坪においては、これまで7件の調査が行われている。そのうち、坪境小路、東四坊大路を含む周辺部での調査が5件を占めている。そこで本調査は、十六坪内中央部の遺構の残存状況を明らかにすること目的として実施した。

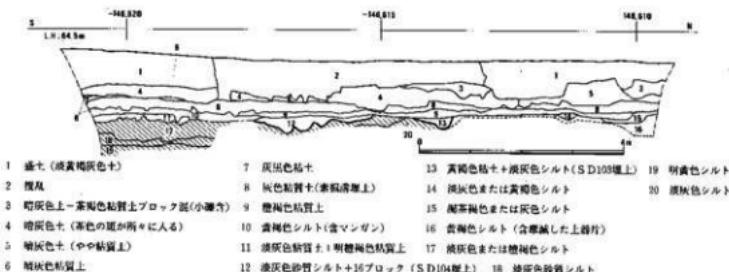
発掘区内の層相は、盛上(0.5~0.7m)、暗灰色粘質土→中粒砂(0.3~0.4m)、暗茶灰色細粒砂(0.2~0.5m)、灰色粘質土(0.2~0.3m)、黄灰褐色細粒砂質シルト(0.2m)、黄褐色シルトまたは淡灰色砂質土(0.2m)と続く。発掘区西南部では、現地表面から約1.1~1.3m下で黄褐色細粒砂の地山に至る。黄灰褐色細粒砂質シルト上面で、耕作に伴う南北方向の素掘溝を、整地と思われる黄褐色シルトまたは淡灰色砂質土上面で奈良~平安時代の遺構を検出した。発掘区西部~中央部にかけて、一部茶灰色~暗灰色砂礫が検出面上や、奈良~平安時代の素掘りの溝の底部などで露出しており、そこから弥生時代後期~古墳時代の上器が出土した。整地層より約0.1m下の淡灰色粘質土からは、弥生時代前期の上器も出土しているが、弥生~古墳時代の遺構はなかった。発掘区東部には、この砂疊層の広がりは続かない。奈良~平安時代の遺構検出面の標高は、62.9~63.0mである。

検出した遺構には、奈良~平安時代の掘立柱建物6棟、掘立柱塀2条、素掘りの溝2条、坪内道路1条と、粘土探柵坑3がある。掘立柱建物、塀の概要については一覧表にまとめた。以下、主なものについて記す。なお、遺構番号は市第334・345次調査に統いて記す。

S F 901 東西方向の坪内道路である。坪を南北1/2に分ける中軸線上に位置する。道路心の座標は、X = -146,615.120、Y = -16,560.000である。

S D 103・104 坪内道路 S F 901の南北両側溝である。北側溝 S D 103は、幅1.0~2.0m、検出面からの深さ0.2~0.4m、南側溝 S D 104は幅1.5~2.3m、検出面からの深さ0.2~0.3mを測る。S D 103は発掘区の西端から東端まで続くが、S D 104は検出面が砂層になる発掘区中央部で浅くなり途切れる。削平をうけ、粘土探柵坑 S K 601に壊されていると思われるが、発掘区の南辺が北に振れているので、発掘区外に続いている可能性もある。発掘区内では、長さ15.8m分を検出した。側溝心間の距離は3.16mである。

S A 225・226・227 S A 225は東西11間以上の塀で、南北4間以上のS A 226とL字形に接続



第一発掘区西壁土層図 (1/100)

する。S A226は、本調査地の約20m南に位置する市第345次調査で検出した東西棟建物S B223の西側柱列と柱筋が揃う。柱間寸法は2.4mと2.7mで南北15間の塀に復元できるので、S B223西側柱列もS A226と一連のものと考えて報告する。同じく、S B223南側柱列も、東西5間以上の塀S A227として考えると、S A225~227は、坪内の建物を囲む大きな塀になる可能性がある。重複関係からS D103・104よりも古く、坪内を1/2に分割して利用する前の建物と思われる。S A227は坪南辺より約1/4、S A226は坪西辺より約1/4の位置にあたる。

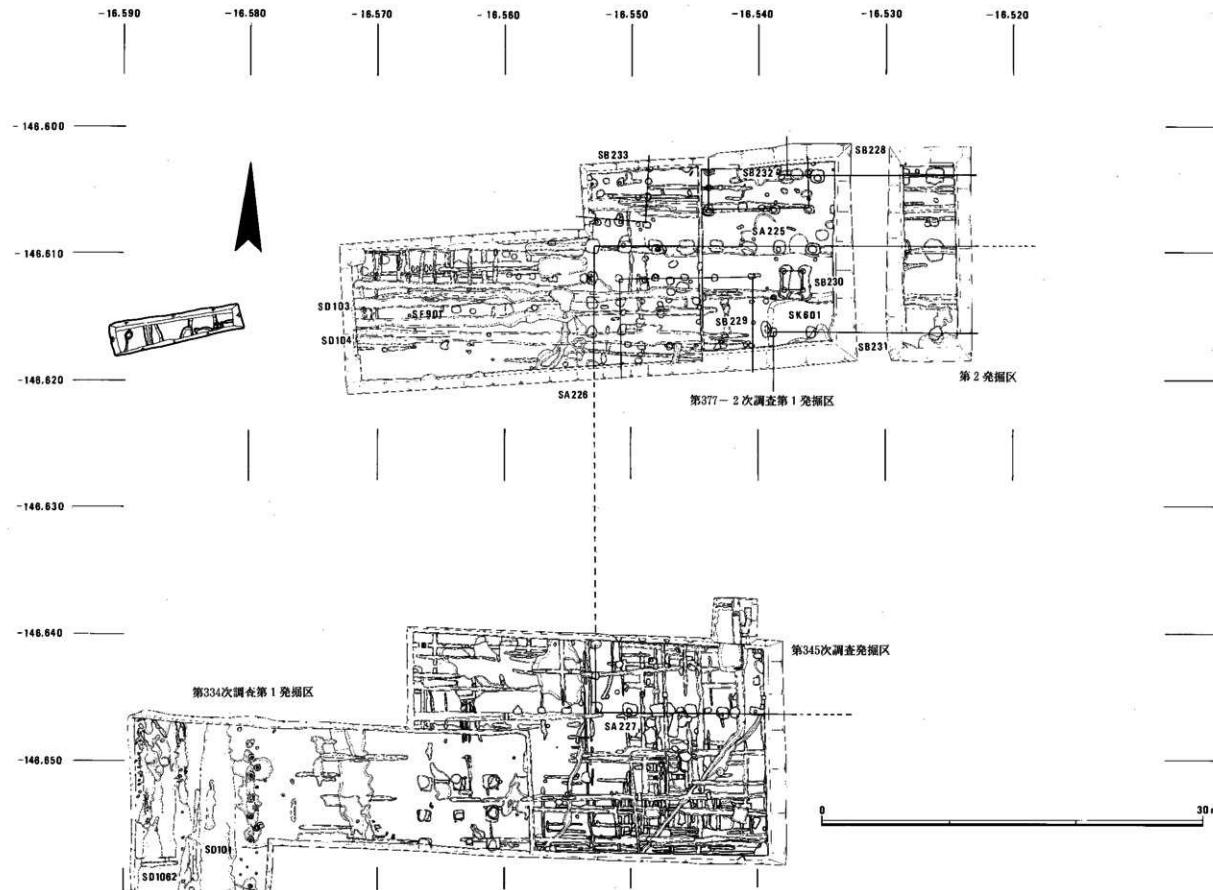
S B230 発掘区東南部で検出した1間×1間の掘立柱建物である。柱掘形は南北方向の布掘りで、柱根は4本とも残存している。検出面からの深さは、0.4~0.6mである。掘形は全体を0.4m掘り、北側の柱位置を約0.2m深く掘り下げているので、北側の方が深くなっている。南側の柱位置は掘り下げていない。布掘りの柱掘形をもつ掘立柱建物の例はいくつかみられるが、1間×1間の建物の例は少なく、建物の性格は不明である。重複関係からS D103・104より新しい。

遺物は遺物整理箱で11箱分の土器類と、3箱分の瓦類が出土した。瓦類は平瓦、丸瓦のみで、軒丸瓦、軒平瓦は皆無である。土器類は、建物、塀からは奈良~平安時代、S D103・104からは奈良時代末と思われる土師器、須恵器が出土している。粘土探坑S K02は重複関係からS B231よりも新しいことがわかるが、瓦器などは出土していないので、11世紀前半までに収まるものと考えられる。

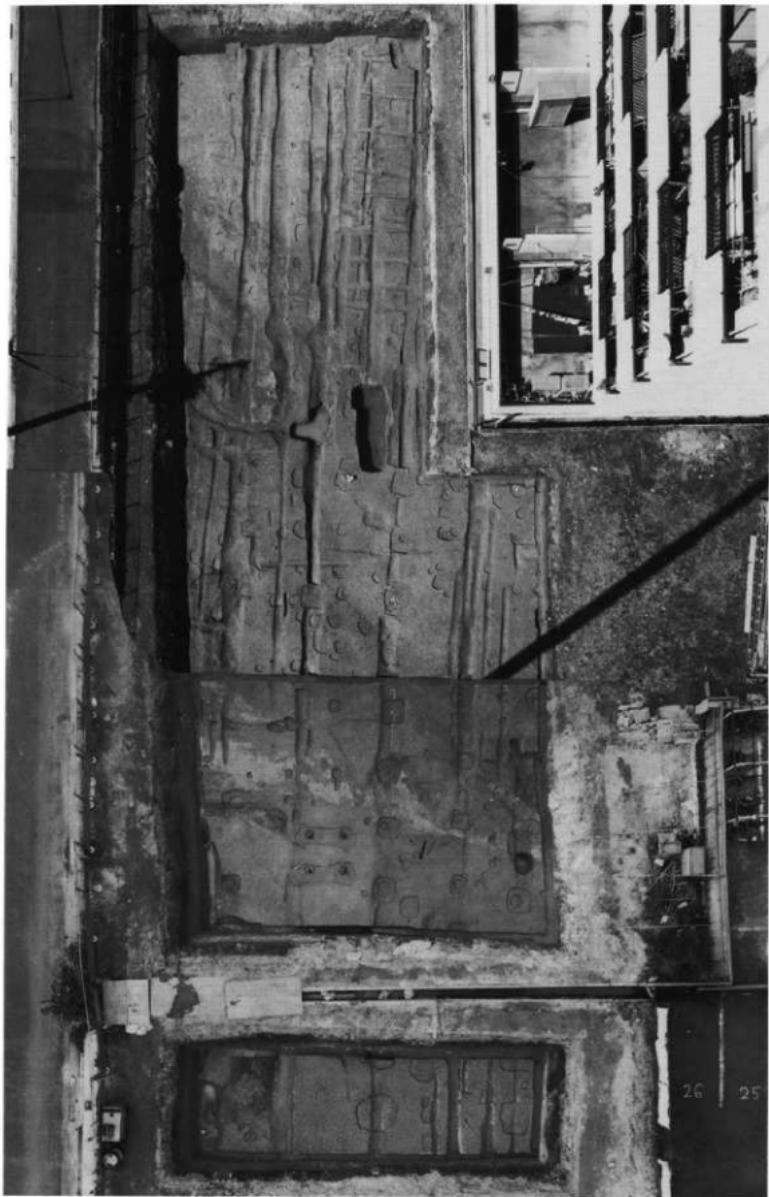
これまで行われてきた十六坪の調査では、東四坊大路や、坪境小路などの条坊関連造構は検出しているが、坪内の宅地の様相が分かる例は少ない。耕土探坑や、土坑などで広い範囲が壊されていることが多い、特に東四坊大路に近い場所にその傾向が見られるようである(市第218次・第253次調査)。今回、初めて坪の中央部を調査した結果、造構の残存状況が良いことが分かり、また十六坪の利川のされ方が、一部明らかになった。坪内道路S F01は、坪を南北1/2に分ける中軸線上にあり、この時期には十六坪が1/2に区画されていたことが分かる。さらに、S A226がS F01の南北両側溝S D103・104よりも古いことが重複関係から分かっている。十六坪が1/2に区画される以前は、S A226とそれに接続するS A225・227で閉まれた一画があり、恐らく一坪を占有して利用していた時期があったのではないかと思われる。S B231は、その区画内に建つ建物のうちの一棟であろう。このS B231の発掘区内で検出した東端の柱穴の位置が、十六坪を東西1/2に分ける中軸線付近にある。S B238、S A225にも同じことが言えるが、2つの建物の規模や、塀の東西長が明らかにならないと、この区画が坪の中心を意識して造られたのかは不明である。しかし、S A226・227が、それぞれ坪の西辺、南辺より約1/4にあることは、前述した通りなので、この区画が計画性をもっていることは確かである。今後は、この区画が例えば一坪利用の邸宅などになるのかどうかを、周辺の調査を待って検討しなければならない。(細川富貴子)

掘立柱脚・建物一覧表

| 遺構番号   | 棟方向 | 規格(幅行×奥間) | 幅行全長m(尺)   | 奥間全長m(尺)              | 幅行柱間寸法(尺)          | 奥間柱間寸法(尺)                  | 塀の出(m) | 備考   |
|--------|-----|-----------|------------|-----------------------|--------------------|----------------------------|--------|--|
| S A225 | 東内  | 11以上      | 26.4以上     | 2.4等間                 |                    |                            |        | S D103・104より古い                                     |
| S A225 | 南北  | 4以上+2以上   | 9.6以上<br>+ | 2.4等間<br>2.7等間        |                    |                            |        | S D103・104より古い<br>南北5.5mの柱脚をS A226とする。<br>坪西辺より1/4 |
| S A227 | 東内  | 5以上       | 12.6以上     | 西から<br>2.7.4.5.3.1.3. |                    |                            |        | 南北5.5mの柱脚をS A226とする。<br>坪南辺より1/4                   |
| S B226 | 東西  | 5×1以上     | 12(40)     |                       | 2.4等間              |                            |        | S B232より新しい  |
| S B229 | 東西  | 4×3       | 10.5(35)   | 6.6以上                 | 西から<br>2.7.4.4.3.0 | 東側1.1.1.5<br>西側1.5.3.1.2.7 |        |  |
| S B230 |     | 1×1       | 1.5(5)     | 1.5(5)                | 1.5                | 1.5                        |        |  |
| S B231 | 東西  | 4以上×1以上   | 12.9以上     |                       | 3.0                |                            |        | S D103・104より新しい<br>布掘りの柱穴                          |
| S B232 | 東西  | 3×1以上     | 7.8(26)    | 3.0以上                 | 西から<br>2.7.2.4.2.7 | 3.0                        |        | S B232より古い<br>西側柱の柱穴だけ2つ重なる                        |
| S B233 | 東西  | 2以上×2以上   | 4.5以上      | 4.2以上                 | 2.4.2.1            | 2.1等間                      |        |  |



第334次調査第1発掘区・第345次調査発掘区・第377-2次調査・第1・2発掘区追跡平面図 (1 / 300)



発掘区全貌（右が北）

## (2) 東四坊大路の調査 第377-1次調査

調査地は平城京の条坊復元では東四坊大路と四条条間路の交差点にある。今回の発掘区の南側では、昭和63年度に市第164・168次調査が実施されており、東四坊大路と両側溝を検出し、側溝心幅15.8m～16.05mで45大尺に換算できるという知見を得ている。今回の調査では交差点の側溝の切合関係、構梁の有無の確認を主眼とした。

発掘区の層相は約2mの盛上以下、暗灰色粘質土(旧作土)、茶褐色土、灰褐色土と続き、現地表下約2～2.8mで黄褐色シルトの地山となる。地山上面の標高は概ね63.4mである。遺構は地山上面で検出したものと、後述の自然流路上面で検出したものがある。

検出した遺構は古墳時代の自然流路1条、奈良時代の東四坊大路と両側溝・雨落溝の可能性のある素掘りの溝1条・自然流路1条・石組造構1・上坑1、中井の粘土採掘坑3、近世の井戸4基・埋桶造構1、上坑1である。なお、条坊関連の遺構番号については、昨年度の概報の方式に則り、4桁の番号にする。

S F 1070 東四坊大路である。発掘区内では約11m分を確認した。幅員は16.05mで、前回の調査と同じ規模である。北端は後述する自然流路で削平されており、四条条間路との交差点が検出できなかった。路面心の国土座標はX=-146,827.500、Y=-16,457.475である。

S D 1071 東四坊大路西側溝である。幅2.9～3.4m、検出面からの深さ0.5～0.6mで、溝底は北に向かって低くなっている。埋土からは奈良時代の土師器、須恵器、少量ではあるが黒色土器も出土している。溝心の国土座標はX=-146,827.500、Y=-16,465.500である。

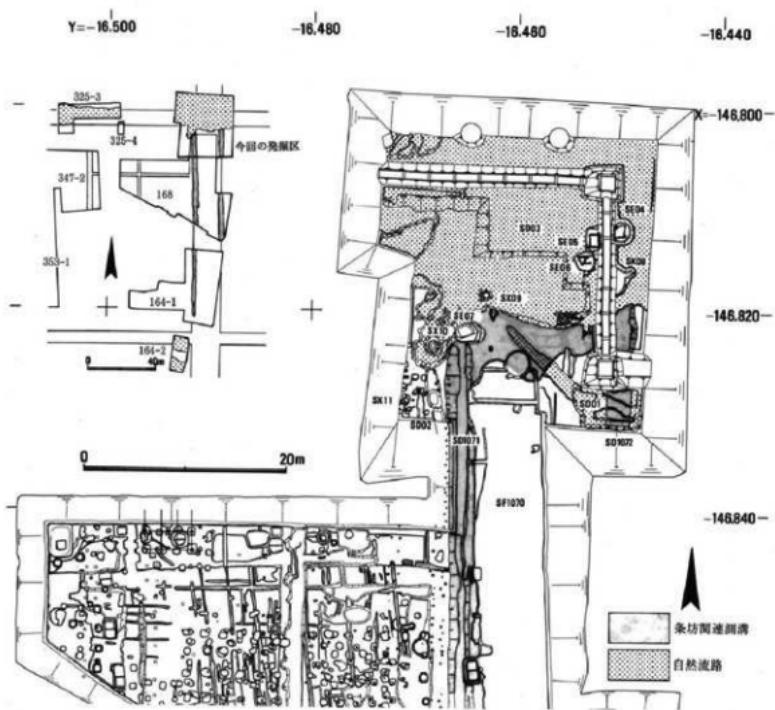
S D 1072 東四坊大路東側溝である。現存する築水樹の南側には下層に側溝の埋土と同様な埋土の自然流路があり、平面では両肩をおさえられず、築水樹より北では西肩がヒューム管の下になり東肩しか検出できなかった。溝幅は断面で確認するかぎり2.2～2.7m、検出面からの深さ0.3～0.6mで北に向かって低くなっている。埋土からは奈良時代の土師器、須恵器、上馬が出土している。土層断面で確認した溝心の国土座標はX=-146,827.500、Y=-16,449.450である。

東四坊大路の両側溝はS F 1070と同様北端で自然流路で削平され、四条条間路南側溝の取りつき部を検出することができなかった。また、北端で路面に東西方向の溝状の造構がある。これも北肩が自然流路で削平されている。南肩が不規則に蛇行し、深さが0.1～0.4mと両側溝より浅くながら北に低くなり、埋土も両側溝上層と同じである。以上のことからこの部分は両側溝が氾濫して削れた部分と判断した。

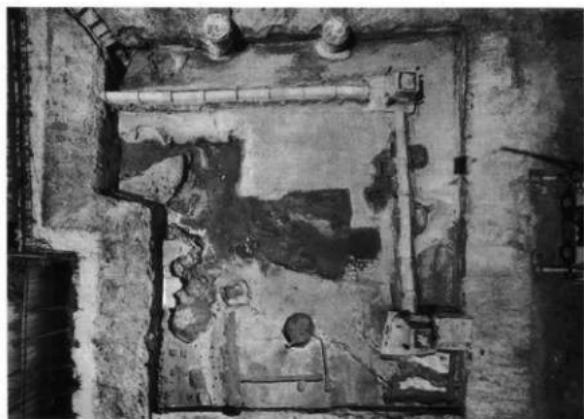
東四坊大路両側溝については十層断面で埋土を採取し、それぞれ花粉分析と珪藻分析を行い、当時の環境復元を試みた(付図参照)。埋土の時期差による環境変化をみるために上層・下層で試料を採取したが、同層の出土遺物からは明確に時期差を知ることができなかった。

S D 01 発掘区南東隅から北西方向に斜行する自然流路である。南東隅で幅5.5m、北端は側溝の氾濫で削平されている。検出面からの深さ0.3mである。埋土から古墳時代後期の土器が出士した。平成7年度の市第325次第2・6発掘区で検出したS D 27につながる可能性が高い。

S D 02 S D 1071の西側で西肩から2.2m間隔をおいて検出した南北方向の素掘りの溝。位置的に築地の雨落溝の可能性がある。この溝の南の延長線上でも市第168次調査において同様の南北方向の素掘りの溝を検出している。S X 11の上から掘込まれていると思われるが、上面では検出できずS X 11の底面で検出した。幅0.55～0.8m、土層断面で確認した深さ0.5mである。埋土からは土器片が1点出土したが時期は不明である。



### 造構平面図（1/500）・周辺の調査発掘区位置図（1/3,000）



秦州区全景(上左北)

**S D03** 発掘区北半で検出した南東から北西にやや斜行する自然流路である。南肩のみを検出しており、幅18m以上あり、条坊復元での四条条間路と両側溝がこの範囲内におさまると考えられる。検査面からの深さは0.8mである。埋土は基本的に砂で、砂礫・粗砂・細砂が比較的厚い単位で互層に堆積している。発掘区西端付近で南肩が溝状に南に入り込んでおり、そこから人面墨書き土器・上馬が出土した。出土した遺物には奈良時代の瓦類、弥生時代～10世紀の土器がある。土器類は8世紀末～9世紀半ばの土師器・須恵器が中心である。

S E04~07 17~18世紀の井戸である。いずれも自然流路 S D03が埋没した後に構築されている。規模・構造については表にまとめた。

S K08 発掘区東端中央部で東半を確認した。掘形円形で井戸の可能性もあるが、砂地を掘込んでいるのに枠を抜き取った痕跡もなく、他の井戸と比べ浅いので上坑と考える。出土遺物はなく時期不明である。

S X09 自然流路 S D03を掘削した底面で検出した石組構造。中央に曲物を据えていることから本来井戸だったものが、自然流路で上部が押し流された可能性がある。南北0.9m東西1.1mの不整円形の上坑の西半に長径25~50cmの川原石を配している。中央に据えられた山物は直径58cm、高さ35cm。拵形・曲物の中から奈良時代の土師器・須恵器が出土した。

S X10 自然流路SD03が溝状に入り込んだ部分で検出した埋桶遺構。自然流路が埋没したのち桶が埋められている。桶は底板のみ残存しており、桶側はなかった。桶の直径60cm、検出面からの深さ0.06m。山上遺物から近世以降のものと考えられる。

S X11 発掘区南西隅で検出した十坑状の遺構。北辺は自然流路で削平され南辺・西辺は発掘区外になる。この遺構の南延長上に市第164・168次調査で同様の遺構 S X12・S X31を検出している。南北12.6m以上、東西3.6m以上、検出面からの深さ0.2~0.3m。奈良時代以降の土師器・須恵器が出土した。

出土遺物には瓦類が遺物整理箱13箱分、上器類が遺物整理箱12箱分、木製品が遺物整理箱1箱分、寛永通宝1点がある。そのうち、SD1071と自然流路SD135から出土した上器類が良好な資料で、以下に図示し報告する。

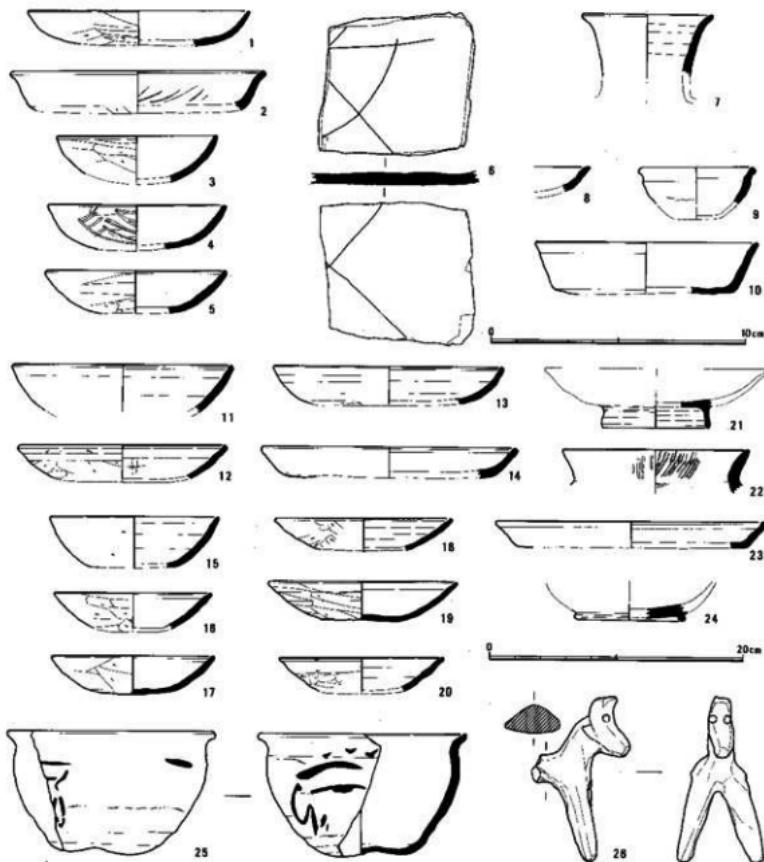
1~10はSD1071出土。上師器には皿A(1・2)、椀A(3~5)、杯C(8)、壺B(9)、線刻のある杯か皿の底部(6)、須恵器には杯A(10)、壺L(7)がある。十師器食器類のほとんどがc手法で調整しているが、2はb手法で調整する。内面には斜放射状暗文があり、河内系の可能性がある。これらの上器は南都Ⅰ期中段階のものである。11~26は自然流路出土。上師器には杯A(11・12)、皿A(13・14)、椀A(15~20)、高台付皿(21)、壺A(22)、人面墨書き上器(25)がある。23は須恵器皿C、24は灰釉陶器椀、26は上馬である。これらの十器には時期差があり、11・13は南都Ⅰ期中段階、12・14~19・24はⅠ期新段階、20はⅡ期古段階、21はⅢ期中

井戸 覧表

| 遺構番号  | 掘形                 |              | 半面形・構造                          | 内径<br>(m)           | 水溜・溝道<br>装置等 | 主要出土遺物                             | 備考                 |
|-------|--------------------|--------------|---------------------------------|---------------------|--------------|------------------------------------|--------------------|
|       | 平面形                | 平面横模<br>式(m) |                                 |                     |              |                                    |                    |
| S E04 | 円形か<br>南北1.95      | 0.55         | 方形縦板柱<br>式隅柱横枝梁                 | 1.05<br>×<br>1.05   |              | 奈良時代土師器・<br>瓦窯器<br>近世の陶磁器          |                    |
| S E05 | 東西1.45以上<br>南北2.45 | 1.25<br>以上   | 方形縦板柱<br>上置き側壁埋<br>下置き側壁<br>横枝梁 | 1.00以上<br>×<br>1.25 |              | 奈良～平安時代の土<br>師器・瓦窯器・近世<br>の陶磁器・瓦通路 | 縦板を施さざしてい<br>る     |
| S E06 | 東西2.05<br>南北1.9    | 0.75         | 方形縦板柱横枝<br>梁横枝梁                 | 約1.00<br>×<br>0.9以下 |              | 近世陶器器・瓦質土<br>器                     |                    |
| S E07 | 東西2.85<br>南北2.1    | 0.84         | 方形<br>横枝梁か                      |                     |              | 近世の陶磁器                             | 縦板は抜かれ縦板一枚<br>のみ残存 |

段階である。22・23・25・26もこの時期の範囲に収まるものと思われる。

調査の結果期待されていた東四坊人路と四条条間路の交差点は、四条条間路の位置に自然流路 S D03があり様相を明らかにすることができなかった。西側で同じく四条条間路にあたる地点で平成7年度に市第325-3・4次調査が行われ、同様の流路を検出している。この流路は直線的な流れや、堤防の存在から人工的に掘削されたと理解されている。また、さらに西側で今年度市第392次調査でそれに続く流路を検出した(40頁参照)。今回検出した自然流路 S D03は堤防が確認できず、汀線も不規則であることから自然流路と解釈したが、位置的に繋がる可能性は十分考えられる。四条条間路に相当する部分が運河状になっていたのか今後の課題である。また、科学分析の結果、周辺の環境が居住域から耕作地へ変化したことが明らかになった。出土遺物に時期差が認められないのをどう理解するかも検討していきたい。(久保邦江・細川富貴子)



S D1071・自然流路 S D03出土土器 (1/4・10のみ1/2)

### (3) 平城京左京四条五坊三坪の調査 第377-4次

調査地は、平城京の条坊復元では、左京四条五坊三坪の東辺中央にあたる。この坪内では昭和63年度の市第168次調査で坪の西端中央部が調査されたほか、今回の発掘区につながる南側で平成8年度に市第353-2次調査が実施されている。今回の調査では発掘区北東隅が市第353-2次調査の発掘区東端より若干東側に寄ることから、前回の調査で確認できなかった三・六坪坪境小路西側溝の西肩を検出する可能性が考えられた。また、東隣の六坪で平成6年度の市第311次調査で検出した池状遺構S X02が北側で西に広がっていないかを確認することを目的とした。

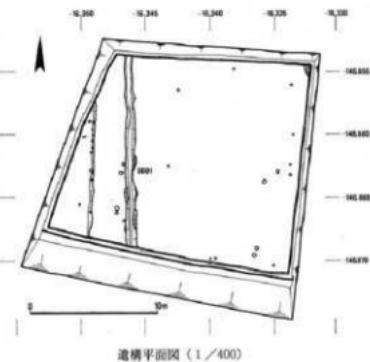
層相は盛土以下黒灰色細粒砂質シルト(旧作土)、灰色細粒砂含シルト、青灰褐色細粒砂と続き、現地表下約0.8~1.4mで橙褐色細粒~粗粒砂の地山となる。地山上面の標高は発掘区東端で64.7m、西端は地下げされており、64.3mである。遺構は地山上面で検出した。

調査の結果、南北方向の素掘りの溝1条、小柱穴を多数検出した。

素掘りの溝SD01は南につながる市第353-2次調査でも続きを検出している。発掘区外北に続いており、総長47m以上になる。幅0.6~0.8m、検出面からの深さ0.1mである。埋土から須恵器片が小量出土しているが時期は不明。

小柱穴は、埋土や土層断面の観察から水田耕作に伴う杭跡とみられる。

以上のように期待された坪境小路西側溝および池状遺構は検出できなかった。(久保邦江)



発掘区全景（上が北）

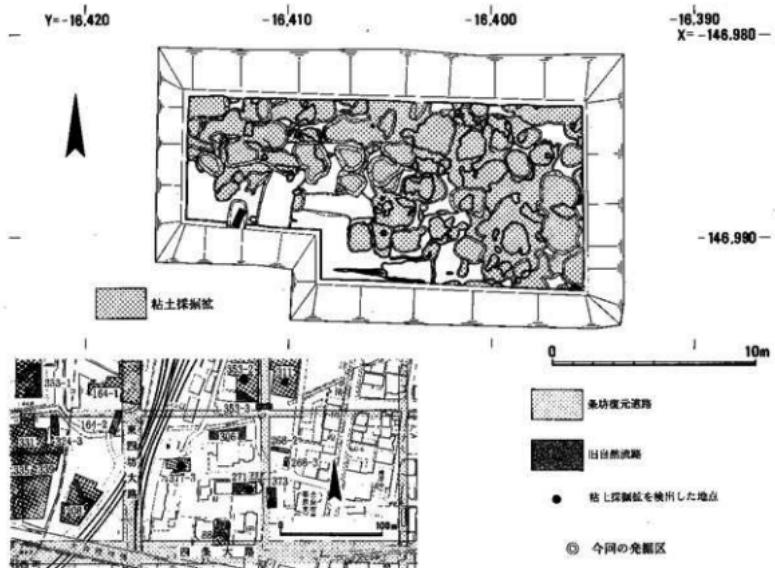
#### (4) 平城京左京四条五坊四坪の調査 第377-3次調査

調査地は、平城京の条坊復元によると左京四条五坊四坪の中央からやや北東寄りにあたる。この坪内では坪の北東部で平成6年度に市第306次調査、中央東寄りで平成5年度に市第271次調査、南端中央部では昭和60年度に市第88次調査が実施されており、今回の調査は4例目になる。なかでも今回の調査地の北東に隣接する敷地で行われた市第306次調査では、発掘区全面が旧菩提川と思われる自然流路で、8~15世紀・14~15世紀・近世の堆積層を確認している。その更に西側の五坪で平成4年に実施された市第268-2・3次調査でも自然流路を確認しており、この坪の北半はおそらく旧菩提川の流路があると予想された。

当初、敷地の西半に南北方向に長い発掘区を設定し、北端から掘りはじめたところ現地表下約2mで流路の埋土と思われる層を確認した。それから0.5m以上灰色砂、灰色粗砂が続くことから、急遽発掘区を南にずらし、東西方向に長い発掘区を設定した。

発掘区内の層相は盛土以下、黒灰色細粒砂質シルト、黒灰色中粒砂質シルト、黄褐色シルト含茶灰色細粒砂、黄褐色シルト含明灰色細粒砂と続き、橙灰色シルトの地山となる。地山上面の標高は概ね64.0mである。造構は地山より一層上の層から掘り込まれているが、検出しにくく地山上面で検出した。

調査の結果、発掘区の南西隅部を除いたほぼ全面で、粘土を採掘したと思われる土坑と、東西方向の素掘りの溝を検出した。土坑を検出してない箇所の土には小礫が含まれており、そのため採掘されなかったと思われる。このことからも土坑は粘土を採掘した可能性が極めて高いこと



遺構平面図 (1/250)・周辺の調査 (1/5,000)

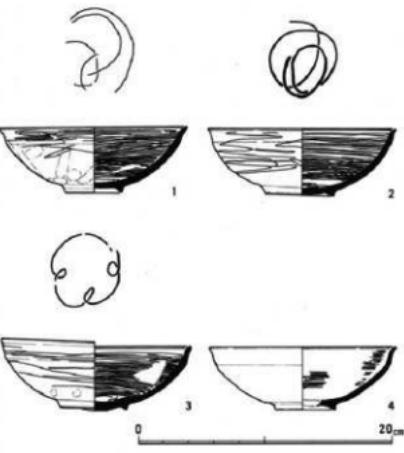
がいえよう。検出の過程で上面で大きい土坑と認識しているものも、下に掘り進むにつれ比較的小型の土坑が切り合っていることがわかつた。そのため、土坑の数を明確にすることはできない。埋土は基本的に黄灰色シルトと黄灰色砂がブロック状に混じりあっているものである。埋土の様子からこれらの土坑は、短期間で埋められている可能性がある。規模は様々で、大きいものは長径3.5m以上、小さいもので長径1.0m前後である。検出面からの深さは0.5m~1.2mである。また、平面では検出してないが、北壁土層断面西隅周辺で灰色砂の層を確認している。おそらく、発掘区のすぐ北側まで自然流路があったと考えられる。

出土した遺物には、弥生土器、奈良~平安時代の土師器、須恵器、12世紀末~13世紀初頭の土器類、16世紀の陶磁器がある。大半が粘土探掘坑から出土したものである。

1・2は口径14.6cm、高さ5.2cmと同じ大きさである。内面見込みにはらせん状暗文を施し、内面下半までヘラミガキをする。外面はヘラミガキを施すが、1の外面にはその下に指頭圧痕がみえる。3は口径14.75cm、高さ5.1cmである。調整は1と同じで外面のヘラミガキは粗い。4は口径14.5cm、高さ4.95cm。外面にもヘラミガキがあると思われるが、表面の摩滅が著しく不明である。特徴から1~3は12世紀末、4は13世紀初頭のものと考えられる。

今回の調査では12世紀末~13世紀初頭の粘土探掘坑群を検出した。周辺の調査をみるとかぎり三・四・五・六坪では奈良時代の建物は市第88次調査を除いて検出されず、自然流路か粘土探掘坑が多く分布していることがわかる。

(久保邦江・細川富貴子)



粘土探掘坑出土土器 (1/4)



発掘区全景 (上が北)

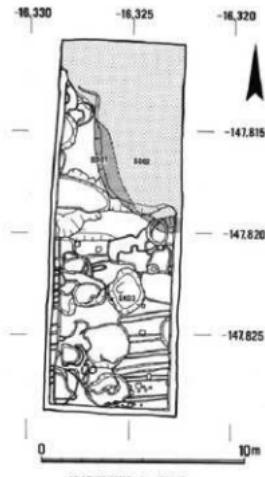
## (5) 平城京左京四条五坊五坪の調査 第373次調査

調査地は、平城京の条坊復元では左京四条五坊五坪の西端中央部にあり、西端で四・五坪坪境小路東側溝がかかる位置である。この坪では平成4年度に市第268-2・3次調査を実施しており、南東から北西に斜行する溝S D03と、南東から北へ弧状に続く流路S D04を確認している。また、西隣の四坪では、南西約80mの位置で昭和60年度に市第88次調査が実施され、弥生時代～古墳時代の自然流路2条を検出した。流れの方向は北東から南西、南東から北西である（33頁参照）。特に、前者の流路からは弥生土器が良好な状態で出土しており、周囲に弥生時代の遺構がある可能性が考えられる。このため、今回の調査では、四・五坪坪境小路東側溝と奈良時代よりも古い遺構の検出を主目的として作業を進めた。

発掘区内の基本層相は、盛土以下、暗灰色粘質土（旧作土）、灰褐色土、灰茶褐色土もしくは灰色粘質土と続き、現地表下約1.2mで黄褐色シルトの上面にいたる。遺構は黄褐色シルト上面で検出した。検出面の標高は概ね64.7mである。

検出した遺構は流路、粘土採掘坑と思われる土坑群、近世以降のものと考えられる東西方向の素掘溝・小規模の柱穴である。

流路は南東から北西方向に斜行しており、おそらく自然流路であると考えられる。埋土は灰色粘土、灰色細砂・中粒砂・粗砂・砂礫、腐植土が互層に堆積している。堆積状況から大きく2時期に分けられる。下層流路S D01からは弥生時代後



遺構平面図 (1/250)



発掘区全景（北から）

期～古墳時代前期の土器が良好な状態で出土した。上層流路 S D02は出土遺物が少なく時期が不明であるが、瓦を含んでいることから奈良時代以降のものと考えられる。

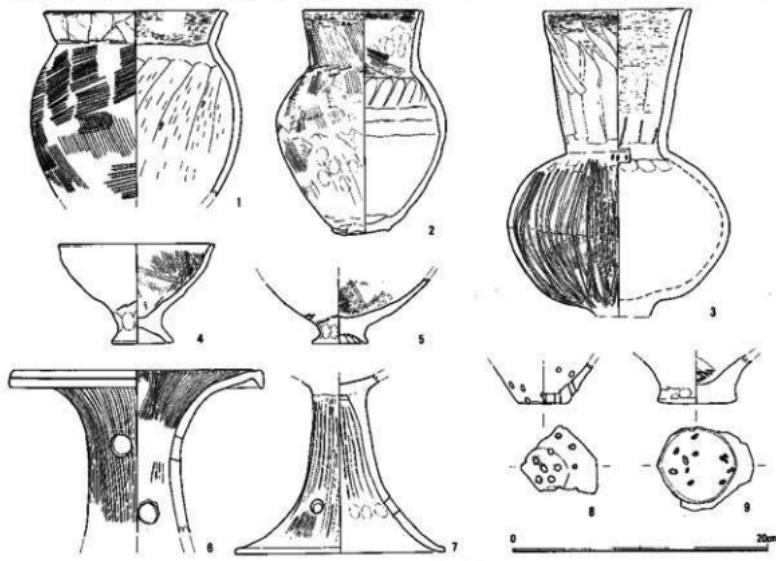
土坑群は流路以南で検出した。平面形は不整形で、出土遺物は少なく、奈良時代以降の土師器・須恵器、中～近世の土器片が含まれる。黄褐色シルト層から切り込まれていることや、周辺の調査例から粘土探査坑と考えられる。十坑 S K05底から破損した曲物側板が出土した。

出土遺物には土器類が遺物整理箱3箱分、瓦類が遺物整理箱1箱分、木製品(曲物側板)1点がある。

これらのうちで特筆すべきものは、下層流路 S D01から出土した弥生土器である。主な器種は、甕・壺・高杯・器台・鉢がある。1は壺で、体部外面にタタキ目がみられる。2は短頸壺で、頸～体部外面にハケ目調整が施されている。3は長頸壺で、頸部外面に板状工具によるナデ調整が、体部外面に縦方向のヘラミガキ調整が施されている。4・5は鉢でいずれも体部と脚部の接合部に指頭圧痕が残る。6は器台の上半部。透かし孔は3方向で、体部は内・外両面ともヘラミガキ調整が施されている。7は高杯の脚部。透かし孔は3方向で、体部外面にヘラミガキ調整が施されている。なお、8は形態的には甕の底部であるが、多数の穿孔が施されていることから瓶の可能性がある。9は壺の底部で、外間に多数の初の糞痕が残るものである。これらの土器は、器形や組成の特徴から弥生時代後期の幾内第V様式に属するものと考えられる。

調査の結果、四・五坪坪境小路の東側溝は検出できず、発掘区外西にあることが判明した。奈良時代以前の遺構としては弥生時代後期～古墳時代前期の自然流路を検出した。先述の市第88次調査の流路と同時期だが流れの方向と位置から同一の流路として繋げるのは困難であり、間で大きく蛇行するか、別の流れである可能性も考えられる。今後、周辺の調査で検出した自然流路の時期等も考慮し、それぞれの繋がりを検討する必要がある。

(久保邦江・安井宣也)



自然流路 S D01出土土器 (1/4)

## (6) 平城京左京四条五坊七坪の調査 第377-5次

調査地は、J R関西本線と県道木津横川線に挟まれた住宅地の中に位置する。平城京の条坊復元では、平城京左京四条五坊七坪の北東部にあたる。これまでに七坪では、市第71次調査が行われているが、現地表下1.3mで湧水の著しい青灰色砂礫層に至り、1.5mまで掘り下げたが遺構は残存していなかった。他に周辺の調査例をみると、四坪では市第88次調査で、奈良時代の掘立柱建物と井戸1基、弥生時代から古墳時代にかけての流路2条を検出している。五・六坪では市第268次調査で、古墳時代後期前半の須恵器が出土した流路を確認している。市第373次調査でも弥生時代後期～古墳時代前期の流路を検出している。さらに十二坪では、市第144次調査で弥生時代の集落の一部を検出しており、今回の調査でも古墳時代以前の遺構を検出する可能性があると思われた。しかし、仮製二万分の一地形図（大日本帝国陸地測量部明治18年測量）によると、J R奈良駅東側一帯が池であったこともわかっている。今回の調査は、七坪内の遺構の残存状況と、古墳時代以前の遺構の有無を把握するために実施した。

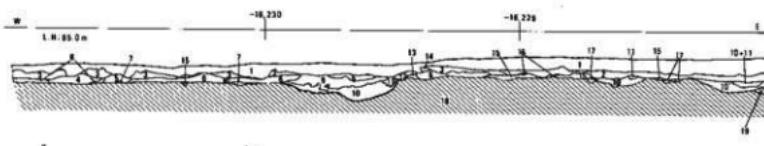
層相は、盛土（0.2～0.3m）、暗灰黒または暗褐色シルト（作土、0.2m）、暗灰色細粒砂質シルト（0.1m）、灰褐色細粒砂（0.1m）、暗灰または暗黃灰色細粒砂（0.2m）とづき、現地表面から約0.4～0.5mで黄灰色砂礫～シルト質細粒砂、または灰緑色砂礫の地山に至る。遺構の検出はこの地山上面で行った。地山は南東から北西へ緩やかに低くなっている。地山上面の標高は、約65.86～65.95mである。

検出した遺構は掘立柱建物1棟、素掘りの溝11条、溝状の遺構1、埋甕遺構1である。以下、主なものについて述べる。

**S B01** 発掘区東側で検出した掘立柱建物である。桁行2間（3.9m）、架間2間（4.5m）分を検出したが、桁行は3間になる可能性がある。柱間は、桁行が西側柱が北から1.8～2.1m、東側柱が北から2.1～1.8m、架間は西から2.1～2.4mで不揃いである。建物の主軸は南北方位北で大きく西に振れている。

**S D01** 南北方向の素掘りの溝である。S B01の柱穴との重複関係から、建物より新しい溝とわかる。長さ2.6m、幅0.2～0.3m、検出面からの深さ0.2～0.5mを検出した。この溝以外の素掘りの溝は、すべて南西から北東へ斜行する溝で、重複関係からS D01より新しいことがわかる。

**S X01** 発掘区西側で検出した溝状の遺構である。重複関係から南西から北東へ斜行する素掘



|                  |                        |                         |               |
|------------------|------------------------|-------------------------|---------------|
| 1 盛土             | 7 苔灰色細粒砂               | 12 塗灰色中粒砂               | 18 黄灰色シルト質細粒砂 |
| 2 植土（暗灰黒シルト）     | 8 暗灰褐色細粒砂              | 13 第12番+灰土中粒砂           | 19 灰褐色砂礫      |
| 3 盛土（明褐色細粒砂質シルト） | 9 青灰色泥～中粒砂+盛土混じる       | 14 塗褐色細粒砂               |               |
| 4 暗灰色細粒砂質シルト     | 10 暗灰または青灰色細粒砂（S X01上） | 15 灰褐色細粒砂               |               |
| 5 暗褐色細粒砂質シルト     | 10' 第10層よりやや粗い         | 16 黄灰色細粒砂               |               |
| 6 暗灰黑色細粒砂質シルト    | 11 灰色中粒砂               | 17 暗褐色細粒砂、黄灰色シルト質細粒砂混じる |               |

北壁上断面図（1/100）

りの溝より新しいことがわかる。長さ6.6m、幅1.8~2.6mを検出した。深さは、東肩と西肩の検出面の高さに0.1m程の高低差があるので標高で示すと、北で65.57m、南で65.75mである。南端は擾乱に削られて途切れている溝なのか、大きな土坑の一部なのか不明である。

S X02 発掘区南西隅で検出した埋甕遺構である。擾乱により上部は壊されていた。陶器の甕であったので、近世以降のものと思われる。

そのほかに、杭の痕跡と思われる小柱穴を多数、検出している。

出土遺物は少量で、それぞれの遺構の時期は不明である。S B01の柱穴から土師器の小片が出土しているが、時期は特定できない。しかし、重複関係からS B01が今回検出した遺構の中で一番古いことがわかる。また、七坪内に遺構が残存する可能性が明らかになった。今後は遺構の時期と、周辺で検出している流路や、池などとの関係について、周辺の調査を待って確認する必要があると考える。

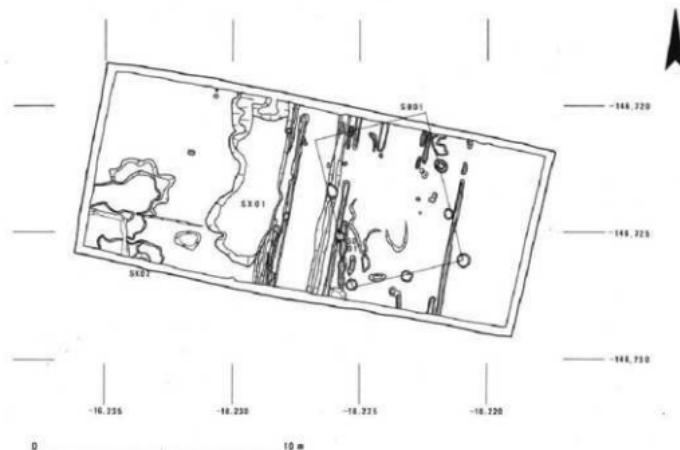
(細川富貴子)



発掘区全景（東から）



建物S B01（南東から）



遺構平面図（1/200）

### 3 平城京左京四条四坊二・三坪の調査 第392次

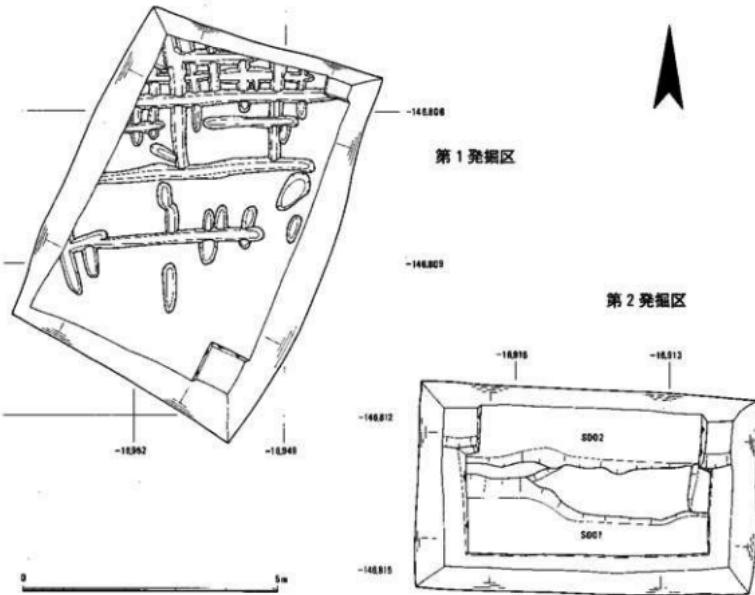
- 1 事業名 三条添川人宮線地方特定道路整備事業
- 2 通知者名 奈良市長 大川靖則
- 3 調査次数 平城京第392次調査
- 4 調査地 奈良市三条添川町地内
- 5 調査期間 平成9年12月10日～12月26日
- 6 調査面積 80m<sup>2</sup>
- 7 調査担当者 宮崎正裕



#### 8 調査概要

調査地は平城京の条坊復元では左京四条四坊二・一坪にあたる。四条条間路の検出を主目的として、発掘調査を実施した。現在の東西道路の南北に発掘区を3箇所設定し、西から順に第1～3発掘区とし、第1・2発掘区は二坪、第3発掘区は三坪に位置する。

第1発掘区 層相は盛土(1.0m前後)、黒灰色砂質土(旧作土)、淡黄灰色粘砂と続き、現地表下約1.2m(標高約61.5m)で淡黄灰色砂質土の地山になる。遺構は水田耕作用と推察できる



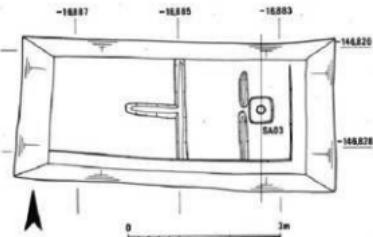
素掘溝のみである。重複関係から、南北素掘溝は東西素掘溝に比べて、新しい傾向がある。

**第2発掘区** 層相は盛土(1.1m前後)以下は粘質土、砂の互層となる。この互層は河道の堆積であり、2時期に大別できる。下層河道をS D01、上層河道をS D02とする。S D01は発掘区中央で北肩を検出した。深さ約1.5mまで掘削したが、底は確認できなかった。南肩は発掘区外南にある。S D02は発掘区中央で南肩を検出した。深さ1.2m前後で、北肩は発掘区外北にある。S D01出土の土師器、須恵器は奈良時代後半から平安時代初めまでのもので、5世紀後半の円筒埴輪片もある。S D02から土師器、須恵器、黒色土器、灰釉陶器、製塙土器、13世紀代の瓦器碗、15世紀代の土師器皿、内外面ともに黒漆を塗った木製小皿の小片などが出土した。

**第3発掘区** 層相は盛土(0.7m前後)、暗灰色粘質土、灰色粘質土、灰色粘砂と続き、現地表下約1.4m(標高約61.0m)で淡黄色粘土の地山になる。検出した主な遺構は南北掘立柱列1条(S A03)である。建物の北西・南西隅柱の可能性もある。柱穴は柱掘形が一辺0.5m前後、深さ約0.3mで、直徑0.15mの柱痕跡が残る。

S D01の南肩は第3発掘区までは延びず、ほぼ現在の道路下で収まる。規模から、左京四条四坊十五・十六坪で検出した四条条間路を踏襲する流路<sup>1)</sup>と同一の可能性がある。S D02は第1発掘区までは延びない。途切れるか国土方眼方位西で南に振れると考える。(宮崎正裕)

1)「平城京左京四条四坊十五坪の調査 第318-1・3、325-2・7、347-1次」  
『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成8年度』奈良市教育委員会 1997



第3発掘区遺構平面図(1/100)



第1発掘区全景(西から)



第2発掘区全景(東から)



第3発掘区全景(東から)

## 4 平城京左京五条一坊十四坪の調査 第395次

- 1 事業名 (仮称)柏木南北線道路改良工事
- 2 通知者名 奈良市長 大川靖則
- 3 調査次数 平城京第395次調査
- 4 調査地 奈良市柏木町地内
- 5 調査期間 平成10年1月16日～2月2日
- 6 調査面積 80m<sup>2</sup>
- 7 調査担当者 宮崎正裕



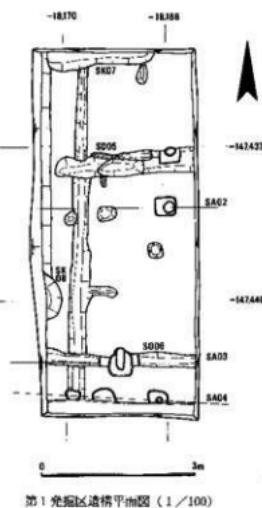
### 8 調査概要

調査地は平城京の条坊復元では左京五条一坊十四坪の西端にあたり、十一坪との坪境小路が想定される。条坊構造と十四坪内西端の様相解明を目的として、発掘区を3箇所設定し、発掘調査を実施した。南から順に第1～3発掘区とし、第1発掘区は坪内の南1/3、第2発掘区は坪内中央、第3発掘区は坪内北端に位置する。いずれの発掘区も肩組は黒灰色砂質土（作上）以下、灰色砂質土、黄茶灰色粘質土と続き、現地表下約0.3m前後で黄色粘土の地山となる。地山上面の標高は概ね58.1mである。遺構はすべて地山上面で検出した。

検出した主な遺構は古墳時代の溝1条（SD01）、奈良時代の掘立柱列3条（SA02～04）、溝2条（SD05・06）、上坑3（SK07～09）、中世以降の上坑1（SK10）がある。

**第1発掘区** S A02は東西掘立柱列である。建物の可能性はあるが、柱の規模と柱間から隅柱とは考え難い。S A03は東西掘立柱列であるが、建物の北西・北東隅柱の可能性もある。柱掘形から軒丸瓦6313Aa（1点）が出土した。重複関係から、SD06よりも新しい。S A04は東西1間（1.7m）以上の掘立柱列であるが、建物の可能性もある。SD05は幅約0.4m、深さ約0.1mで、発掘区外東へ続く。埋土は黄茶灰色粘質土である。SD06は幅約0.3m、深さ約0.2mで、発掘区外へ続く。埋土は茶灰色粗砂である。SK07は北端で深さ0.1m前後で、発掘区外北へ続く。埋土は上層が茶灰色粘砂（炭化物含む）、下層が黄灰色粘砂である。SK08は西端で深さ約0.1mで、発掘区外西へ続く。埋土は黄茶灰色粘砂である。

**第2発掘区** SD01は北西から南東に流れ、発掘区外へ続く素掘りの溝である。幅6m前後、深さ約1.6mで、溝底の標高は約56.5mである。埋土は砂と粘質土の互層が続き、最下層に約0.2mの厚さで砂礫が堆積する。古墳時代前期の土師器が出土した。SK09は不整形な上坑で、深さ0.05m程度遺存する。SK10は深さ約0.7mの上坑である。底は平坦で、発掘区外南東に続く。埋土は暗灰色粘砂（黄色粘土含む）で、陶器片が出土した。



**第3発掘区** 柱穴1つを検出したのみで、発掘区中央は既設の水道管で搅乱を受ける。

想定していた条坊造構は検出できなかったが、造構の遺存状態から、十一・十四坪坪境小路の東側溝は発掘区外西に遺存するものと考える。今回検出したS D01は当調査地の南東で、過去に確認した古墳時代前期の溝<sup>13</sup>と同一のものである可能性が高い。  
(宮崎正裕)

1)「平城京左京五條一坊十三・十四坪・柏木通跡の調査 第2回次」  
『奈良市埋蔵文化財調査報告書 平成6年度』奈良市教育委員会 1993



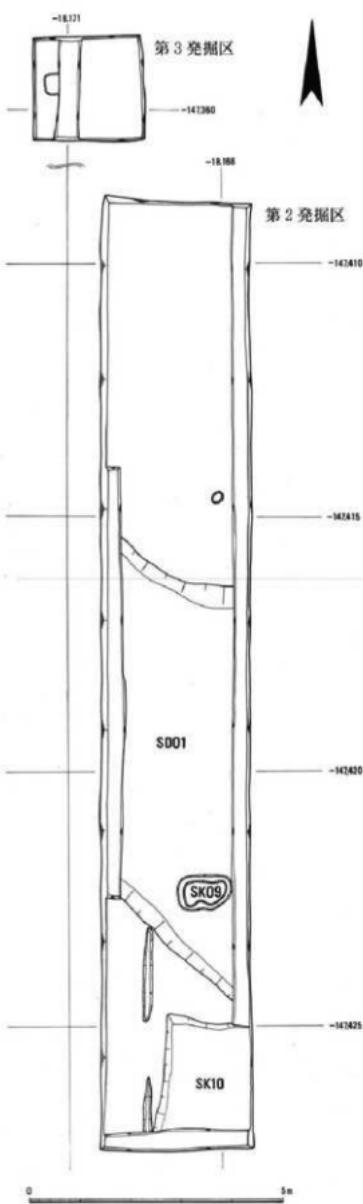
第1発掘区全景（北から）



第2発掘区全景（南から）



第3発掘区全景（南から）



第2・3発掘区造構平面図 (1/100)

## 5 平城京九条大路の調査 第397次

- 1 事業名 市道南部240号線改良工事
- 2 通知者名 奈良市長 大川靖則
- 3 調査次数 平城京第397次調査
- 4 調査地 奈良市北之庄地内
- 5 調査期間 平成10年1月19日～1月26日
- 6 調査面積 24m<sup>2</sup>
- 7 調査担当者 三好美穂



### 8 調査概要

本調査は、市道南部240号線改良工事に伴う事前の発掘調査である。調査地は、平城京の条坊復元では、左京九条四坊・九条大路の南側にあたり、平城京の南辺を限る流路が想定されている。九条大路の発掘調査は、1983年に奈良国立文化財研究所が行っており、九条大路北または南側溝と考えられる素掘りの溝と築地痕跡や門跡を検出している。1993年にも市第300次調査を実施しているが、九条大路及び道路側溝、築地等は検出できなかった。

今回は、九条大路の条坊遺構及び平城京南辺を限る流路を検出することを主目的として行い、東西0.6m、南北40mの発掘区を設定して実施した。発掘区の層相は、基本的に黒灰色粘土（作土）、灰色粘砂（床土）の下がすぐに明茶褐色粘土または暗褐色粘土の遺構面（標高約57.3m）になるが、発掘区の北端では、作土・床上の下には奈良時代の瓦や土器片を包含する暗灰色粘砂、橙褐色粘土、淡灰色砂（約0.2m）が堆積していた。この堆積状態は、周辺の調査成果と基本的には同じで、遺構面の標高も大差はない。

調査の結果、素掘溝、柱穴、土坑、自然流路を検出したが、条坊関連遺構はなかった。周辺の調査成果をみても、今回の調査地内の遺構が大きく削平されたとは考えにくく、少なくとも本調査地内には、条坊関係の遺構は存在していない可能性が高いと思われる。 (三好美穂)



## 6 平城京左京四条四坊十一坪の調査 第379次

- 1 事業名 大宮保育園建設事業  
2 通知者名 余良市長 大川靖則  
3 調査次数 平城京第379次調査  
4 調査地 奈良市三条大宮町3番8号  
5 調査期間 平成9年6月2日～6月26日  
6 調査面積 100m<sup>2</sup>  
7 調査担当者 細川富貴子



発掘区位図 (1/6,000)

### 8 調査概要

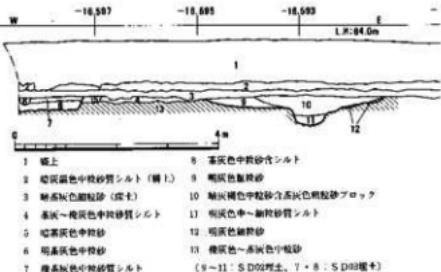
調査は第1期開発改築工事に伴うもので、第2期工事は来年度に予定されている。調査地は平城京の条坊復元では、左京四条四坊十一坪の東邊にある。十一坪での調査例は少ないが、本調査地の東に隣接する十四坪の西邊で行った市第347-2・353-1次調査では、奈良時代の坪内道路、側溝、建物群などを確認しているが、十一・十四坪坪境小路とその東西側溝は検出していない。また、本調査地の南で行った市第331・335次調査では、十二・十二坪坪境小路とその東西側溝を検出している。今回の調査では十一・十四坪坪境小路の確認を主な目的とした。

調査は、園庭に発掘区を設定し行った。層相は上から、園庭の盛土(0.7～0.8m)、暗灰黒色中粒砂質シルト(作上、0.2～0.3m)、暗茶灰色細粒砂(床下、0.2m)と続き、現地表面から約1.0m下で橙灰色中粒砂～砂礫の地山になる。地山は発掘区内で南北へ行くにつれて、礫の割合が多くなっている。遺構の検出は、この地山上面で行った。地山上面の標高は、概ね62.5m前後である。

検出した遺構には、左京四条四坊十一・十四坪坪境小路と、その西側溝、築地の雨落溝、築地に開く門2棟、奈良時代～中世の素掘りの溝がある。以下、主なものについて述べる。

S F 01 十一・十四坪坪境小路である。長さ10m分を検出した。路面幅は、東側溝が未検出なため不明だが、発掘区内では1.4～2.0mを検出した。

S D 02 十一・十四坪坪境小路西側溝である。発掘区北端からの長さ約7.2m分を検出した。幅は0.8～2.2m、検出面からの深さは、0.1～0.6mの素掘りの溝である。発掘区北端で一番深く、地山に砂礫が多くなる南へ行くにしたがって、徐々に浅くなっている。発掘区南壁の土肩でも、西側溝の痕跡は確認できなかったので側溝は削平されていると思われる。西側溝心の国土座標は、X = -146,910.000、Y = -16,592.800である。



北壁上断面図 (1/100)

**S D03** S D02との間に築地塀の痕跡は残っていないが、S D02との位置関係から、雨落溝と考える。発掘区北端からの長さ約7.0m、検出面からの深さは約0.1mの浅い素掘りの溝である。発掘区内で検出したのは東肩のみで、西肩は発掘区外にあると思われる。東肩からの幅は、0.5~0.8mである。S D02と異なり全体的に浅い溝だが、発掘区内で検出した長さはS D02とほぼ同じである。雨落溝の痕跡も、発掘区南壁で確認できなかったので、S D02と同様に削平されていると思われる。

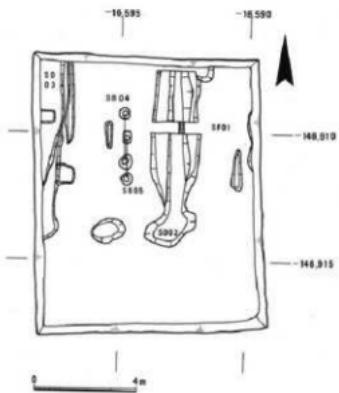
**S B04・05** S D02とS D03との間で検出した。坪内約1/4の位置で、築地に開く門と思われる。S B04は柱間1.8m、S B05は柱間1.5mで、ほぼ同じ位置で建替えをしている様である。

遺物の出土量は全体的に少なく、遺物整理箱で2箱分である。

瓦類の出土量は遺物整理箱で1箱分である。軒瓦は皆無で、大部分が丸瓦、平瓦の小片である。出土した遺構は、遺構面直上からがほとんどで、他はS D02に限られる。

土器類が出土した遺構もS D02のみである。S D03、S B04・05は土器が出土しなかったので、時期は不明である。S D02からは南都I期中～新段階（8世紀末～9世紀初）の土師器、須恵器が出土した。土師器には皿A、高杯、甕、瓶など、須恵器には杯B、皿C、壺類、甕類などの器種がある。その他に、弥生時代後期の甕の底部も出土している。

今回の調査で検出した十一・十四坪坪境小路西側溝と雨落溝は、両者とも発掘区内で削平されて、南端まで続いていなかった。本調査地の南に位置する市第331・335次発掘区で検出した十二・十三坪坪境小路西側溝（S D1061）も北側では浅くなっている。このことから、坪境小路西側溝は2つの調査地の間を流れる菩提川の氾濫等による削平により、一部消滅していると思われる。（細川富貴子）



## 7 平城京左京八条一坊十五坪の調査 第380次

|         |                            |
|---------|----------------------------|
| 1 事業名   | 第11号(杏中)市営(A事業地)住<br>宅建替事業 |
| 2 通知者名  | 奈良市長 大川靖則                  |
| 3 調査次數  | 平城京第380次調査                 |
| 4 調査地   | 奈良市杏町306-6他                |
| 5 調査期間  | 平成9年6月30日~7月25日            |
| 6 調査面積  | 200m <sup>2</sup>          |
| 7 調査担当者 | 宮崎正裕                       |



### 8 調査概要

調査地は平城京の條坊復元では左京八条一坊十五坪の北西隅にあたり、調査地の西端で十坪、北端で十六坪との坪境小路が想定される。条坊構造と十五坪内の様相解明を主目的として、発掘調査を実施した。既設の水道管の埋設による制約のため、発掘区を2箇所に分けて設定し、北側を第1発掘区、南側を第2発掘区とした。

いずれの発掘区も層相は宅地造成時の盛土(0.5~0.6m)以下、暗灰色砂質土(旧作上)、黄灰色砂質土、灰色砂質土、淡黄灰色砂質土、黄茶色粘土と続き、現地表下約1.2mで灰褐色粘土の地山となる。地山上面の標高は概ね52.7mである。遺構はすべて地山上面で検出した。

検出した主な遺構は十・十五坪坪境小路(S F01)とその両側溝(S D02・03)の他、奈良時代の土坑1(S K04)、掘立柱建物2棟(S B05・06)、掘立柱列3条(S A07~09)である。検出した素掘り溝はすべてが南北方向のもので、東西方向のものはなかった。

S F01 十・十五坪坪境小路である。路面幅は4.5m前後であるが、第2発掘区の南半部分では、S D03による浸食のためか、路面幅3.5m前後の狭い箇所もある。第1発掘区での両側溝心間距離は約6.7mで、道路心の国土地標はX=-148,825.000、Y=-18,173.860である。

S D02 十・十五坪坪境小路の西側溝である。溝幅は2.7m前後、深さ0.5~0.7mの素掘りの溝で、埋土は上下2層に人別できる。溝の流水がS F01の路肩を浸食するためか、上層の溝心は下層の溝心に比べて東に寄る。重複関係から、上層の埋没時期はS K04の埋没時期よりも後である。溝心の国土地標はX=-148,825.000、Y=-18,177.320である。

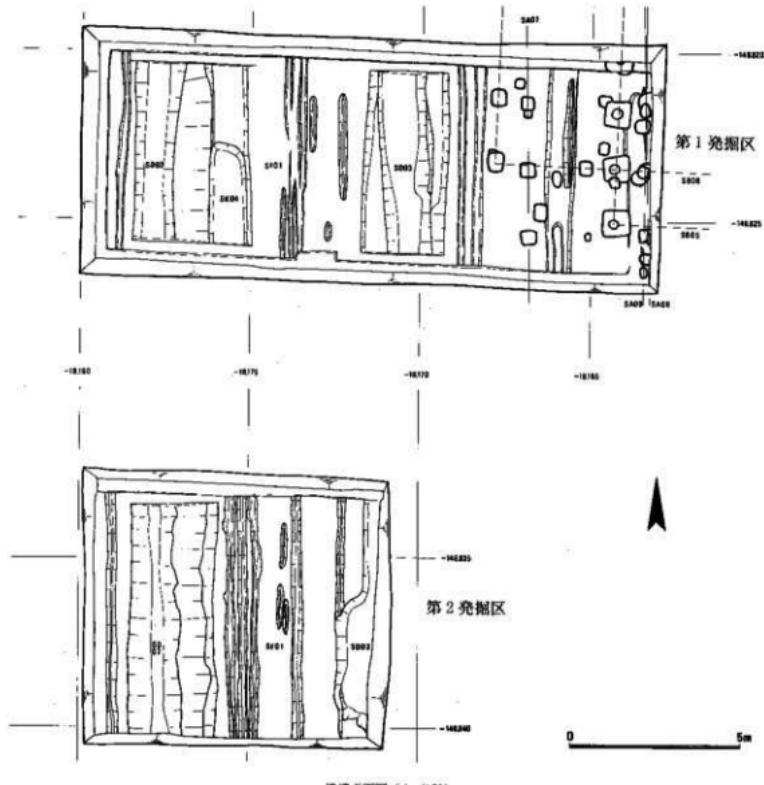
S D03 十・十五坪坪境小路の東側溝である。第1発掘区で溝幅が2.5~2.9m、深さ0.3~0.4mの素掘りの溝であるが、第2発掘区では溝の西端を検出したのみである。S D01同様、埋土は上下2層に分かれる。溝の流水がS F01の路肩を浸食するためか、上層の溝心は下層の溝心に比べて西に寄る。溝心の国土地標はX=-148,825.000、Y=-18,170.590である。

S K04 第1発掘区のS D02の東側で検出した南北3.5m以上、東西1.2m、深さ0.2mの土坑である。発掘区外南に続くが、第2発掘区までは延びない。重複関係から、埋没時期はS D02上層の埋没時期よりも先である。

S B05 南北3間(4.8m)以上の掘立柱建物で、柱間は1.6m等間である。いずれの柱掘形も一辺0.8m前後、深さ0.3m前後で、直径0.3m前後の柱痕跡がすべてに残る。南北棟建物の西側柱

列あるいは東西棟建物の西妻柱列と考えるが、北から5番目の柱掘形は確認できず、4番目の柱は南北隅柱である可能性が高い。建物の主軸は図上方眼方位北で東に振れる。

S B06 挖立柱建物の南西隅で、南北1間(1.9m)分、東西1間(2.7m)分を検出した。隅柱の柱掘形は深さ約0.6mで、S B05に比べると深い。主軸は図上方眼方位北で東に振れる。



**S A07** 南北2間(3.9m)以上の掘立柱列で、柱間は1.95m等間である。国土方眼方位北で西に振れ、S D03の東端から約2.4mの位置にある。

**S A08** 南北2間(3.9m)以上の掘立柱列で、柱間は1.95m等間である。重複関係から、S A09よりも古い。S A07と柱筋が揃うことから、同時期の建物の西側柱列あるいは西妻柱列の可能性もある。

**S A09** 南北2間(3.7m)以上の掘立柱列で、柱間は北から1.8m-1.9mである。柱筋は国土方眼方位にはば沿う。S A08と柱位置がほぼ重複することから、建て替えの可能性もある。S A09の柱掘形はS A08に比べると深い。

遺物の総量は整理箱で12箱分あるが、大半が遺物包含層から出土した瓦と土器である。S D02・03から丸瓦、平瓦、土師器、須恵器、黒色土器、土馬の小片が出土した。S D02の下層埋土から奈良時代後半、上層埋土から奈良時代末～平安時代初めの土器と軒平瓦6702F(1点)が出土した。S D03の上層埋土から奈良時代末～平安時代初めの黒色土器、軒丸瓦6308C(1点)が出土した。素掘溝、遺物包含層から奈良時代末～平安時代初めの綠釉陶器、灰釉陶器、杯蓋を転用した硯、土馬、型式不明の軒平瓦(1点)や平安時代後半の土師器皿などが出土した。

十・十五坪坪境小路の東側溝であるS D03と、十五坪内を区画する施設としてS A07を確認したが、S D03の東端からS A07間に築地などの区画施設の痕跡はなかった。想定していた十五・十六坪坪境小路に関連する遺構は確認できなかったが、遺構の遺存状態からみて、同坪境小路の南側溝は発掘区外北にあるものと考える。

十・十五坪坪境小路(東一坊坊間東小路)は過去に六条一坊十坪・十五坪<sup>1)</sup>と七条一坊十六坪<sup>2)</sup>で検出している。前者での道路心(両側溝心)の国土座標はX=-147,795.000、Y=-18,179.110で、今回の検出位置は5.25m東に寄る。  
(宮崎正裕)

1)「平城京左第六条一坊十・十五坪坪境小路の調査 第130次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 明治62年度』奈良市教育委員会 1988

2)「在京七条一坊十六坪の調査 第252・253・254・255次」『1994年度 平城宮跡発掘調査部 発掘調査概報』奈良国立文化財研究所 1995



第1発掘区全景(東から)



第1発掘区S F01(南から)



第2発掘区全景(南から)

## 8 平城京左京九条一坊十六坪の調査 第384次

- 1 事業名 第11号(杏南)市営(B事業地)住  
宅建替事業
- 2 通知者名 奈良市長 大川靖則
- 3 調査次數 平城京第384次調査
- 4 調査地 奈良市西九条町三丁目10-4他
- 5 調査期間 平成9年8月19日～9月5日
- 6 調査面積 100m<sup>2</sup>
- 7 調査担当者 宮崎正裕



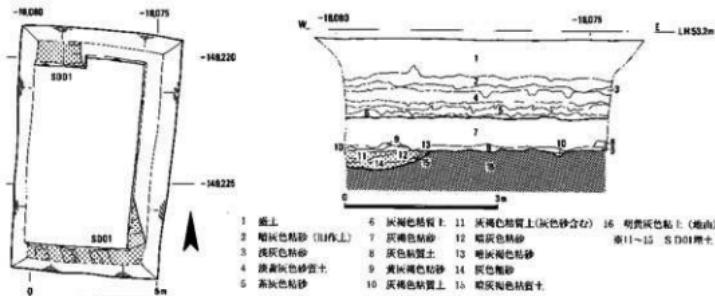
### 8 調査概要

調査地は平城京の条坊復元では左京九条一坊十六坪の北東隅にあたり、調査地の北端で八条大路、遺存地割と周辺の調査<sup>1)</sup>から十六坪に佐保川の旧河道が想定される。条坊造構と川河岸の検出を主目的として、発掘調査を実施した。既設の水道管の埋設による制約のため、発掘区を2箇所に分けて設定し、北側を第1発掘区、南側を第2発掘区とした。

いずれの発掘区も層相は宅地造成時の盛土(0.7m前後)以下、暗灰色粘砂(IH作十)、淡灰色粘砂、淡黄灰色砂質上、茶灰色粘砂、灰褐色粘質土と続き、現地表下約1.5mで灰褐色粘砂、現地表下約2.0mで明黄灰色粘土上の地山となる。地山上面の標高は概ね50.9mである。第1発掘区では周辺の調査<sup>1)</sup>での造構検出面の標高から、川河岸地とを考えた灰褐色粘砂上面で造構検出を試みた。のちに灰褐色粘砂が河道の堆積でないことが判明し、地山上面でも造構検出をする必要があった。敷地が狹小な事情から、灰褐色粘砂の掘削を発掘区内の周囲壁面の上層観察に止どめた。同層から中世の土器が出土した。第2発掘区では地山上面でのみ造構検出をした。

検出した主な造構は古墳時代の溝2条(S D01・02)、奈良時代末～平安時代初めの土坑1(S K03)、時期不明の溝1条(S D04)と土坑1(S X05)がある。

**第1発掘区** S D01は四方打眼方位南で東に振れる素掘りの溝で、発掘区外に続く。東肩を検出したが、西肩は発掘区外西にある。発掘区北端で幅約1.7m分、深さ約0.4mまで確認した。埋



第1発掘区造構平面図 (1/200)・北壁上層図 (1/100)

土は上層から灰褐色粘質土（灰色砂含む）、暗灰色粘砂、灰色粗砂である。発掘区南端で幅約4.6m分、深さ0.5mまで確認した。上層埋土は北端と同様、灰褐色粘質土（灰色砂含む）であるが、以下の堆積は主に灰色粗砂と灰色砂の互層で、部分的に暗灰色粘質土が堆積する。灰色粗砂から古墳時代中頃（5世紀代）に位置付けられる土師器が出土した。

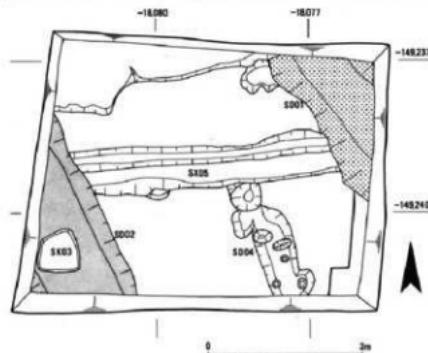
**第2発掘区** 発掘区北東隅で幅約2.2m、深さ0.4mの素掘りの溝を検出した。SD01の西肩にあたると考える。溝幅は7m以上に達するものと推察できる。重複関係から、SX05よりも古い。SD02は南西隅で検出した国土方眼方位南で東に振れる素掘りの溝で、発掘区外に続く。東肩を検出したが、西肩は発掘区外西にある。幅約2.0m分、深さ約0.4mまで確認した。埋土は上層から黄灰褐色砂、淡灰色粘砂、黄茶灰色砂である。遺物は黄茶灰色砂から古墳時代中頃（5世紀後半）の土師器小形丸底壺が1個体出土したのみである。重複関係から、SK03、SX05よりも古い。SK03は南北、東西とも0.9m前後、深さ約0.2mの土坑である。埋土は暗灰色粘砂で、出土した土器は奈良時代末～平安時代初めのものである。重複関係から、SD02よりも新しい。SD04は幅約0.7m、深さ約0.1mの溝で、長さ2.5m分を検出した。埋土は黄色粘質土で、遺物は出土しなかった。重複関係から、SX05よりも古い。SX05は発掘区北半の落ち込みで、発掘区外に続く。埋土は灰褐色粘質土で、南半の地山面よりも0.1～0.2m低い。第1発掘区の地山検出面は第2発掘区のそれに比べ0.1～0.2m低い。

12世紀後半～13世紀代の土師器皿・羽釜、瓦器碗が少量出土した。重複関係から、SD01・02・04よりも新しい。

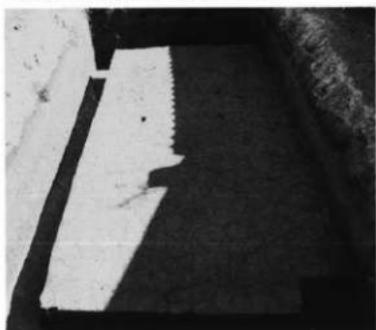
想定していた条坊造構や佐保川の旧河道は検出できなかった。八条大路南側溝は第1発掘区と第2発掘区間に遺存する可能性はある。しかし、地山上面の標高は周辺<sup>2)</sup>に比べて約0.9m低く、造構は削平を受けるものと考える。（宮崎正裕）

1)「平城京左京八条二坊四坪の調査 第395次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成1年版』奈良市教育委員会 1995

2)「平城京左京八条二坊二四坪発掘調査報告」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 昭和25年度』奈良市教育委員会 1980



第2発掘区遺構平面図（1/100）



第1発掘区（北から）



第2発掘区（南から）

## 9 平城京左京七条二坊五・六坪の調査 第385・387次

- 1 事業名 第385次 第13号(八条)市官(A事業地)住宅建替事業  
第387次 第13号(八条)市官(B事業地)住宅建替事業
- 2 通知者名 奈良市長 大川靖則
- 3 調査次数 第385次 平城京第385次調査  
第387次 平城京第387次調査
- 4 調査地 第385次 余良市八条一丁目807-1他  
第387次 余良市八条一丁目796-2他
- 5 調査期間 第385次 平成9年9月9日～9月12日  
第387次 平成9年9月5日～10月8日
- 6 調査面積 第385次 77m<sup>2</sup> 第387次 150m<sup>2</sup>
- 7 調査担当者 第385次 秋山成人  
第387次 宮崎正裕

### 8 調査概要

**第385次調査** 調査地は平城京の条坊復元では左京七条二坊五坪の北東隅にあたる。五坪の東端には南流する佐保川の旧河道が想定される。発掘区は調査地の東半に東西7m、南北11mの規模で設定した。

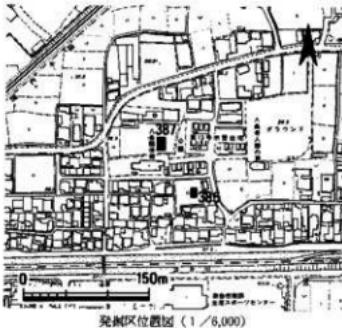
層相は黒灰色土（作土）、黄灰色粘砂、淡黄灰色粘質土、灰色粘砂（黄灰色粘土含む）と続き、現地表下約0.8m（標高約54.3m）で黄灰色粗砂となる。発掘区東端で東西1m以上、深さ0.4m以上の流路（上層流路）を検出した。埋土は赤灰色粗砂で、堆積状態から南流していたものと推察できるが、遺物は出土しなかった。黄灰色粗砂以下も砂と粘質土の堆積が続く（下層流路）。湧水が激しく、現地表下約2.5m（標高約52.5m）で掘削を断念した。遺物は灰色粘質土（細砂含む）から土師器の小片が出土したのみである。遺存状態が悪く時期は不明である。  
(秋山成人)

**第387次調査** 調査地は第385次調査地の北西約40mに位置し、左京七条二坊六坪に該当する。調査地の南端には五坪との坪境小路が想定される。条坊造構と旧河道の検出を主目的として、発掘調査を実施した。

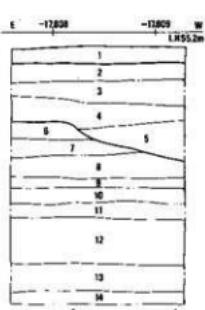
層相は暗灰色砂質土（作土）以下、橙灰色粗砂、灰色粘質土、淡茶灰色粘砂、青灰色粘砂、淡灰色砂質土、綠灰色粘砂、淡茶灰色粘砂と続き、現地表下約1.9mで黄茶灰色粘砂の地山となる。地山上面の標高は概ね53.3mである。遺構はすべて地山上面で検出した。

検出した主な遺構は弥生時代後期の溝1条（S D01）、五・六坪坪境小路（S F02）とその北側溝（S D03）、奈良時代の溝3条（S D04～06）、井戸1基（S E07）、掘立柱跡2条（S A08・09）、室町時代後期の河道1条（S D10）がある。

**S D01** 発掘区北東隅で検出した弥生時代後期の溝である。2時期に大別でき、古段階をA、新段階をBとする。Aは幅2.0m以上、深さ1.1m以上で、長さ2.0m分を検出した。南端にはBが掘られ、北端は発掘区外北にある。埋土は上層（青灰色砂質土）と下層（主に灰色粗砂と灰色砂礫の互層）に大別できる。Bは△埋没後に掘られる。幅約2.7m、深さ0.4～0.5mで、長さ2.3m分を検出した。埋土は上層（青灰色粘質土）と下層（暗青灰色粘質土）に大別できる。A・Bともに出土した土器は畿内V様式に位置付けられるものである。



発掘区位置図 (1/8,000)



1 黒灰色土(作土)  
2 黄灰色土  
3 淡黄灰色粘質土  
4 灰色粘砂  
5 黄灰色粗砂  
6 淡茶色粗砂  
7 青灰色粗砂  
8 上層流路  
9 灰色粗砂  
10 灰色粗砂  
11 灰色粗砂  
12 下層流路  
13 灰色粗砂  
14 灰色粗砂

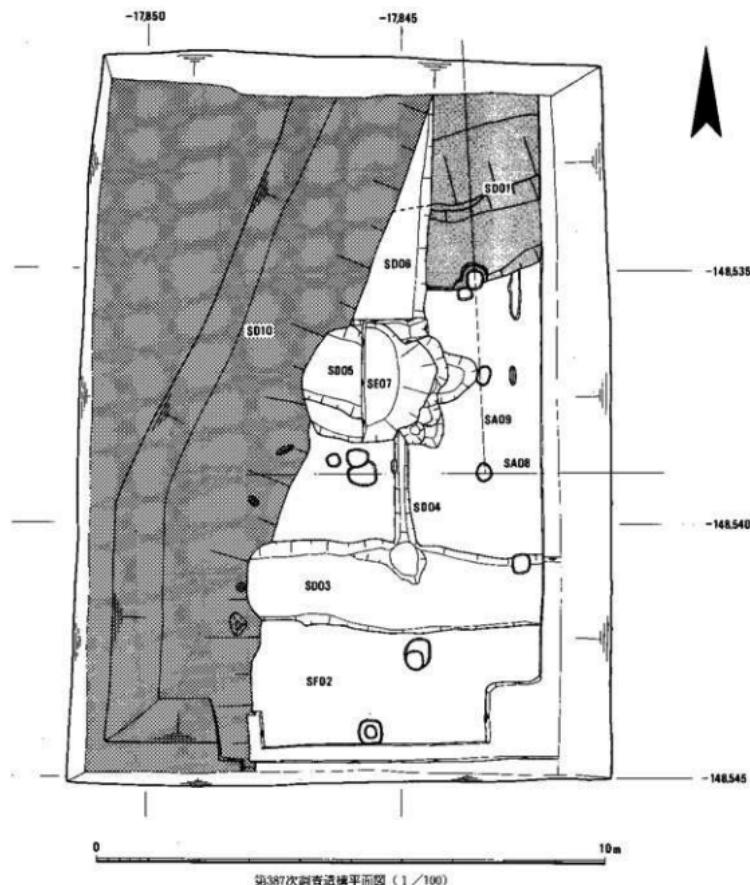
発掘区断面図 (1/50)

S F02 五・六坪坪境小路で、幅2.7~2.9m分を検出したが、発掘区外南へ続く。路面上で柱穴を検出したが、建物や塀としてはまとまらず、遺物は細片で時期も特定できなかった。

S D03 五・六坪坪境小路の北側溝である。幅1.4~1.8m、深さ0.4m前後の素掘りの溝で、長さ6.2m分を検出した。埋土は上層（暗灰色粘砂）と下層（茶灰色粘砂）に大別できる。下層から奈良時代末～平安時代初め、上層から平安時代初めの上器が出土した。溝心の国十座標はX=-148,541.150、Y=-17,845.000である。重複関係から、埋没時期はS D04よりも後である。

S D04 幅0.3m前後、深さ0.1~0.2mの南北方向の素掘りの溝で、長さ2m分を検出した。南端でS D02、北端でS D05・06と合流する。埋土は黄茶色粘砂である。重複関係から、S D03よりも先に、S D05・06の下層と同時期に埋没する。

S D05・06 S D05は幅約2.0m、深さ約0.4mの東西方向の素掘りの溝で、長さ3.2m分を検出した。溝の南肩はS D03の北肩よりも北へ2.4m前後の位置にある。東端でS D04・06と合流す



第387次調査遺構平面図 (1/100)

る。溝の上層埋土は暗灰色粘砂（炭化物含む）であるが、東端には下層埋土である黄茶色粘砂が薄く堆積する。S D06は幅0.9m以上、深さ約0.2mの南北方向の素掘りの溝で、長さ6.8m分を検出した。溝の東肩はS A09よりも西へ0.8m前後の位置にある。埋土はS D05と同様、暗灰色粘砂（炭化物含む）と黄茶色粘砂で、幅は埋土の堆積状態からみて、1.2m前後になるものと推察できる。S D05・06とも暗灰色粘砂（炭化物含む）から奈良時代末～平安時代初めの土器、軒平瓦（型式不明1点）などが出土した。重複関係から、S D05・06はS E07よりも新しく、S D05・06の下層とS D04、S D05の上層とS D06の上層は同時期に埋没する。

S E07 南北約2.4m、東西2.6m以上、深さ約1.5mの井戸枠の抜取り痕跡であるが、枠材は確認できなかった。埋土は上層（茶灰色粘砂）と下層（暗青灰色粘質土）に大別できる。奈良時代末～平安時代初めの土器が出土した。重複関係から、S D05・06よりも古い。

S A08 東西1間（2.4m）以上の掘立柱塀である。ほぼ国土方眼方位に沿う。

S A09 南北2間（3.8m）以上の掘立柱塀で、柱間は1.9m等間である。南端はS A08の柱を共有するものと考えるが、国土方眼方位北で西に振れる。柱穴の遺存状態から、南から3間目の柱穴は削平されたものと考える。

S D10 発掘区西半で検出した室町時代後期の河道で、発掘区内を北東から南西に流れる。東肩を検出しが、西肩は発掘区外西にある。現地表下約1.2m（標高約54.0m）の淡茶灰色粘砂あるいは青灰色粘砂の上面から掘り込まれている。発掘区北端では幅6.0m以上、深さ2.2m以上（標高約51.8m）に達するが、湧水と埋土崩壊により、完掘を断念した。埋土は上層0.6m前後は複雑な層位であるが、以下は主に灰色粗砂、暗灰色粘砂の互層が続く。遺物は主に灰色粗砂から出土したが、摩滅したものが多い。奈良時代～鎌倉時代の土器、瓦、室町時代（16世紀代）の土師器皿・釜、瓦質土器擂鉢・火鉢、国産陶器碗などの他、笛塔婆（1点）、箸（2点）、曲物板などの木製品がある。

その他、特筆すべきものとして遺物包含層から出土した奈良三彩小壺蓋（1点）がある。

第385次調査地で検出した下層流路は第387次調査地では確認できなかったが、六坪内も東半を南流するものと考える。下層流路の時期は不明であり、調査の蓄積が待たれる。また、第387次調査地で検出したS D10は六坪中央部には及んでいないことが判明している<sup>13</sup>。（宮崎正裕）

1)『平城京左京七条二坊六坪(第33次)の調査』『奈良市埋蔵文化財調査報告書 昭和60年度』奈良市教育委員会 1986



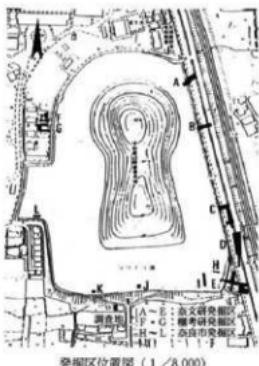
第387次調査発掘区全景（南から）



第387次調査S D01（西から）

## 10 平城京北京極大路・ウワナベ古墳外堤の調査 第381次

- 1 事業名 個人住宅建替
- 2 届出者名 中博聰・勝俊
- 3 調査次数 平城京第381次調査
- 4 調査地 奈良市法華寺町1311-2
- 5 調査期間 平成9年7月3日～7月14日
- 6 調査面積 19m<sup>2</sup>
- 7 調査担当者 原田憲二郎

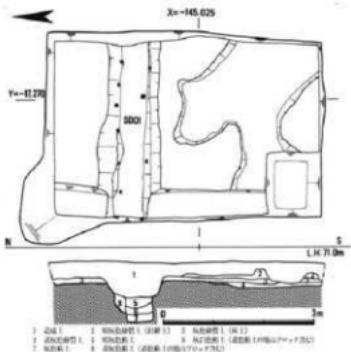


### 8 調査概要

本調査は、平城京の北限、北京極大路とウワナベ古墳の南外堤にあたる。調査地は、ウワナベ古墳南斜面が北側に迫り、池堤上から約5m下に位置する。また、調査地南側は、約1.2m下がっていた。この現状から南側の落ちが外濠で、調査地は削平されたウワナベ古墳外堤上に位置するものと思われた。なお、過去の調査成果から、外堤が地山を削り出して造られていること、円筒輪列が存在することが判明している。

層相は上から盛土、暗灰色砂質土と続き、現地表下約0.4mで、黄色粘土の地山となる。これが残存するウワナベ古墳外堤である。標高は約70.2mである。葺石などの外表施設はなかった。過去に本発掘区の東で行った市4PUN-1次調査での地山の標高が72~74mであるので、本発掘区では少なくとも2mほどは後世の削平をうけ、このときに外表施設は消失したものと思われる。

この地山上面で東西方向の素掘りの溝SD01を検出した。幅1.0~1.2m、検出面からの深さ約0.6mである。長さ約3.4m分を検出した。溝底には径約5cm、長さ0.2~0.4mほどの木杭が両岸に0.5~1.2m間隔で打ち込まれていた。遺物は出土せず、時期は不明である。（原田憲二郎）



遺構平面図・東壁土層図 (1/100)



発掘区全景（東から）

## 11 平城京左京六条二坊十坪の調査 第396次調査

- |         |                   |
|---------|-------------------|
| 1 事業名   | 平城京他範例確認調査        |
| 2 調査次數  | 平城京第396次調査        |
| 3 調査地   | 奈良市大安寺西二丁目281     |
| 4 調査期間  | 平成10年1月20日～2月18日  |
| 5 調査面積  | 240m <sup>2</sup> |
| 6 調査担当者 | 久保清子              |



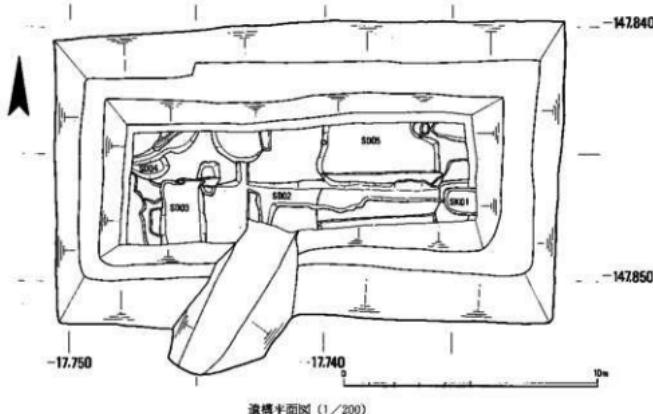
### 7 調査概要

調査地は左京六条二坊十坪の南西部にあたる。昭和57年度に調査地の西側で市第33次調査を実施した際、検出遺構はなく、北に近接して昭和61年度に市第111次調査を実施した際には、奈良時代の素掘りの溝1条、掘立柱建物2棟を検出している。今回の調査地も前2例同様、現地表下から遺構面まで深さが約3.5mあるため、調査面積は最終的には63m<sup>2</sup>となった。

発掘区内の層相は、1.9～2.0mの盛土の下に盛土と黒灰色土（旧作上）の混合土、暗灰色粘土、灰色系の粘土4層、0.2～0.3mの奈良時代から中世の遺物を多量に含む灰褐色粘土と続き、現地表下約3.4～3.5mで黄灰色粘土上の地山に達する。地山上面の標高は概ね55.2mである。

検出遺構は上坑1（SK01）、素掘溝3条（SD02～04）、旧河道（SD05）である。遺構はいずれも地山上面で検出した。

出土遺物には遺物包含層から弥生土器1点、奈良時代の土器、瓦類合計遺物整理箱5箱分、軒丸瓦6227A 1点、種別不明の軒平瓦1点、土馬1個体分、9世紀前半の灰釉陶器、13世紀の瓦器等が若干量がある。SK01、SD02・03からは奈良時代の土器が若干出土した。（久保清子）





発掘区西半部（東から）



発掘区東半部（東から）

## 12 平城京左京二条三坊三坪の調査 第400次

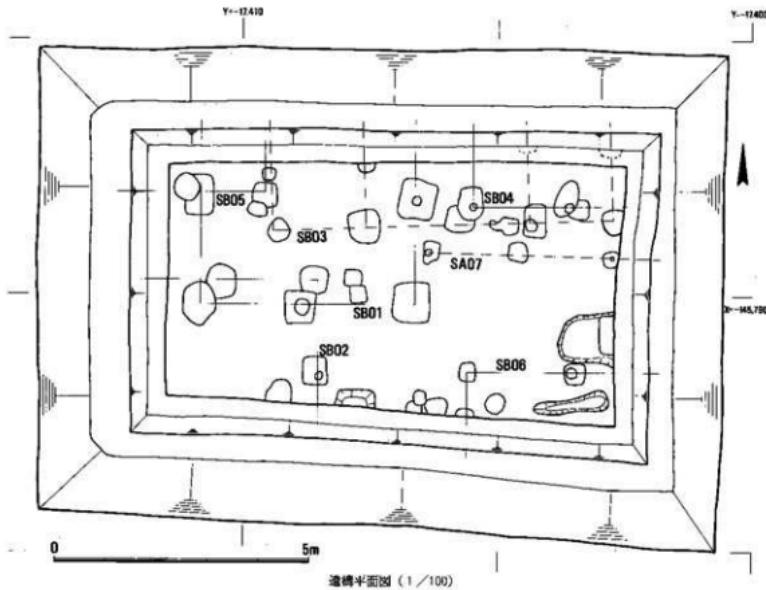
- 1 事業名 個人住宅新築
- 2 届出者名 横木 浩
- 3 調査次数 平城京第400次調査
- 4 調査地 奈良市法華寺町208番地1他
- 5 調査期間 平成10年2月16日～2月26日
- 6 調査面積 55m<sup>2</sup>
- 7 調査担当者 武田和哉



### 8 調査概要

調査地は、平城京の条坊復元によれば、左京二条三坊三坪の中央から北東寄りの部分に該当する。過去の隣接地における調査事例としては2件あり、当調査地の南東約20mで昭和63年度に行なった市第170次調査<sup>1)</sup>では、三・六坪境小路の路而と東側溝を確認した。また、調査地の南北約25mで平成元年度に実施した市第189次調査<sup>2)</sup>では、奈良時代の柱列や中世の井戸などの遺構を検出している。

今回の調査地における層相は、隣接する市第189次調査で確認した層相とは基本的には大きく



異なる。平均約1.8mほどある盛土の下層には、黒灰色粘質土（旧作土）、暗灰色土、黄緑灰色粘質土、暗灰色土、茶灰色土、暗褐色粘質土、灰色粘質土の堆積が続き、暗灰褐色土と暗褐色粘土（共に奈良時代整地層）を経て黄灰色シルトの地山に達する。地山上面の標高は概ね60.9mである。盛土直下の黒灰色粘質土（旧作土）上面から奈良時代遺構面と考えられる暗灰褐色土上面までは約1.0m、さらにその暗灰褐色土上面から地山上面までは約0.3mをそれぞれ測る。遺構検出作業は地山上面で実施した。

今回の調査で検出した遺構には、奈良時代の建物5棟、柱列1列、土坑および時期不明の素掘溝がある。以下、主要な遺構についてその概略を記す。

**S B01** 発掘区の中央から北辺部にかけて検出した南北棟の掘立柱建物と推測される。桁行は1間（2.1m）以上、梁間は2間（4.2m）の規模と推測される。柱穴の重複関係から、後述のS B02より新しくS B05より古いことが判明している。

**S B02** 発掘区南西部分で検出した掘立柱建物。東西・南北各1間分（1.8m）を検出。

**S B03** 発掘区北辺の中央から東隅にかけて検出した東・西廂付の南北棟の掘立柱建物。身舎の桁行は1間（2.1m）以上、梁間は2間（東から1.5-2.1m）の規模になると思われる。東・西2面に廂が付き、双方とも廂の出は1.8mである。柱穴の重複関係から後述のS B04より古い。

**S B04** 発掘区北東隅で検出した掘立柱建物。発掘区内では東西1間分（1.8m）を検出した。

**S B05** 発掘区北西隅で検出した掘立柱建物。発掘区内では東西1間分（1.5m）を検出した。

**S B06** 発掘区南東隅で検出した掘立柱建物。発掘区内では東西1間分（2.1m）を検出した。

**S A07** 発掘区東辺で検出した柱列。柱間は2間（3.6m）以上で、発掘区外東側に続く。

今回の調査は、厚い盛土のために調査面積が限定された規模となったものの、奈良時代の建物跡などの遺構を検出することができた。これらの遺構の状況からみて、奈良時代の掘立柱建物には少なくとも3時期程度の変遷があることが確認できた。当坪内における奈良時代遺構の残存状況は良好であり、今後の周辺地での調査成果の蓄積が期待される。

（武田和成）

- 1) 奈良市教育委員会『平城京左京二条三坊三・六坪塙小路の調査 第170次』『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成6年度』1988  
2) 奈良市教育委員会『平城京左京二条三坊三坪の調査 第189次』『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成元年度』1990



発掘区全景（西から）



発掘区全景（東から）

## II 寺院跡・その他の調査

## 1 新薬師寺旧境内の調査 第9次

- |         |                   |
|---------|-------------------|
| 1 事業名   | 個人住宅建替            |
| 2 届出者名  | 六本雅子・基雄           |
| 3 調査次数  | 新薬師寺第9次調査         |
| 4 調査地   | 奈良市高畠町1358-2他     |
| 5 調査期間  | 平成9年12月15日～12月19日 |
| 6 調査面積  | 40m <sup>2</sup>  |
| 7 調査担当者 | 武田和哉              |



### 8 調査概要

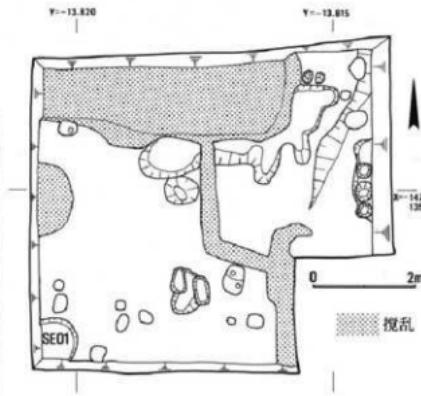
本調査地は、現在の新薬師寺本堂の北側約80m付近に位置し、新薬師寺旧境内推定復元によれば、推定地の北東隅付近に該当する。発掘区は東西7m、南北6mの規模で設定した。

発掘区の層相は、基本的には盛土以下、暗灰色土、淡茶灰色土と続き、現地表面下0.5～0.6m程度で橙灰色粘土もしくは風化花崗岩盤の地山に達する。発掘区内で検出した地山上面の標高は132.3m前後である。遺構検出作業は地山上面で実施したが、一部の遺構については発掘区壁面の観察から、暗灰色土上面より掘り込まれていることを確認した。また発掘区の北辺部付近は、造成工事による搅乱で遺構面が大きく削平されていた。

本調査で検出した遺構には、素掘りの井戸1基、時期不明の柱穴、土坑がある。井戸SE01は発掘区南西隅で検出した。発掘区の制約上、井戸全体を検出することはできなかったが、状況からみて径は1.2m程度と推定される。埋土からは近世以降の瓦片が出土した。このほか柱穴は検出数が少なく、位置的に建物としてはまとまらない。時期についても不明である。（武田和哉）



発掘区全景（北から）

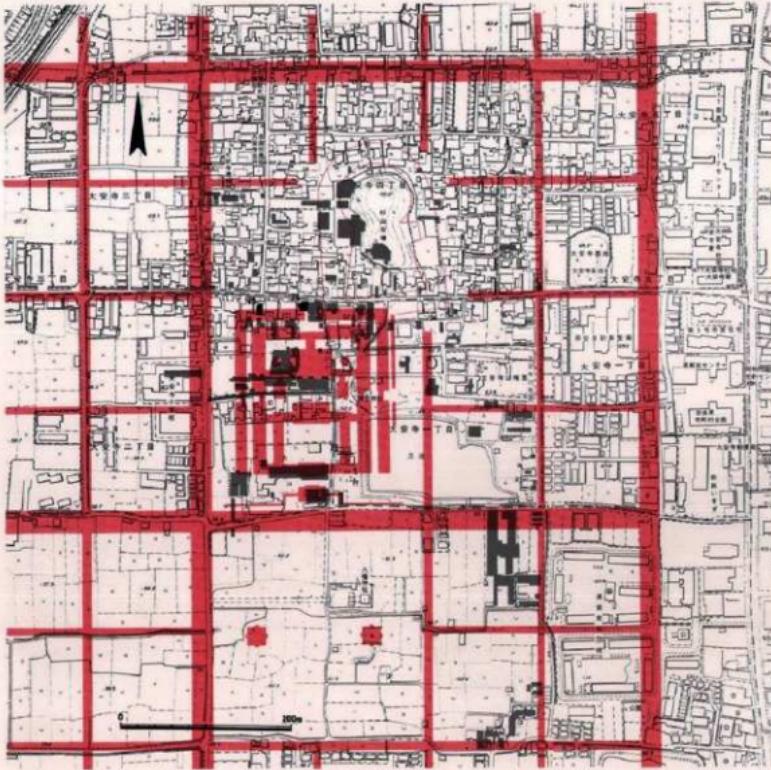


## 2 史跡大安寺旧境内の調査

史跡大安寺旧境内では、本年度、第74次～第76次の3件の発掘調査を実施した。保存整備事業に伴う第74次調査以外はいずれも現状変更許可申請に関わるものである。第74次調査・第75次調査は北西中房地区にあたる。第74次調査は、昨年度に実施した第73次調査に続き、北西中房の基壇を検出し、あわせて北東中房の基壇の南端も確認した。第75次調査では北西中房の基壇の北辺を確認した他、中房から北側に続く軒廊も検出した。第76次調査は東面回廊地区にあたり、東面回廊の基壇を確認した。本書では、これらの調査のうち、第75次調査・第76次調査について報告するが、第74次調査の成果は保存整備事業完了時に報告する予定である。

平成9年度発掘調査一覧

| 調査次数 | 事業名            | 申請者名   | 調査地          | 調査期間                    | 調査面積 | 調査担当者 |
|------|----------------|--------|--------------|-------------------------|------|-------|
| 第74次 | 史跡大安寺旧境内保存整備事業 | 市教育長   | 大安寺一丁目1-11   | H09. 08. 19～H09. 09. 12 | 96a  | 松浦 大庭 |
| 第75次 | 個人住宅改築         | 増田忠彦   | 大安寺二丁目1142-1 | H09. 11. 27～H09. 12. 25 | 61a  | 森下    |
| 第76次 | 集会所改修修理        | 大西勝義区長 | 大安寺一丁目1292-1 | H10. 03. 02～H10. 03. 16 | 40a  | 原田    |



史跡大安寺旧境内発掘調査位置図 (1/6,000)

## (1) 北西中房の調査 第75次

### I 調査の目的

天平19年(747)の『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』には、僧房13棟が記録されているが、北西中房については記されていない。ところが、第46次調査において、北西太房から北に続く軒廊を検出したことから、その北側に建物を想定せざるを得なくなった。ついで、西太房の北端で実施した第60次調査では、太房基壇北辺から北に約7mのところで、東西棟と思われる基壇建物の南辺を検出したことから、北西中房の存在の可能性は高まった。ただし、基壇外装が瓦積であることから、『資財帳』に記載されていないこともあって、天平19年以降に増築された可能性も考えられた。ところが、第73・74年の中房北東隅の調査では、基壇外装が凝灰岩切石の埴上積であったことから、天平19年以前から存在し、のちに改修の際に基壇外装を一部瓦積に替えた可能性も考えられるようになった。今回の調査は、第60次調査のすぐ北側で、北西中房の北辺の確認を目的としたものである。

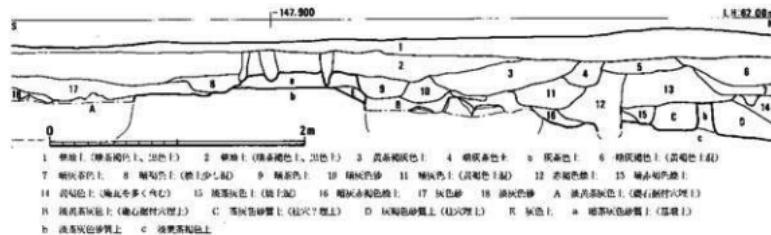
### II 調査地の層相

発掘区内の層相は、表土の下に土間を築いたと思われるつきかためた整地土がわずかに0.1~0.2mあるのみで、近・現代の上坑等によって大きく乱されている。北西中房の基壇の検出面は、残存状態の良いところで、地表面から約0.2m下の標高61.6mである。地山は、淡茶灰色砂質土、淡黄茶褐色土、茶色砂礫であり、残存状態の良いところで、標高61.45mである。

### III 検出遺構

奈良時代、平安時代、中近世の遺構がある。なお、遺構番号は、第60次調査の番号と重複しないようにした。

S B02 北西中房。東妻から14間目と15間目にあたると思われる礎石据付穴を検出した。発掘区内には北側3間分があるが、近・現代の上坑等の攪乱のため、残存したのは北側2間分である。柱間は、桁行が3.9m前後、梁間が3.0m前後で、後述する当初の基壇外装の位置からみて、北側柱からの基壇の出は、2.1mである。礎石据付穴は、一辺1.3~1.5mの平面隅丸方形で、人頭人の根石が残存している。根石は、上面が水平になるように据えられており、おそらく、板状の切石礎石を受けたものと思われる。基壇築成上は、精良な茶灰色砂質土で、厚さ0.15m以上積み上げられている。基壇外装は、凝灰岩切石の一部が残存しており、当初は凝灰岩切石の埴上積であったと思われるが、のちに替えたものと思われる。凝灰岩切石のすぐ南側で原位置をとどめていない平瓦が折り重なった状態で、部分的にみられたことから、南辺と同様の瓦積であったと思われる。北辺に沿って浅い溝が掘削され、後述する軒廊(S C11)の西側の溝へ続く。平瓦



西壁土層図 (1/40)

を底面に敷き、両側面には打ち欠いた半瓦を立て並べている。幅0.2m。なお、基壇の幅は、改修時で、12.5mあり、当初はそれより広かったものと思われる。

S C11 北西中房の北側に取りつく南北方向の軒廊。南西隅の柱穴を検出した。掘立柱穴である可能性が高い。軒廊西側には中房北側から平面L字形に続く溝が掘削されている。中房北側の溝と同様に瓦を使用しているが、瓦のほかに河原石と凝灰岩切石を使用している。

S B12 S B02北辺本壇外装下で検出した掘立柱建物。南側柱列の東から1間分を検出した。第60次調査で、同様の北西中房より古い掘立柱建物（S B03）を検出しており、柱列はS B03柱列より北へちょうど15mの位置にある。なお、今回の調査によってS B03は東西解の可能性が高まった。

S K13 発掘区北端で検出した径0.6mの円形土坑。9世紀前半の上器が出土した。

S D14 発掘区北で検出した東西溝。幅は0.5~0.9m。埋土は赤褐色の焼土で、廃瓦が大量に出土した。12世紀中頃と思われる。

S K15 S D14の南で検出した方形土坑。東西2.1m、南北1.5m。土坑内北半には、上壁の基礎とみられる、右列がある。S D14より新しい。18世紀と思われる。

S K16 発掘区南で検出した平行四辺形の土坑。東西、南北ともに2.0m。12世紀後半と思われる。

S K17 発掘区東端で検出した径1.5mの円形の土坑。埋土は赤褐色の焼土で、廃瓦が大量に出土した。12世紀末~13世紀初頭と思われる。

S K18 発掘区西端で検出した径1.9mの平面円形の土坑。18世紀中頃と思われる。

S K19 発掘区南端で検出した溝状の土坑。東西5.2m以上、南北1.5m以上。S K18、後述するS K20より古い。17世紀後半と思われる。

S K20 発掘区南端で検出した径1.6mの円形の土坑。19世紀と思われる。

このほかに、近世の掘立柱穴を検出したが、まとまりを欠く。

(森下浩行)

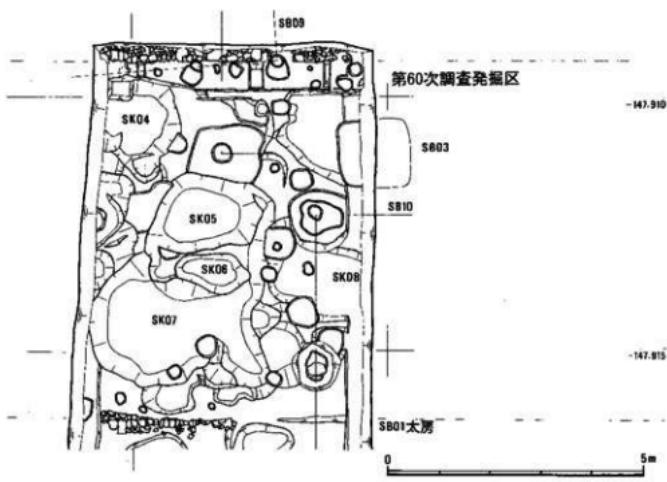
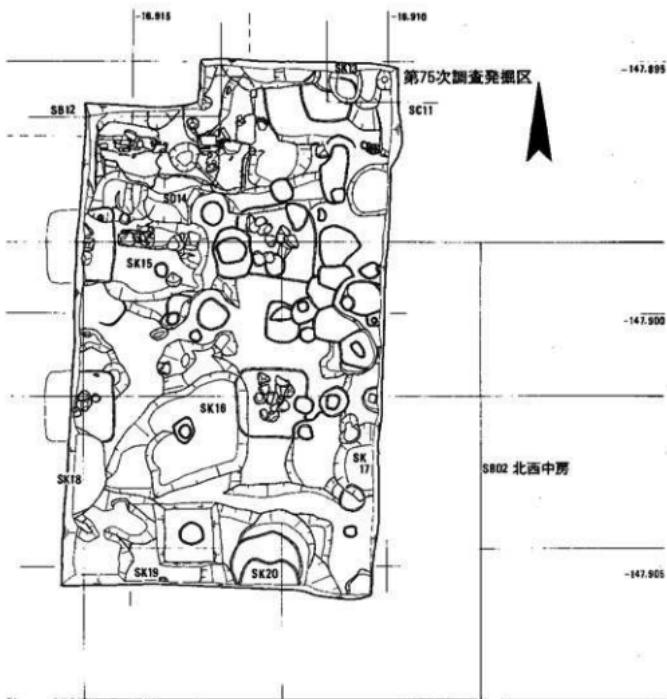
#### IV 出土遺物

奈良時代の土師器・須恵器・瓦、平安時代の土師器・須恵器・黒色土器・灰釉陶器、中近世の土師器・瓦器・陶磁器・瓦がある。瓦は遺物整理箱100箱分、上器は5箱分出土した。なお、中近世の遺構から、壁上が1箱分出土した。あるいは、S B02北西中房のものかもしれない。

瓦塊類 軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦の他、道具瓦がある。出土量の大半が丸瓦、平瓦で、大部分が整理途上であるため、軒瓦と道具瓦を中心記す。

軒瓦の内訳は下表通りで、大半が奈良時代のものである。平安時代以降のものは少なく小片が多い。特に軒丸瓦は中近世の遺構密度が高いこともあり、巴紋軒丸瓦の出土が多いが、瓦当面の完存するものではなく、詳細な時期を特定できるものは少ない。平安時代以降の蓮華紋軒丸瓦は7251A以外に1点ある。軒平瓦はS K19から出土した2点はいずれも文字紋軒平瓦で、鎌倉時代のものである。S K15から出土した1点は宝珠紋を中心節とし、中央から左右に唐草紋を配する室町時代のものである。表掲資料であるため、表に含めなかったが、連珠紋の両端に幾何学紋を配するものが1点ある。大安寺旧境内では初川の資料と思われる。

道具瓦には熨斗瓦、面戸瓦、鬼瓦、押などがある。熨斗瓦は小片が分散する。確認できるものは平坦に仕上げた粘土板に、焼成前に分割裁線を入れ、焼成後に2分割するものである。面戸瓦はS K19と遺物包含層から各1点出土した。前者は整面戸、後者は蟹面戸に分類できる。鬼瓦は3点あり、南都七大寺式鬼瓦に分類できる。S K17から1点(1)、SD14から1点(2)出



遺構平面図 (1/100)

上した。尚者は同范品で、肩が窪んだものから突出したものに彫り直されることが判明している。前者がIV式B-a、後者がIV式B-bに分類できる<sup>13)</sup>。尚者とも背面に固定装置である縦位の把手が遺存する。埴は数点出土したが、小片で全体形のわかるものはない。

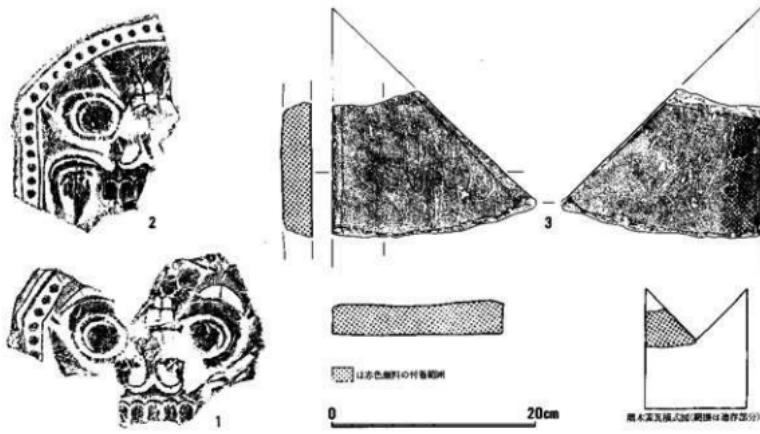
特筆すべきものとして、隅木蓋瓦の断片と考えられるもの(3)が1点あり、SK16から出土した。全体形は不明だが、2辺が部分的に遺存する。挿角部分は欠損するが、45°前後に復元できる。蓋板上面はこの2辺沿いを1cm前後の幅で面取りする。同面には一定方向からの丁寧なヘラケズリを行い、水はけのためか、端部に比べ中央部を厚く仕上げる。蓋板下面もヘラケズリで平坦に仕上げる。端部から4cm前後の範囲に赤色顔料の痕跡がある。隅木側面に顔料を塗布した際に付着したものと考える。蓋板側面には懸かりはないが、正面端部は欠損のため、懸かりの有無は不明である。破面の様子から、粘土板2枚を用いて成形していることがわかる。胎土は精良、焼成はやや軟質、色調は表面が淡灰色あるいは淡暗灰色で、内面が灰色である。(宮崎正裕)

1) 毛利光俊彦「日本古代の鬼面文瓦」『研究論集』奈良国立文化財研究所 1980

2) 中井公「大安寺式」『斐田直先生古跡記念論文集』斐田直先生八蔵記念論文集刊行会 1997

出土瓦点数表

| 出土遺物        | SK13 | SD14 | SK15 | SK16 | SK17 | SK18 | SK19 | SK20 | その他<br>の土瓦 | 近世以降<br>の住<br>居<br>構<br>造 | 遺<br>物 | 表<br>土 | 合<br>計 |
|-------------|------|------|------|------|------|------|------|------|------------|---------------------------|--------|--------|--------|
| 6 1 3 7 A   |      |      | 1    |      |      |      |      |      |            |                           | 1      | 1      | 4      |
| 6 1 3 8 C a | 1    |      |      |      |      |      |      |      |            |                           |        |        | 1      |
| 6 1 3 8 C b | 1    |      |      | 1    |      |      |      |      |            |                           | 1      |        | 3      |
| 6 1 3 8 E   |      |      |      |      | 1    |      |      |      |            |                           |        |        | 1      |
| 6 1 3 8 J   |      |      |      |      |      |      |      |      |            |                           | 1      |        | 1      |
| 6 3 0 4 D   |      |      |      |      |      |      |      |      | 1          |                           | 1      |        | 2      |
| 6 3 0 4 E   |      |      |      |      |      |      |      |      |            |                           | 1      |        | 1      |
| 7 2 5 1 A   |      |      |      |      | 1    |      |      |      |            |                           | 1      | 1      | 3      |
| 平安時代以降      |      |      |      |      |      | 1    | 2    | 1    |            | 1                         | 4      | 1      | 10     |
| 町丸瓦 合計      | 1    | 1    | 1    | 1    | 3    | 1    | 2    | 1    | 1          | 1                         | 9      | 3      | 25     |
| 6 6 4 4 A   |      |      |      |      |      |      |      |      |            |                           |        |        | 1      |
| 6 6 6 4 A   |      |      | 1    |      |      |      |      |      |            |                           |        |        | 2      |
| 6 7 1 2 A   |      |      | 2    |      |      |      | 1    |      | 1          |                           | 3      | 4      | 11     |
| 6 7 1 2 B   |      |      |      |      |      |      | 1    |      |            |                           |        |        | 1      |
| 6 7 1 6 C   | 1    |      |      | 1    | 2    |      |      | 1    |            |                           |        |        | 5      |
| 6 7 1 6 F   | 1    |      |      |      |      |      |      |      |            |                           |        |        | 1      |
| 瓦 平安時代以降    |      |      |      | 1    |      |      | 2    |      |            |                           |        |        | 3      |
| 軒瓦 合計       | 2    | 4    | 1    | 2    |      | 4    |      | 2    |            |                           | 3      | 6      | 24     |



出土道具瓦 (1/5)



**土器類** 奈良・平安時代のものは少量あるだけで、大半が江戸時代の陶磁器である。奈良・平安時代の上器類は、江戸時代の陶磁器と混在して出土しているものが多く、時期的にまとまって出土したのはS K13からのものだけである。S K13出土土器は、南都土器編年のI期新段階（9世紀前半～中期）に相当するものであり、量的には少ないが報告しておく。発掘区北端で土坑の一部が検出され、その埋土から出土した資料なので、必ずしも良好な資料とは言いたいが、型式的には混じりないと考えられる。山上遺物の内訳は、土師器片47点（杯A23点、皿A6点、碗A9点、高杯1点、壺3点、杯または皿5点）、須恵器片2点（壺1点、壺1点）である。土師器杯A（1～5）は、口径15.0～17.2cm、器高は、底部まで残存しているものが少ないため、詳細は明らかでないが、概ね2.3～3.4cmを測る。調整手法は、いずれも口縁部上半を強くヨコナデしたのち、外面全体をヘラケズリするc-c手法。器高が低くなり、口縁部が開くのが特徴である。皿A（10・11）は、c-c手法のもの（10）と底部だけをヘラケズリするb手法のもの（11）がある。11は、口縁端部を内側に大きく肥厚させるA形態と呼称されているもので、奈良時代の杯・皿類によく見られる。この形態の皿は、南都では10世紀初頭頃まで見られる。碗A（6～9）は、口径13.3～14.9cm、器高は2.8～3.2cmを測る。調整は、外面全体をヘラケズリするc手法。ヘラミガキはない。口径14.0cm以上のものが現われてくるのが、この段階の特徴である。高杯は、杯部内面に渦巻状の暗文が、外面には粗いヘラミガキが施されている。壺は、口縁部の小破片のため口径まで復元できないが、いわゆる「都城形」壺である。須恵器はいずれも小破片のため詳細は不明である。

（三好美穂）

### V まとめ

今回の調査では、北西中房の北辺を確認することができた。北辺では、当初のものと思われる凝灰岩切石が残存しており、基壇外装が凝灰岩切石の埴上積から瓦積に替えられた可能性が高まった。また、北辺に沿って、打ち欠いた瓦を利用した溝状の施設がみつかり、南辺のものとはやや形状は異なるが、南北両辺には打ち欠いた瓦を利用した溝状の施設が存在したことが明らかになった。そして、基壇の幅は当時のものより狭くなっている可能性が高まった。

なお、中房基壇上では平安時代の遺構がみられなかったことから、北西中房は平安時代までは存続していたものと思われる。ただし、軒廊は、柱穴が9世紀の十坑によって壊されているので、平安時代にはすでに存在しなかったものと思われる。

また、今回も第60次調査と同様に、北西中房基壇下から、掘立柱建物を検出した。このことにより、基壇築成以前に掘立柱建物の存在が明確になった。『資財帳』には、北西中房の記載がないことから、これらの掘立柱建物の時期を『資財帳』記載時にあてるこども可能である。

（森下浩行）



発掘区全景（北から）



発掘区全景（東から）



北西中房基礎外壁（西から）

## (2) 東面回廊の調査 第76次

### I 調査の目的

発掘区は、大安寺の伽藍復元によると、東面回廊南から5間目にあたることがわかる。東面回廊は栄行2間(7.8m)13尺等間(約3.9m)の複廊と考えられている。今回の調査は、東面回廊の規模と構造を明らかにすることを目的とした。

### II 層相と検出遺構

発掘区の基本的な層相は、盛上、灰褐色粘土と続き、地表下約0.4mで、東面回廊の基壇築成上に達する。残存する基壇築成土上面の標高は約61.7mである。西側では灰褐色粘土の下に黒褐色粘土(旧作上)、灰色砂質土と続き、地表下約1.2mで暗灰色粘土の地山に至る。地山の標高は西側で約60.9mである。遺構は基壇築成土上面と灰色砂質土直下で検出した。

検出した遺構には、奈良時代の東面回廊、中近世の素掘りの溝、土坑、近代の石組井戸がある。

**東面回廊** 発掘区東端では、東辺基壇外装を検出した。東辺基壇外装は凝灰岩切石の壇正積で、延石と地覆石を確認した。延石はすべて後世の削平により東側端が失われていた。また北側の1個を除いて、他の延石は地覆石との間に土が詰まっていることから、後世に東側に引き倒されたものとわかる。延石の厚さは、北側のもので約20cmである。地覆石は2個ともに幅約33cm、厚さ約19cmである。長さは南側のもので約1.1m以上ある。北側の地覆石には、上面に東西約15cm、南北約21cm、深さ約5cmの枘穴がある。東石をはめ込むためのものであろう。基壇西辺では後世の削平のため、基壇外装は失われていた。ただし溝状遺構S X01東壁には、多量の凝灰岩粉末があり、これが風化した基壇外装を考えると、S X01は西辺基壇外装の抜取痕と思われる。これらのことから本発掘区での東面回廊基壇規模は幅約13.3m(約45尺)であることがわかる。基壇築成上は一部の断面調査から、10~18cmの単位で盛られていることが分かり、版築により構築されたものと思われる。基壇上に礎石、礎石掘付穴はなかった。基壇築成上から軒平瓦6661Bが出土した。

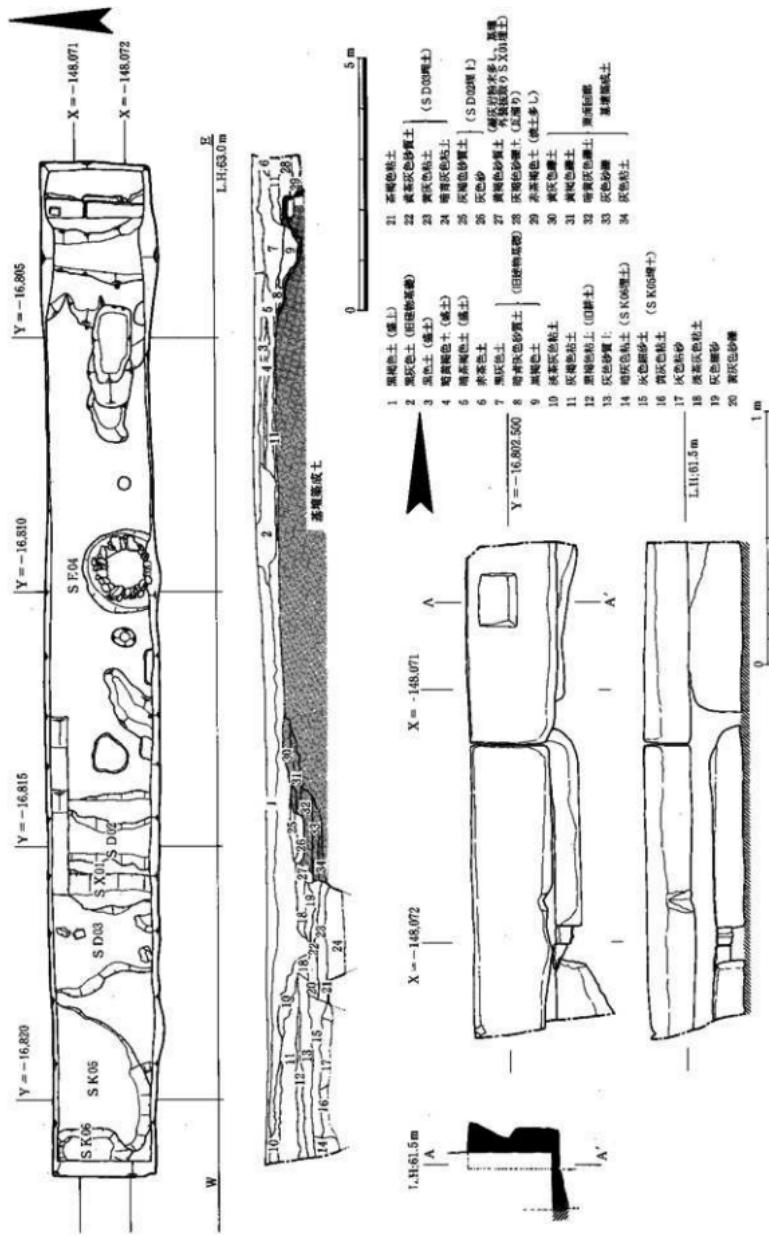
この他に基壇上面で、南北方向の素掘りの溝SD02と円形石組井戸SE04を検出した。SD02は幅約1m、深さ約0.3mである。SE04は掘形径約1.6mで深さは約2.3mまでを確認した。石組の内法径は約1.3mである。基壇西側灰色砂質土層下では、南北方向の素掘りの溝SD03、土坑SK05・06を検出した。SD03は幅約1.2~1.9m、深さは約0.6mまでを確認した。SK05は平面不整形で、東西約2.7m以上、南北約1.3m以上、深さ約0.3mまでを確認した。埋土から巴紋軒丸瓦1点、軒平瓦6661B1点、平安以降の唐草紋軒平瓦1点が出土した。SK06は平面長円形で東西約0.6m以上、南北1.5m以上、深さ約0.4mである。重複関係からSK05より新しいことがわかる。

### III 出土遺物

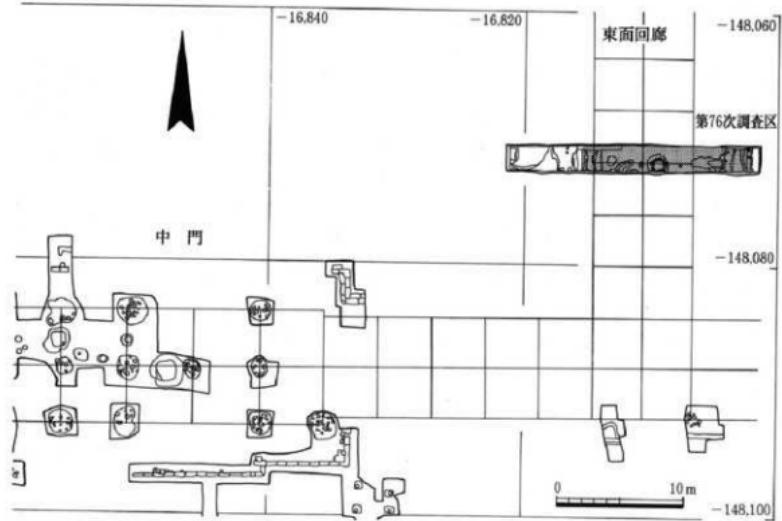
軒瓦についてのみ記す。軒丸瓦は7点、軒平瓦は13点出土した。軒丸瓦の内訳は6138E1点、平安時代以前のもの6点(7251A3点、巴紋3点)である。軒平瓦の内訳は重弧紋1点、6661B2点、6712A2点、6712B3点、平安以前のもの5点(唐草紋4点、連珠紋1点)である。

### IV まとめ

今回検出した東面回廊基壇は、基壇西辺は復元図と一致するが、東辺は復元図と違い、大きく東へ張り出す。また、本発掘区で確認できるはずの礎石、礎石掘付穴も無かった。このように本調査では、復元案とは違う点がいくつか判明した。東面回廊全体が本調査地と同様の規模をもつたものであったのか、本調査地付近のみのことなのかどうかは、面積が狭く明らかにできなかつた。東面回廊の復元案は今後の調査成果の蓄積のうえ、再検討の必要があろう。(原田憲二郎)



盤精平面圖(1/100)・北壁+西牆(1/100)・東面山牆東邊單塊(1/20)



第76次調査周辺造構配座図（1／400）（その他の発掘区は昭和29年調査のもの）



発掘区全景（東から）



発掘区全景（西から）

### 3 西大寺旧境内の調査 第10・11次

|         |  |
|---------|--|
| 1 事業名   | 緑住街づくり推進事業                                       |
| 2 通知者名  | 奈良市長 大川靖則  |
| 3 調査次数  | 第10次 西大寺旧境内第10次調査<br>第11次 西大寺旧境内第11次調査           |
| 4 調査地   | 第10次 奈良市西大寺新田町523番地<br>第11次 奈良市西大寺新田町523番地他      |
| 5 調査期間  | 第10次 平成9年3月3日～3月28日<br>第11次 平成10年4月14日～6月17日     |
| 6 調査面積  | 第10次 295m <sup>2</sup><br>第11次 206m <sup>2</sup> |
| 7 調査担当者 | 第10次 須田謙二郎<br>第11次 松浦五輪美 大津淳司                    |



#### 8 調査概要

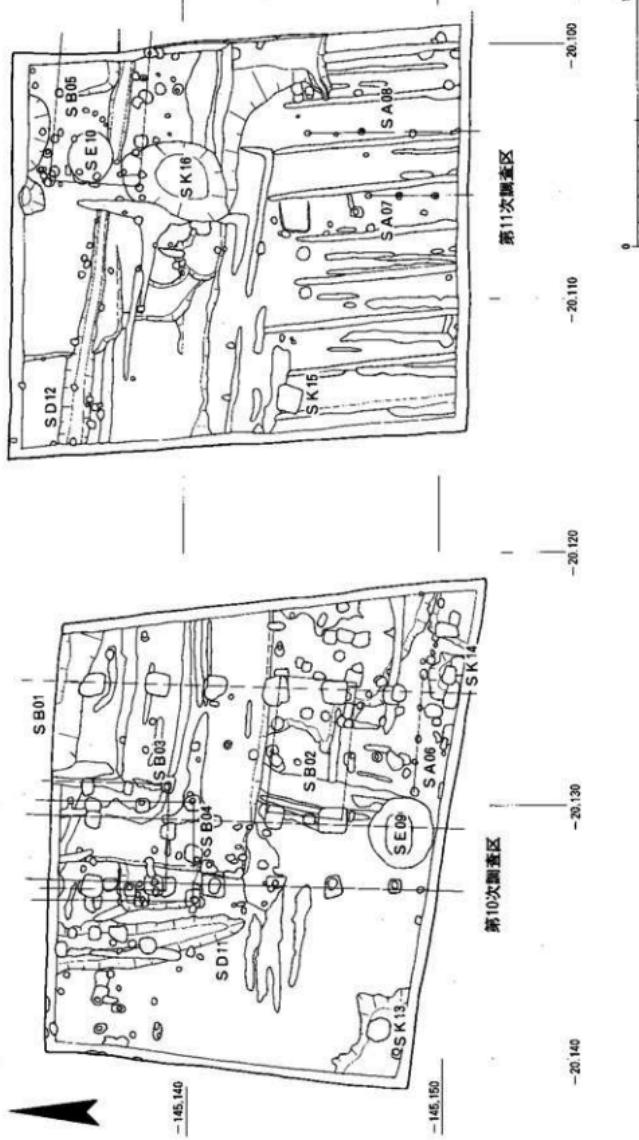
本調査地は西大寺旧境内の正倉院跡推定地にある。調査は第10次（西）と第11次（東）の2回にわけて行った。調査地は西から延びる低い丘陵の北東斜面で、現状は水田である。基本層序は両調査区とも0.3m前後の旧作土下が黄白色シルトとなっているが、後世に削平を受けて一段低くなった部分はその上に灰色または灰褐色土が数層堆積している。遺構検出面は黄白色シルト上面で、標高は第10次調査区が76.3～77.2m、第11次調査区が75.6～76.3m。それぞれ北東に向かって緩やかに下っており、北東部は削平されている。

主な検出遺構は掘立柱建物5棟、掘立柱屏3条、井戸2基、溝2条、土坑4である。SB01は東廂付の南北棟掘立柱建物と考えられる。桁行6間（14.4m）以上で、梁間は5.1mで2間になると思われる。廂の出は2.7mである。SB02は桁行3間（5.4m）、梁間2間（3.0m）の東西棟掘立柱建物。SB03は桁行2間（4.2m）以上、梁間2間（3.6m）の南北棟掘立柱建物。SB04は桁行2間（3.0m）以上、梁間2間（3.9m）の南北棟掘立柱建物。SB05は桁行3間（5.4m）以上、梁間2間（3.6m）の東西棟掘立柱建物。SA06は東西4間（4.2m）、SA07は南北2間（2.7m）以上、SA08は南北2間（4.2m）以上の掘立柱屏。SE09は直径約2.4mの平面円形の掘形のみ残り、枠は抜き取られていた。深さ約3.7m。出土遺物から、埋没したのは15世紀前半頃と考えられる。SE10も直径約2.0mの平面円形の掘形のみ残り、枠は抜き取られていた。深さ約2.7m。出土遺物から、埋没したのは16世紀以降の可能性が高い。SD11は長さ7.5m以上、幅約1.1m、深さ約0.1mの南北素掘溝。SD12は長さ15.0m以上、幅約1.1m、深さ約0.2mの東西素掘溝。両者とも時期・性格不明。SK13～16は土坑である。SK16が16世紀以降と考えられる以外、時期・性格とも不明。SK13は直径約0.8m、深さ2.6m以上の特殊な掘形。

主な出土遺物は、井戸SE09出土の軒丸瓦6732M・Q・R・種別不明、西大寺345B a、西大寺350Cの各型式が1点ずつと、15世紀前半の土師器（皿・盆他）、瓦質土器（風炉・火鉢他）、青磁碗、SE10出土の平安時代以降の巴紋軒丸瓦、13世紀の瓦器（皿・碗）、16世紀以降と思われる瓦質土器（火舎か）がある。この他SD12から軒丸瓦6236種別不明、削平部の埋土などから軒丸瓦6721 I、6732 Nおよび平安時代以降のものが出土している。

今回の調査では時期の推定できる遺構は少なく、正倉院関連の遺構として認識できるものはなかったが、SB01は規模からみてその可能性も考えられる建物である。  
(松浦五輪美)

第10次調查区 (左)・第11次調查区 (右) 通称下層図 (1/200)





第10次発掘区全景（東から）



第11次発掘区全景（西から）

## 4 神功皇后陵古墳隣接地の調査 第2次

- 1 事業名 市道中部51号線改良工事
- 2 通知者名 奈良市長 大川靖則
- 3 調査次数 神功皇后陵古墳隣接地第2次
- 4 調査地 奈良市山陵町地内
- 5 調査期間 平成10年1月27日～1月28日
- 6 調査面積 11m<sup>2</sup>
- 7 調査担当者 三好美穂

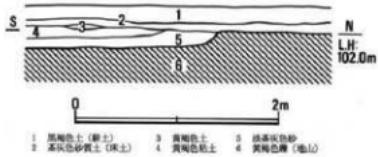


発掘区位置図 (1/6,000)

### 8 調査概要

本調査は、市道中部51号線改良工事に伴う事前調査である。調査地は、神功皇后陵古墳外堤の南西隅の西側に位置する。これまでの同工事に伴い、平成7年度に神功皇后陵古墳陪塚隣接地で市4PJG-1次調査を実施している。3基ある陪塚のうち1基が、工事で壊される可能性があったために調査が行われたが、幸いにも工事範囲内では古墳には影響がないことが確認された。今回の調査では、現在の外堤南西隅のすぐ西側の畠地が工事対象地であるため、外堤の規模や周溝の有無等の確認を主目的として、南北4.6m、東西2.4mの発掘区を設けて行った。

発掘区の層相は、発掘区北側は、黒褐色土（作土）、茶灰色砂質土（床土）の下がすぐに、黄褐色疊の地山となる。地山上面の標高は、約102.0m。発掘区の中央部付近から南にかけては、作土・床土の下に黄褐色粘土（0.1m）、淡茶灰色砂（0.1m）と続き、地表から0.45mで地山に達する。作土からは近世陶磁器片と円筒埴輪片が、淡茶灰色砂からは土師器片が数点出土した。土師器は、細片のために詳細な時期は不明である。地山上面では、小穴3、土坑1、素掘溝2条を検出したが、古墳に関連する遺構は確認できなかった。小穴は、いずれも径0.1m程度の小さいもので、深さも5cmと浅い。土坑は、掘形が南北1.5m、東西1.3m以上の平面不整形を呈する。検出面からの深さは、約0.2mである。埋土は、茶灰色細砂で、出土遺物はない。今回の調査では外堤や周溝等を確認することはできなかったが、少なくとも外堤は、調査地内までには及んでいないものと考えられる。



西壁土層図 (1/50)



発掘区全景 (南から)

(三好美穂)

付編 自然科学分析

## 付編 自然科学分析

本年度は第377-1次調査で平城京内と外京を隔てる東西両測溝を確認した。東西両測溝はいずれも深さ0.5m以上あり、下部の埋土が後世に削平をうけることなく良好な状態で残存していた。これらの埋土を採取し、測溝が機能していた当時の環境を調べるために花粉分析と珪藻分析を行った。試料の採取は東西坊大路西測溝SD1071と同東測溝SD1072の十層断面各一ヶ所において行った。各々の埋土最下層を上下に細分し試料採取し、さらにその上の2層から1試料ずつ、つまり1上層面で4試料、合計8試料採取した。採取後8試料をそれぞれ半分にし、花粉分析と珪藻分析に使用した。埋土はSD1071は粘質土（試料1~4）であり、SD1072では上部は粘質土（試料5・6）で下部は砂礫（試料7・8）である。試料採取箇所と採取した試料番号は下図のとおりである。

（久保邦江）

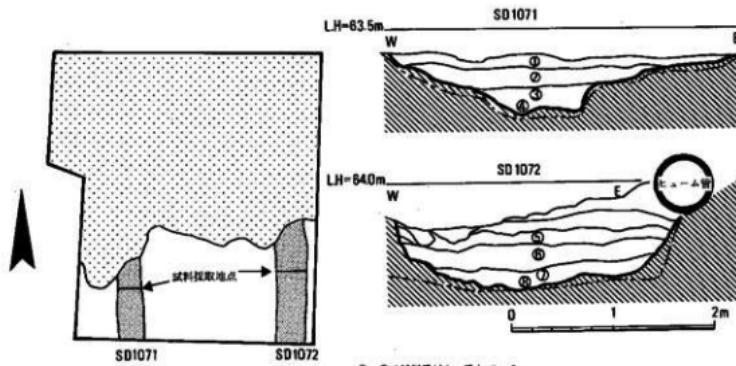
### I. 平城京第377-1次調査における花粉分析

株式会社 古環境研究所

#### 1. 方法

花粉粒の分離抽出は、基本的に中村（1973）を参考にし、以下の順で物理化学処理を施して行った。

- 1) 5%水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。
- 2) 水洗した後、0.5mmの筋で礫などの大きな粒子を取り除き、沈殿法を用いて砂粒の除去を行う。
- 3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分間放置する。
- 4) 水洗した後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸9:1濃硫酸のエルドマン液を加え1分間湯煎）を施す。
- 5) 再び氷酢酸を加えた後、水洗を行う。
- 6) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。



分析試料採取地点および試料採取土層断面図（左1/600・右1/50）

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、1500rpm、2分間の遠心分離を行った後、上澄みを捨てるという操作を3回繰り返して行った。

検鏡はブレバラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉(1973)および中村(1980)をアトラスとし、所有の現生標本との対比を行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン(—)で結んで示した。なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。イネ属に関しては、中村(1974、1977)を参考にし、現生標本の表面規格・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して分類し、個体変化や類似種があることからイネ属型とした。

なお、分析過程で検出された寄生虫卵についても記載を行った。

## 2. 結果

### (1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉35、樹木花粉と草本花粉を含むもの3、草本花粉30、シダ植物胞子2形態の計70である。これらの学名と和名及び粒数を表1に示す。主要な分類群を写真に示す。以下に出現した分類群を記す。

〔樹木花粉〕 マキ属、モミ属、ツガ属、マツ属複維管束亜属、スギ、コウヤマキ、イチイ科イヌガヤ科ヒノキ科、ヤマモモ属、クルミ属、サワグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属ーアサダ、クリーシイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属ーケヤキ、エノキ属ームクノキ、サンショウウ属、ウルシ属、モチノキ属、カエデ属、トチノキ、ブドウ属、ツタ、グミ属、カキ属、エゴノキ属、モクセイ科、トネリコ属、ツツジ科、ニワトコ属ーガマズミ属、スイカズラ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕 クワ属ーイラクサ科、バラ科、ウコギ科

〔草本花粉〕 ガマ属ーミクリ属、オモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、イボクサ、ミズアオイ属、カラハナソウ属、タデ属、タデ属サナエタデ節、ギシギシ属、ソバ属、アカザ科ヒユ科、ナデシコ科、キンポウゲ科、アブラナ科、ササゲ属、ノブドウ、アカバナ科、アリノトウガサ属ーフサモ属、チドメグサ属、セリ亜科、シソ科、ナス科、オオバコ属、オミナエシ科、タンボボア科、キク亜科、ヨモギ属、ベニバナ

〔シダ植物胞子〕 単条溝胞子、二条溝胞子

### (2) 花粉群集の特徴

S D1071とS D1072の花粉群集は、構成及び組成からそれぞれ上部と下部の群集に区分された。なお、記載は下部から行う。

#### 1) S D1071

下部群集(試料3・4) 樹木花粉ではコナラ属アカガシ亜属、スギの出現率が高く、クリーシイ属、コナラ属コナラ亜属が伴われる。草本花粉ではイネ科の出現率が高く、カヤツリグサ科、アカザ科ヒユ科、ヨモギ属が伴われる。

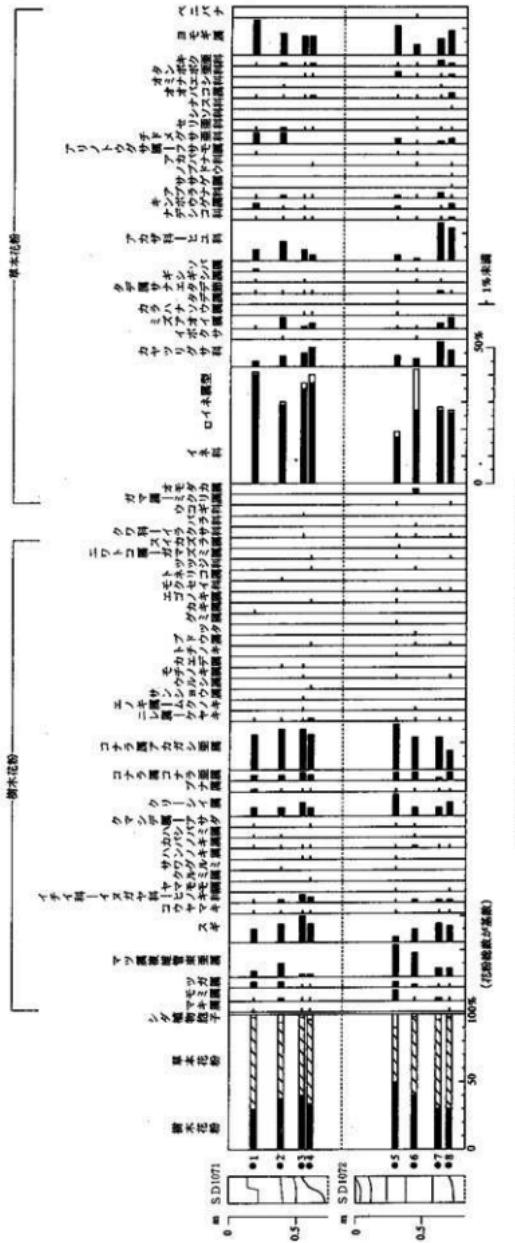
上部群集(試料1・2) マツ属複維管束亜属の出現率が高くなることによって下部群集と大きく異なる。草本花粉ではチドメグサ属の出現率が増加し、ソバ属が出現する。

#### 2) S D1072

下部群集(試料7・8) 樹木花粉ではコナラ属アカガシ亜属、スギの出現率が高く、クリーシイ属、コナラ属コナラ亜属、マツ属複維管束亜属が伴われる。草本花粉ではイネ科の出現率が高

表 平城京第377-1次調査における花粉分析結果

| 学名  | 分類群             | 和名  | SD1071 |     |     |     | SD1072 |     |     |   |
|---|-----------------|-----|--------|-----|-----|-----|--------|-----|-----|---|
|   |                 |     | 1      | 2   | 3   | 4   | 5      | 6   | 7   | 8 |
| Arcular pollen                              | 樹木花粉            |     |        |     |     |     |        |     |     |   |
| <i>Podocarpus</i>                           | マツ属             | 1   | 1      | 2   | 1   | 19  | 4      | 6   | 1   | 2 |
| <i>Abea</i>                                 | セイヨウ            | 1   | 1      | 2   | 1   | 10  | 6      | 4   | 3   |   |
| <i>Tsuga</i>                                | ツガ属             | 7   | 7      | 1   | 2   | 10  | 6      | 4   | 3   |   |
| <i>Pinus sabinii</i> , <i>Diploctylon</i>   | マツ属(日本松門東亞属)    | 11  | 18     | 4   | 6   | 35  | 39     | 16  | 17  |   |
| <i>Cryptomeria japonica</i>                 | スギ属             | 26  | 27     | 40  | 31  | 23  | 35     | 32  | 32  |   |
| <i>Sabicea virens</i>                       | シヤマツキ           | 3   | 1      | 1   | 1   | 1   | 1      | 1   | 1   | 1 |
| <i>Taxaceae-Cephaelosaceae-Cupressaceae</i> | イチイ科+イヌガサ科+ヒノキ科 | 1   | 4      | 11  | 8   | 2   | 5      | 5   | 5   | 5 |
| <i>Myrica</i>                               | ヤマモモ科           |     |        |     |     | 1   |        |     |     |   |
| <i>Juglans</i>                              | クルミ属            |     |        |     |     | 2   |        |     |     |   |
| <i>Pterocarya rhoifolia</i>                 | サワグルミ           | 1   |        |     |     | 2   |        |     |     |   |
| <i>Aleurites</i>                            | カバノリ属           | 3   | 2      | 2   | 3   | 2   | 5      | 3   | 4   |   |
| <i>Betula</i>                               | ハシバミ属           | 1   | 2      |     |     |     | 1      |     |     |   |
| <i>Corylus</i>                              | カエデ属            |     |        |     |     |     |        |     |     |   |
| <i>Carpinus-Ostrya japonica</i>             | タマシキ属+アザダ       | 1   |        |     | 4   | 2   | 1      |     |     |   |
| <i>Castanea crenata-Castanopsis</i>         | クリ-シキ属          | 13  | 12     | 19  | 14  | 37  | 15     | 14  | 24  |   |
| <i>Fagus</i>                                | ブナ属             | 5   | 1      | 3   | 1   | 3   | 3      | 3   | 3   |   |
| <i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>        | コナラ属+コナラ属       | 7   | 8      | 12  | 9   | 15  | 14     | 5   | 14  |   |
| <i>Quercus subgen. Cyclobalanus</i>         | コナラ属+カシ属        | 61  | 56     | 60  | 54  | 77  | 56     | 36  | 37  |   |
| <i>Ulmus parviflora</i>                     | ヨウラクウ           | 2   | 2      | 3   | 5   | 3   | 2      | 2   | 1   |   |
| <i>Grewia-Aphananthe caprea</i>             | エノキ属+ムクニキ       |     |        |     |     | 2   |        |     |     |   |
| <i>Zanthoxylum</i>                          | サンショウ属          |     |        |     |     | 1   |        |     |     |   |
| <i>Rhus</i>                                 | ウルシ属            |     |        |     |     | 2   |        |     |     |   |
| <i>Ilex</i>                                 | モチノキ属           |     |        | 1   |     | 1   |        |     | 3   |   |
| <i>Acer</i>                                 | カエデ属            |     | 1      | 2   |     |     |        |     |     |   |
| <i>Aesculus turbinata</i>                   | トチノキ            |     |        |     |     |     |        |     |     |   |
| <i>Vitis</i>                                | ブドウ属            |     |        |     |     | 2   |        | 2   | 1   |   |
| <i>Dorthemonea triquetata</i>               | ツリフネ            |     |        |     |     |     |        |     |     |   |
| <i>Ulmus</i>                                | グリ属             |     |        |     |     |     |        |     |     |   |
| <i>Diospyros</i>                            | カキ属             |     | 1      |     |     |     |        |     |     |   |
| <i>Styrax</i>                               | エゴノキ属           |     |        |     | 1   | 1   |        |     |     |   |
| <i>Olcocoxa</i>                             | エクセラ科           |     |        |     |     | 1   |        | 1   | 1   |   |
| <i>Prunus</i>                               | トネリコ属           |     |        | 1   |     |     |        |     |     |   |
| <i>Elaeagnus</i>                            | ソメイヨシノ属         |     |        |     |     |     |        |     |     |   |
| <i>Sambucus-Viburnum</i>                    | エワゼン属+ガマズミ属     |     |        |     | 1   | 1   | 1      |     | 2   |   |
| <i>Lonicera</i>                             | スイカズラ属          |     |        |     |     | 1   |        |     |     |   |
| Arboral+Nonarboral pollen                   | 樹木+草本花粉         |     |        |     |     |     |        |     |     |   |
| Moraceae-Urticaceae                         | クワ科+イタクワ科       |     |        | 3   |     | 1   | 1      |     | 2   |   |
| Rosaceae                                    | バラ科             |     |        |     |     |     | 2      |     |     |   |
| Araliaceae                                  | ウコギ科            |     |        |     |     |     |        |     |     |   |
| Nonarboreal pollen                          | 草木花粉            |     |        |     |     |     |        |     |     |   |
| <i>Typha-Spartanium</i>                     | ガマ属+ミクリ属        |     |        |     |     |     | 1      |     | 1   |   |
| <i>Sigillaria</i>                           | オモテナシ属          |     |        |     |     |     |        |     |     |   |
| <i>Oriza type</i>                           | イモ属             | 192 | 106    | 143 | 134 | 77  | 119    | 139 | 130 |   |
| <i>Cyperaceae</i>                           | イモ類             | 6   | 2      | 8   | 10  | 8   | 66     | 5   | 4   |   |
| <i>Orchis</i>                               | カヤツリグサ科         | 11  | 15     | 20  | 29  | 18  | 14     | 43  | 31  |   |
| <i>Anemone hortensis</i>                    | イボウラ            |     |        |     |     |     | 2      |     |     |   |
| <i>Monochoria</i>                           | シズアヤメ属          | 1   | 13     | 4   | 10  | 1   | 4      | 8   | 19  |   |
| <i>Humulus</i>                              | カラハシソウ属         |     |        | 1   | 2   | 2   |        |     |     |   |
| <i>Polygonum sect.</i>                      | タヌキソウ属          |     |        |     |     | 2   |        |     |     |   |
| <i>Polygonum sect. Persicaria</i>           | タヌキソウ属+ナエタケ属    | 1   | 1      | 1   | 1   | 5   |        | 5   | 4   |   |
| <i>Ranunculus</i>                           | ギンキョウ属          |     |        |     |     |     | 1      | 3   |     |   |
| <i>Papaver</i>                              | ソバ属             | 6   |        |     |     |     | 1      | 2   |     |   |
| <i>Popopryum</i>                            | アカガ科+ニシキ科       | 20  | 24     | 17  | 9   | 8   | 5      | 69  | 60  |   |
| <i>Chenopodiaceae-Amaranthaceae</i>         | ナデシコ科           | 3   | 1      | 1   | 3   | 2   | 4      | 4   | 5   |   |
| <i>Caryophyllaceae</i>                      | キンポウゲ科          | 7   | 1      | 2   |     | 5   | 3      | 3   | 10  |   |
| <i>Ranunculus</i>                           | アブリコソ科          | 3   | 4      | 1   | 2   | 5   | 2      | 9   | 2   |   |
| <i>Cruciferae</i>                           | ナス科             |     |        |     |     |     |        |     |     |   |
| <i>Violaceae</i>                            | ナズナ科            |     |        |     |     |     |        |     |     |   |
| <i>Amelanchier brevipedunculata</i>         | ノゾドウリ           |     |        |     |     |     |        |     |     |   |
| Osmagrasae                                  | アカバナ科           |     |        |     |     |     |        |     |     |   |
| <i>Holarrhena-Myriophyllum</i>              | アラントウ科+モクモク属    | 1   |        |     |     | 1   | 1      |     | 1   |   |
| Hydrocotylidae                              | チドリモチモリ科        | 16  | 13     |     |     | 7   | 3      | 6   | 9   |   |
| Apidome                                     | セリモチモリ科         | 1   | 4      | 1   | 3   |     | 1      | 1   | 1   |   |
| Liliaceae                                   | ソメイモ科           |     |        |     |     |     |        |     |     |   |
| Solanaceae                                  | ナス科             |     |        |     |     |     |        |     |     |   |
| <i>Plantago</i>                             | オオバコ属           | 2   | 2      | 2   | 6   | 1   | 1      | 3   | 9   |   |
| <i>Valerianaceae</i>                        | オミナシ科           |     | 1      |     |     |     |        |     |     |   |
| <i>Lecanoidae</i>                           | タンゴナモ科          |     | 1      |     |     |     |        |     |     |   |
| Asterodae                                   | モクモチ科           | 1   | 4      | 3   | 6   | 1   | 1      | 7   | 6   |   |
| <i>Artemisia</i>                            | ヨモギ属            | 63  | 31     | 27  | 29  | 48  | 17     | 30  | 46  |   |
| <i>Carthamus tinctorius</i>                 | ペニバナ            |     |        |     |     | 1   |        |     |     |   |
| Peri spore                                  | シダ植物物質          |     |        |     |     |     |        |     |     |   |
| Monosporite type spore                      | 单生孢子            | 6   | 12     | 3   | 6   | 28  | 5      | 12  | 6   |   |
| Trilete type spore                          | 三条孢子            | 3   | 8      | 4   | 7   | 19  | 2      | 6   | 1   |   |
| Arboreal pollen                             | 樹木花粉            | 144 | 147    | 164 | 153 | 241 | 178    | 181 | 154 |   |
| Arboreal+Nonarboreal pollen                 | 樹木+草本花粉         | 0   | 0      | 5   | 0   | 1   | 3      | 0   | 2   |   |
| Nonarboreal pollen                          | 草本花粉            | 334 | 223    | 235 | 269 | 198 | 255    | 339 | 349 |   |
| Unknown pollen                              | 不詳花粉            | 475 | 370    | 404 | 422 | 442 | 456    | 481 | 502 |   |
| Unknown spores                              | 不詳花粉孢子          | 2   | 3      | 1   | 1   | 6   | 5      | 5   | 5   |   |
| Penn spore                                  | シダ植物物質          | 9   | 20     | 7   | 13  | 47  | 7      | 18  | 7   |   |
| Holmich sops                                | 寄生虫卵            |     |        |     |     |     |        |     |     |   |
| <i>Aceria</i>                               | 同山脚             |     |        |     |     |     |        |     |     |   |
| <i>Trichuris</i>                            | 棘山脚             |     |        |     |     |     |        |     |     |   |
| <i>Metagonimus-Heterophyes</i>              | 糸形吸虫類           |     |        |     |     | 1   |        |     |     |   |



く、アカザ科—ヒュ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属、ミズアオイ属が伴われる。

上部群集（試料5・6） マツ属複維管束亞属の出現率が高くなることによって特徴づけられる。草木花粉ではソバ属が出現する。

### （3）寄生虫卵について

寄生虫卵はSD1071とSD1072の下部から回虫卵、鞭虫卵、異形吸虫類卵が検出された。

## 3. 花粉分析から推定される植生と環境

SD1071とSD1072では花粉群集が下部と上部に区分され、それぞれ対応するとみなされる。

以下、下部と上部の時期で推定を行い、地点間および寄生虫卵も含めて考察を行う。

### （1）下部の時期（SD1071試料3・4、SD1072試料7・8）

周辺はイネ科を主にアカザ科—ヒュ科、ヨモギ属の人里植物が分布していたと推定される。SD1071とSD1072はカヤツリグサ科、ミズアオイ属、タデ属サナエタデ節が生育し、水湿地か流水域の状況であったと考えられる。周辺地域の樹木要素は、カシ類（コナラ属アカガシ亞属）が多く、クリーシイ属、コナラ属コナラ並属などであったとみなされる。寄生虫卵が検出され、周囲が居住域であったことが考えられる。

### （2）上部の時期（SD1071試料1・2、SD1072試料5・6）

ソバ属の出現及びSD1071のチドメグサ属の増加、SD1072のイネ属型の増加からみて、周囲が畑作ないし水田の農耕地に変化したと推定される。従ってSD1071とSD1072は湿地の環境になったとみなされる。森林植生では、ニヨウマツ類（マツ属複維管束亞属）が増加し、二次林としてのマツ林が成立する。なお、寄生虫卵が出現せず、周囲が人口の密集する居住域ではなくったことが示唆される。

### 参考文献

企子清俊・谷口博一「擬形動物・寫形動物」『医動物学 新版臨床検査講座』8 医書出版社 1987

金原正明「花粉分析法による古編成復元」『新版古代の日本 第10巻古代資料研究の方法』角川書店 1993

金原正明・金原正子「花粉分析および寄生虫」『藤原京跡の便所遺構—藤原京7条1坊—』奈良國立文化財研究所 1992

島崎二郎「日本植物の花粉形態」大阪市立自然科學博物館収藏目録第5集 1973

中村純「花粉分析」古今書院 1973

中村純「イネ科花粉について、とくにイネ(Oryza sativa)を中心として」『第四紀研究』13 1974

中村純「稲作とイネ花粉」『考古学と自然科学』 第10号 1977

中村純「日本産花粉の被微」大阪自然史博物館収藏目録第13集 1960

Peter J. Warnock and Karl J. Reinhard 「Methods for Extracting Pollen and Parasite Eggs from Latrine Soils」『Journal of Archaeological Science』19 p231-245 1992

## II. 平城京第377-1次調査における珪藻分析

株式会社 古環境研究所

### 1. 方法

- 1) 試料を乾燥重量を秤量する。
- 2) 10%過酸化水素水を加え、加温しながら、1晩静置する。
- 3) 上澄みを捨て、水洗を行う。
- 4) 1.5時間静置後、上澄みを捨てる。この操作を5、6回繰り返す。
- 5) マウントメディアによって封入する。
- 6) 生物顕微鏡で600～900倍で検鏡し、直接視野法により計数を行う。

なお、通常統計上有効である200個計数するには、 $2.0 \times 10^5 / g$ の出現密度が必要である。

## 2. 結果と考察

S D1071は微量の珪藻殻が検出され、S D1072からは検出されなかった。S D1071では沼澤地付着生種の *Gomphonema acuminatum*、広適応性、耐汚濁性、陸生珪藻である *Hantzschia amphioxys*、海生ないし汽水生種の *Mastogloia* sp.、好酸性の *Pinnularia* sp.、底生性の *Stauroneis anceps v. siberica*が出現した。珪藻殻がほとんど得られないことから、珪藻の生活が制限されるような条件であったと考えられる。陸生珪藻および好塩性の珪藻の出現からみて、S D1071は湿地から乾燥した環境ないし乾燥を小刻みに繰り返す環境、そして、塩分濃度がかなり高かったことがあげられる。S D1072ではより条件が悪く、珪藻が生活できなかったと考えられる。

花粉分析の結果から S D1071と S D1072内が水湿地植物の生育する水湿地から湿地の環境であることが示唆されることを考慮すると、これらの溝内は塩分濃度が高く、たびたび乾燥化が行われる水湿地ないし潟地の環境であったとみなされる。

### 参考文献

小杉正人「陸生珪藻による古環境解析とその意義—わが國への導入とその展望—」『植物研究』第1号 植物研究会 1986

Hustedt, F., Bacillariophyta, in Paecher, A.: Die Süßwasser-Flora Mitteleuropas.

Platt 10 Gustav Fischer, Jena, 416p. 1930

Patric, Reimer, C. W. The diatom of the United States, vol.1. Monographs of Natural Sciences of

Philadelphia, No.13, The Academy of Natural Sciences of Philadelphia, 614p. 1966

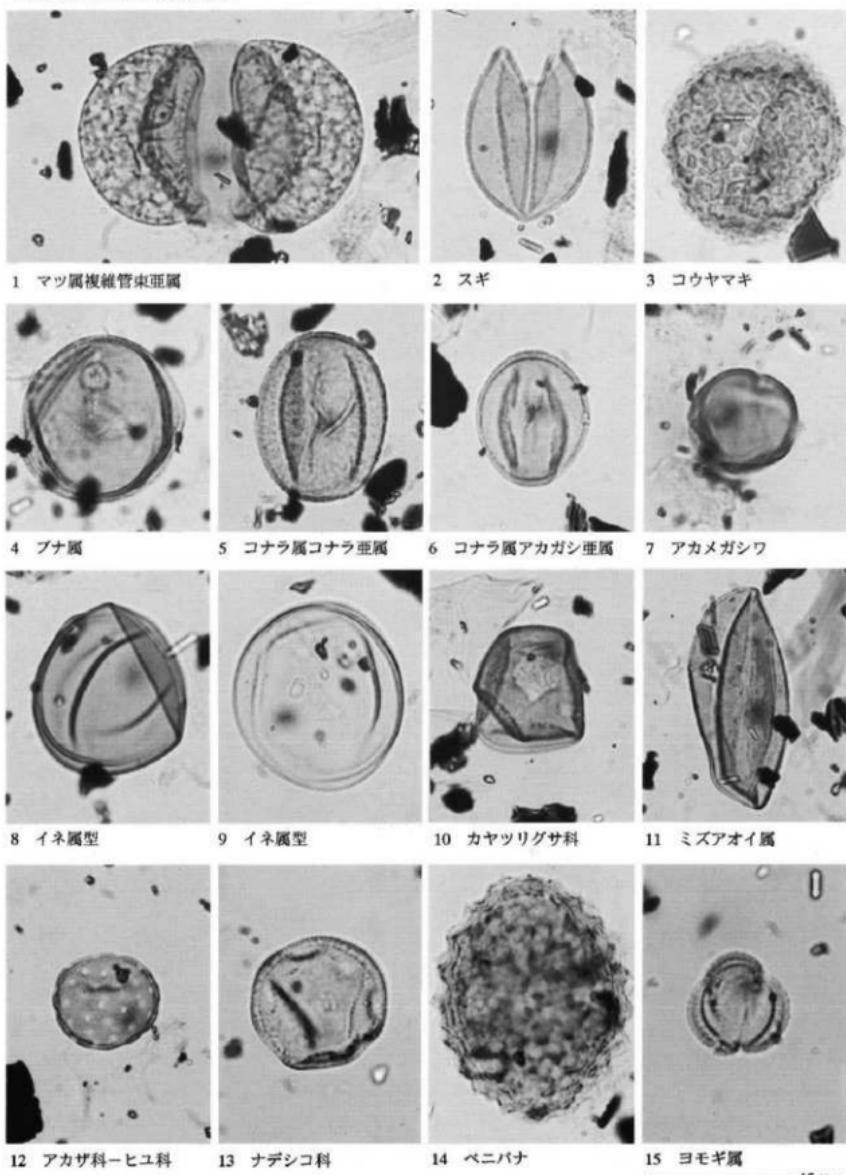
Patric, Reimer, C. W. The diatom of the United States, vol.2. Monographs of Natural Sciences of

Philadelphia, No.13, The Academy of Natural Sciences of Philadelphia, 213p. 1975

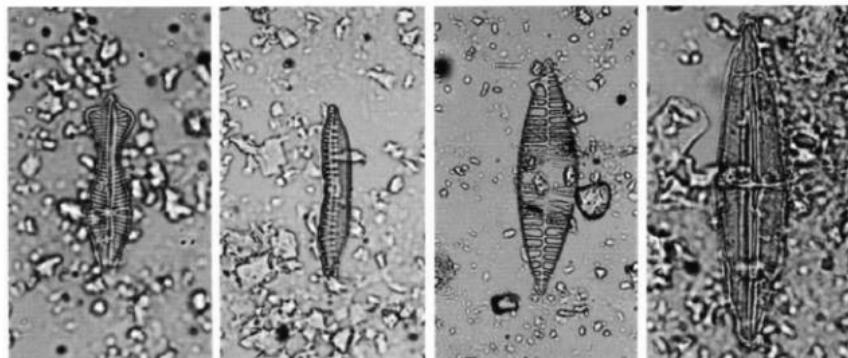
表 平城京第377-1次調査による珪藻分析結果

| 分類群   | S D1071       |               |               |               | S D1072 |     |     |     |
|---|---------------|---------------|---------------|---------------|---------|-----|-----|-----|
|   | 1             | 2             | 3             | 4             | 5       | 6   | 7   | 8   |
| クサビケイソウ属<br><i>Gomphonema acuminatum</i>          |               |               |               | 1.0           |         |     |     |     |
| コヨミケイソウ属<br><i>Hantzschia amphioxys</i>           |               |               |               | 2.0           |         |     |     |     |
| マストグロイア属<br><i>Mastogloia</i> sp.                 | 1.0           | 1.0           |               | 2.0           |         |     |     |     |
| ハネケイソウ属<br><i>Pinnularia</i> sp.                  |               |               | 0.5           |               |         |     |     |     |
| ジュウジケイソウ属<br><i>Stauroneis anceps v. siberica</i> |               |               |               | 1.0           |         |     |     |     |
| 合計  | 1.5           | 1.0           | 4.0           | 2.0           | 0       | 0   | 0   | 0   |
| 同定不能破片  | 5             | 0             | 5             | 3             | 0       | 0   | 0   | 0   |
| 試料 1 g 中の殻数                                       | 2.0           | 2.0           | 4.0           | 2.0           | 0.0     | 0.0 | 0.0 | 0.0 |
|   | $\times 10^3$ | $\times 10^3$ | $\times 10^3$ | $\times 10^3$ |         |     |     |     |
| 完形殻の割合  | 1.5/6.5       | 1/1           | 4/9           | 2/5           | 0/0     | 0/0 | 0/0 | 0/0 |

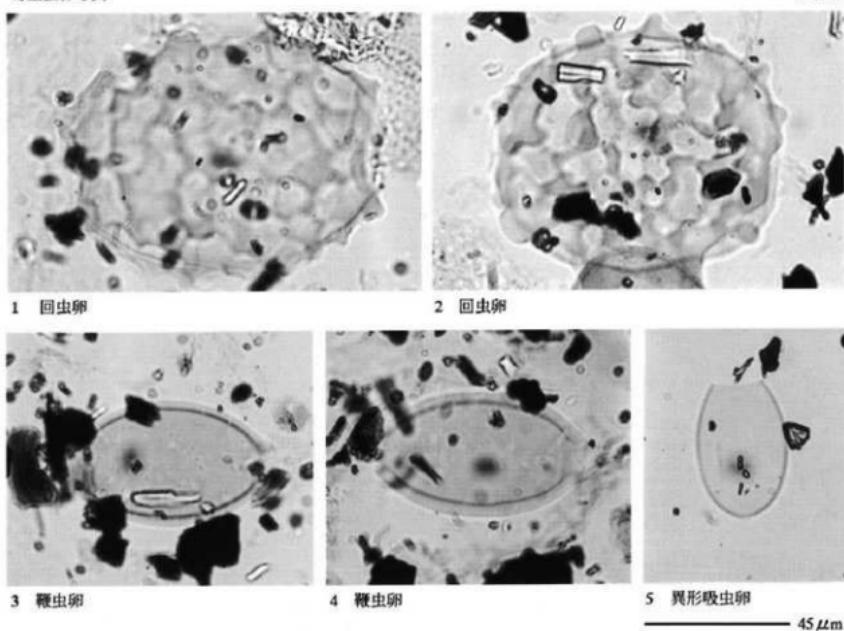
平城京第377次調査の花粉遺体



平城京第377次調査の珪藻分析写真



寄生虫卵写真



奈良市埋蔵文化財調査概要報告書

(第一分冊)

平成9年度

平成10年3月26日印刷

平成10年3月31日発行

編集発行 奈良市教育委員会

(奈良市二条大路南1丁目1番1号)

印刷 株式会社 昭文社

(奈良市柏木町176番地1号)

